
ネギま！で斬魄刀

こごろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！で斬魄刀

【Zコード】

Z0818V

【作者名】

ひるひ

【あらすじ】

BLEACHの能力を持つた男オリ主がネギま！の世界で大暴れ！（予定） 大戦期編終了 現在、総本山謀反編。 転生モノではありません。

第一話

「ラス帝国。

闘技場にて二人の男が向かい合つ。

一人は褐色の肌を持ち、身の丈一メートルを越す大男。もう一人は腰に刀をぶら下げた少年だ。

「さあどうどうの時間がやつてまいりました！」　本田のメインデッショウ、ジャック・ラカンVS五木大和！　これまでの戦績は大和選手の全勝！　ラカン選手は今日こそ雪辱を晴らすのか！？

その司会者の言葉を聞き、大男・ジャック・ラカンはニヤリと笑う。

「そうこうことだ。今日こそ今までの借りを返してやるぜ」

「……くそっ、毎度毎度めんどくせえ」

闘気に満ち溢れたラカンとは違い、大和の顔にはやる気のかけらもなかつた。

（これでコイツと戦うのは何度目だっけか、嫌な奴に目を付けられたな）

「それでは、試合開始！」

「ハシャあー 行くぞコカラー！」

チンピラのような声を上げて突つ込むラカン。

体格は子供と大人ほど差がある。勝負など田に見えているが、

「相変わらず荒っぽい拳打だ」

ラカンの放った右ストレートは大和の左手によりあっさり逸らされる。

オマケに右の掌底がラカンの脇腹に食い込んでいた。

「くつ、『白打』か！」

「喋ってる暇はねえぞ」

そのままの流れで肘、膝、踵などの体中ありとあらゆる部位を使い、適切にラカンの急所めがけて攻撃を繰り出す。

が、ラカンはそれらの攻撃を無視。

顎などの意識が飛びそうな部分のみ防御し、他は筋肉の鎧で防ぐ。

多少のダメージは覚悟の上で、ひたすらに大和に向かつて攻撃する。体格差にものを言わせた強引な戦術だが、それは今のところ功を奏していた。

「ハツハ！ そんなまっちょろいパンチは効かねえなあ！」

「つこの筋肉、ダルマが！」

大和は思わず舌打ちする。こんな雑な拳は一日中だってしのぎ続け

る自信はあるが、そんなめんどくさいことは勘弁してほしい。

(とつと決めるか)

ラカンの上段蹴りをしゃがんでかわし、初撃と同じ、脇腹への掌底。だがラカンに致命傷は「えられない。それどころかチャンスとばかりに身を乗り出してくる。

そして、

「破道の三十三 蒼火墜」

「おほ？」

脇腹に触れている右手から蒼い波動が吹き出し、ラカンを飲み込んだ。

間抜けな声を残して飛んでいったラカンはそのままの勢いで観客席を覆っている結界に直撃。大男が目の前に飛んでくるといつ衝撃映像を間近で見た観客は悲鳴を上げた。

「な、なんという力量でしょうー 五木選手、これで七度田のチャンピオン防衛！ どうかラカン選手は生きているのか！？」

大和もこれで終わったな、と思い、退場しようと踵を返す。

だが、

「おいおい、どこ行く気なんだ？ ヤマト」

振り向いた先には体のあちこちが焦げた、しかしままだ戦えそう

な様子のラカンが立っていた。

「な、なんとラカン選手、未だに戦闘継続の意思を見せていい！
本当に人間かこの人！？」

程度の差こそあれ、大和も同じ意見だった。

（詠唱破棄とはいえ、蒼火墜をゼロ距離で受けてこのダメージ……
本当にコイツ人間か？）

「こんな楽しい闘い、あっさり終わらせてたまるか！　アデアッ
トオ！」

懐から出したカードが光り、次の瞬間には無数の剣へと変化してい
た。

「さあ、テメーもどつとその刀を使いやがれ！」

あからさまな挑発。だが大和はそれに乗ることにした。
最も、正々堂々と闘いたいなどと思っているわけではなく、早くこ
の勝負を終わらせたい、と考えているだけなのだが。

「いいだろう、すぐに終わらせてやらあ」

そう言って、刀を腰から取る。

黒い鉄掠えの鞘で包まれた刀はただの日本刀にしか見えず、そして
実際その通りである。

多少頑丈に造られたという特徴以外は普通の、名すらない日本刀。
しかし、大和が使用するとなると、また別の意味を持つ。
大和は刀を鞘から抜き放ち、

「霜天に坐せ」

解号を唱えた。

「 氷輪丸！」

第一話（前書き）

こんな駄文に感想を頂けたことが非常にうれしく、つい続きを書いてしまいました。

第一話

(やつと刀を使わせることができたか)

ラカンは急激に下がった気温に身を震わせた。

これまでにチャンピオンである大和とは七回戦つたことがある。

その七回全てにおいて完敗したが、以前に一度だけあの刀を使わせたことがあった。

だが、そこから先は勝負にすら、ならなかつたのだ。

その時のラカンの記憶は曖昧だった。

ただ覚えているのは、今のように急激に気温が下がつたことと、突如巨大な氷の竜があらわれ、自分に向かつて大口を開けていたことだけだ。

そこから記憶は途切れ、気が付けば医務室で治療魔法を受けていたという体たらく。

医者が言つには氷の竜が一瞬でラカンを呑み込み、氷漬けにしたといふ。

(あれから死ぬ思いで修行した。アーティファクトも手に入れた。もうあの時みたいな無様は晒さねえ!)

ラカンの新しい力『千の顔を持つ英雄』。

その力はありとあらゆる武具、防具を作り出す」と。

「喰らいやがれ、ヤマトオ！」

そのアーティファクトはラカンの意思を正確に受け取り、無数の武具となつて大和へと飛んだ。

氷輪丸　その名を呼んだ瞬間に世界は変わった。

自身が所有する数多の斬魄刀の中でも、氷輪丸はかなりの上位に位置する。

その力は天候をも左右し、冰雪系最強の名にふさわしい。未だ始解だということにも関わらず、現れた氷の竜の威圧感により氣の弱い観客は氣絶している。

（アーティファクトを手に入れやがったか。だが、そんなもん関係ねえ。もう一度氷漬けにしてやる）

「　行け、氷輪丸」

主の指示を受けた氷の竜は、敵を打倒すべく飛翔する。

ラカンから放たれた武具はそのほとんどを凍らされ、呑み込まれ、破壊されていった。

そのままラカンがいたところ一帯を氷の海にするが、
(手応えがない……?)

敵を捉えた感覚がないことに一瞬困惑する。

そして、背後からの殺氣。

振り向いたそこには、ラカンの巨体を隠すに十分なほどの大剣。

(「コイツ、大剣を隠れ蓑に」)

「つおらああああああああつっつーーー！」

大和が見せた一瞬の隙。それをラカンは見逃さずにアーティファクトを再展開し、渾身の力をこめて投擲した。

「つ、縛道の八十一　断空！」

間一髪、断空が大和の前に展開され、武具の群れをくい止める。八十番台の鬼道なだけあって貫通したものはないが、それでも何本かが突き立つ。

(この前より力が格段に増してやがる。コイツはビビの戦闘民族だ！)

だが、この奇襲が成功しなかった時点で、ほぼラカンの負けは決まっていた。

「氷輪丸！」

初撃をかわされた屈辱からか、怒りの咆哮をあげて再びラカンに向かう氷輪丸。

「あつ、やば」

渾身の力をこめた分、技後硬直も長くなり。

全てを言い切る前に、ラカンは氷輪丸に飲み込まれた。

「……はつ、わ、私としたことが、あまりの試合展開に我を失つておりました！ ラカン選手は新しく手入れたアーティファクトにより善戦したものの、大和選手の氷の竜により惜しくも飲み込まれてしましました！ というか本当に大丈夫なんですか、あの人！？」

大和は斬魄刀をひと振りし、氷山のようになつている一角から背を向けて歩きだした。

「え、えー、とりあえず勝者、大和選

」

バキンッ！――！

「まだだああああああああつつ！――！」

誰もが勝負が終わったと感じていた。

あの氷山から抜け出すことなど不可能だと誰もが思っていた。

だが、ラカンは諦めない。

『千の顔を持つ英雄』の持つ特性。武具だけでなく、防具にもなれることが。

氷輪丸に飲み込まれる寸前に、自身の持つほぼすべての氣と魔力を使って、自分に創り出すことができる最大級の鎧を開いたことに気づいた観客はいなかつた。

「届きやがれええつ！！」

最早自分に力はほとんど残っていない。この攻撃が直撃しても大和を倒すことはできないだろう。

だが、それでも意地がある。このまま終わってたまるものか。

大和はまだ背を向けている。今ならば一撃を。

そして、大和がようやく振り向き、目があつた瞬間、ラカンの本能が最大限の警鐘を鳴らした。

「一度は食らわねえ」

射殺せ

神鎗しんそう

奇襲をかけたつもりが、奇襲をかけられた。

大和の脇腹の横から伸びてくる刀を見たラカンの心情はそれだ。

ラカンがその攻撃をかわせたのは奇跡に近い。自分の本能に従つて横に飛ばなければ、今頃串刺しになつていた。

「ちつ、かわしやがつたか

「ちよ、お前、ヤマト！ 今のはよけなかつたらマジでやばかったぞ！？」

「ん？ ああ、大丈夫だ。てめえならかわせると信じていた

「今さつきお前『ちつ、かわしやがつたか』って言つたうが！」

「縛道の六十」 六杖光牢

「つおいつ！？」

力尽きて動けないラカンを、さらに縛道で拘束する。

「つかお前その刀の能力は一つじゃねえのかよ！ そんなの反則だろうが！」

「そんな」と言つた覚えはねえし、第一テーマが言つた

正論である。

「散在する獸の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪 動けば風 止まれば
空 槍打つ音色が虚城に満ちる」

「やなこつた。破道の六十三
雷吼砲」

こうして、後々にまで語られる、ジャック・ラカンVS五木大和の八回目の闘いは幕を下ろした。

主人公設定

名前：五木大和
イツキヤマト

年齢：15

身長：159

外見：碎蜂を男にしたような姿。男としては小柄だが、特にコンプレックスはない。服装は死覇装。羽織は無し。

性格：かなり口が悪い。初対面の人間に對しても口が悪い。唯一、
詠春にだけ敬語もとぎを使う。

見ず知らずの人間のために戦うことを嫌う。

能力：複数の斬魄刀を使用する（この世界では、五木家の秘術により呼び出した斬魄刀の本体を精神世界で屈服させることにより使用可能となる）。

鬼道、白打、歩法もかなりの高水準で修めており、オールラウンダーハンター。

ただ、本人はあまり斬魄刀を使いたがらず、できる限り鬼道、白打、歩法で戦うように心がけている。

鏡花水月、虚化は使用不可。

出生：京都の神鳴流の配下である五木家の嫡男。五木家の斬魄刀の力は強大だが、下位の斬魄刀ですらほとんどの人間は屈服させることはできない。幼少期のころ詠春に面倒を見てもらったので、他の人間に比べてだが詠春のことを信頼している。

「さて、旅にでも出るか」

ヘラス帝国の某所にある宿屋、その一階の部屋で大和は決意した。この国に来てからすでに半年ほど経過している。

初めて出た拳闘士の大会で優勝してからチャンピオンの座は譲つてない。そのおかげで得たファイトマネーはかなりの額になった。旅の途中で路銀が尽きたことにより、この国で拳闘士なんていう職に就くはめになり、戦闘民族の筋肉ダルマに絡まれたりしたのも今ではいい思い出……になるわけがなかつた。

「……わかつたこの国を出よつ」

何故だか嫌な予感がするのだ。

筋肉ダルマにリベンジを挑まれてもめんじくさい。手早く荷物を纏め、一階で宿屋の女将にチョックアウトしてもちらおうと扉に手をかける。

コンコン。

今まさに扉を開かんとしたところで、ノックの音が室内に響いた。

「あのー、すみませーん。こひが五木様のお部屋だと聞いたのです
がー」

「……」

嫌な予感がどんどん膨らんでいく。大和のこの手の直感は外れたこ

とがない。

(さて、どうするかね……)

そして大和は決断した。よし、居留守を使おう。
抜き足でベッドまで移動し、寝転ぶ。

「あれー、いないんですか？ 困ったなあ、王様直々の招待なのに」

(王様直々の招待い？ 面倒)との臭いしかしねえ)

その後、数分間ノックと呼び掛けが続いたが、徹底的に無視した。
時が経つほどに廊下からの声が涙声になつていつたが、無視した。
大和は図太い。

そしてやつと諦めたのか、鬱陶しいノックと声が消えた。

「さて、行くか」

扉を開けて廊下に出る。

階段を降りてチェックアウトをすまそと歩きだした大和だったが、
その階段から女将と騎士姿の女が上がつてくるのを見て動きを止め
た。

「　　……」「

なるほどビ、女将の手にはマスターキー。それで開けようとしたわけ
ね。

大和はヒターンして部屋に入り、流れるような動作でベッド動かし

て扉を封じた。

「え、あ、ちょっと！ 五木さん！
お願ひします、開けてください！」

バンバンと叩かれる扉。知らねえな。

「お願いしますー！ 貴方を連れていかないと、今月のお給料カツトされちゃうんですよー！」

「へえ、大変だね。」
「それじゃ窓から出るか。」
「というよりなんで最初からそうしなかったのだろうか。」

「来てくれないと、病気の妹の治療代にするはずのお給料がカットされてしまうんですー！」

「そうか、だが断る」

「ふええええええー!?

宿泊費を部屋に残し、やあいざ脱出といつ段になつた時、部屋の扉がベッド上と吹き飛んだ。

「へおらアソタ！ こんなかわいい子泣かしてんじゃないよ！ 男なら男らしくひとつと城にでも行つてきな！」

おい、女将がこんな武闘派だなんて聞いてねえぞ。

その後、糺余曲折を経て、結局俺は王城に行くことが決まった。

何なんだよ、あの女将の理不尽な強さは……。

第四話

王城にて。

「おい、お前が城下で噂になっている闘技場チャンピオンなのか！」
？」

（……今起こうつたことをありのまま話すぞ。ヘラス帝国の皇族に呼び出しひくらつたかと思えば、いきなり幼女に絡まれた。何を言っているのかわからんと思うが、俺にも状況が理解できない。筋肉ダルマだとか、最凶女将だとか、そんなもんじゃあ断じてねえ。ヘラス帝国の恐ろしさの片鱗を味わつたぜ……）

つまるところ、大和は混乱していた。

「へえ、つて」とはこのガキも皇族だったのか

「ガキじゃないのじゃ！　テオドラなのじゃ！」

「あわわわわ、皇族にタメ口……お給料カット……懲戒免職……きゅう」

宿屋での騒動の後、王城へと招かれ（連行され）た大和は、城門前にてテオドラ第三皇女に捕まつた。

最初の剣幕から、てつきり決闘でも申し込まれるのかと思ったのだが、実はテオドラは大和のファンらしく、この前のラカンとの試合

も特等席で見物していたそつだ。

「あれは闘技場の歴史に残る素晴らしい闘いじゃった！ 特にあの筋肉ダルマが障壁に叩きつけられたあたりが最高に興奮したぞ！」

「お、結構話がわかるじゃねえか。よし、サインくれてやろひ」

「本当か！？」

「ああ、せりふ中向ける」

大和はどこからともなくマジックトイキ（極太）を取り出し、テオドラのドレス（純白）の背中にでっかく『大和魂』と書いた。

「やつたのじやー！ これで他のファン達に見渡せるのじやー！」

「記念すべきサイン第一弾だな」

「フレミア、じゃーーー！」

「ああ……三百万ドルクマのドレスが……特攻服に……」

テオドラと放心している女騎士に連れて、大和は謁見の間に案内された。

どうでもいいが、テオドラが先導するので背中の文字がいちいち田

に付き、その度に笑いを堪えるのに苦労した。

大和のイメージでは、謁見の間というと玉座の周囲に偉そうな将軍や大臣などが並んでいる、といったものだつたが、驚いたことにその場には皇帝しかいなかつた。

(警備とか大丈夫なのか?)

一応周辺の気配を探つてみたが、玉座の陰で忍が守つているわけでもなく、今の皇帝は本当に無防備だ。

そんな大和の困惑が伝わつたのか、

「ふむ、警備がないことを気にしているのかね？ 簡単な話だ。そなたが私の命の狙つたならば、たとえ警備がいようがいまいが関係なかろ？ 私もあの鬪いは見物させてもらつたからな」

皇帝は笑いながら語つた。警備の者たちも、大臣たちなどの側近も全て下がらせたのだと。

「そなたの性格は調べさせてもらつた。私は気にしないが、皇族に普段と同じような対応をされると必ず側近たちと衝突するであろう」

大和はため息をつく。

(……やりづれえ相手だ)

「で、わざわざ俺を呼びつけたのは何の用だ」

尋ねてはみたものの、連合との戦争が迫つてゐるこの状況で、それ

を察するなという方が難しい。

「つむ。そなたを呼んだのは他でもない、我らと共に連合と戦つてほしいのだ」

「断る」

俺の横では、テオドラが話についてこられずに疑問符を浮かべており、女騎士は未だに魂が抜けていた。

「……即答か。予想はしていたのだが、一応理由を聞かせてもらつてよいかな?」

「俺は俺の為だけに戦う。誰かに戦う理由を預けたくない。誰かに戦う言い訳にしたくない」

「ふむ、そうか」

皇帝はひとしきり顎鬚を撫で、

「ならば仕方がないな。五木殿、わざわざ来てもらつて悪かつたな

(? 意外とあっせん引受けたな)

だが、もとより引き受けの気はない。しかしとしても好都合だった。

「ああそうだ、これは先程の話とは別口なのだが

「……何だ?」

「テオドラの護衛を引き受けはくれんか？」

「「はあ？」」

皇帝の提案に俺とテオドラはそろって間抜けな声をあげた。女騎士は以下略。

「別に戦場に出てくれなどと言つつもりはない。ただ、もうそなたにもわかっているだらうが、テオドラは少々奔放に育つてしまつてな。信のおける田付け役が欲しいと考えていたのだ」

「俺が信用できるといっ！」

「これでも皇帝だ。人を見る田は持つているつもりであるし、そもそも悪人にはテオドラは懐かん」

（なるほど……さつままでの戦争云々の話は、俺にこの話を断りにくくするためのものか……）

ボリボリと頭を搔ぐ。

ちらりと横を見れば、テオドラの魂まで抜けかけていた。

再びため息をつく。やはりやりづらっこ相手だ。

「わかった。引き受けよ！」

「うむ。娘を頼んだぞ」

そのまま謁見の間を出ようととして、一いつの屍が立っているのを放置するわけにいかない」とに気付き、三度ため息をついた。

第五話

SIDE：紅き翼

現在、ナギ・スプリングフィールドは欲求不満だった。

ただし、エロい意味ではなく、強者との戦いに餓えているという意味だが。

自分の力を試すために故郷を飛び出し、連合側として戦争にも参加しているが、未だに心が奮えるような戦いは経験していない。

そして、そのことを仲間たちに相談すると、サムライマスター」と青山詠春が野営地で聞き捨てならないことを言つた。

「圧倒的強者が・・・・俺には一人、心当たりがあるな」

「マジか詠春！？」

「ああ。俺と同郷でな、年下なのに結局一度も勝てなかつた」

「貴方が一度も、ですか？」

流石にその事実にはアルビレオ・イマも聞き逃せなかつた。

詠春の実力は仲間である彼らも十分把握している。

リーダーのナギには一步劣るが、それでも実戦形式の模擬戦をすれば五回に一回は詠春が勝つ。

その彼が過去一度も勝てず、しかも自分とそう変わらない歳だと聞いたナギのテンションは上がった。

「なあなあ、もっとそいつのこと教えてくれよー。」

「そうですね、私も興味があります」

「お前らな・・・・・ゼクト殿のように食料調達してこいとまでは言わんが、少しくらい野営の準備を手伝つたらどうなんだ」

ちなみに詠春は先程から鍋料理の支度をしている。

「わかつたつて。後で俺たちがテント作るからよ、今はそいつのことを教えてくれ」

そう言われ、詠春は少し考えて説明した。

「俺の住んでいた京都では『鬼道』『白打』『歩方』そして『斬魄刀』という四種類の戦い方があつてな、その中の一つでも極めれば一流と言われている」

「ふむふむ」

「そして彼、五木大和はその全てを極めたらしい」

詠春がそう説明すると、アルビレオは『ああ。なんだ、ただのバグか』という顔をした。

「そしてその中でも『斬魄刀』というのは特殊でな、五木家にのみ伝わっている戦闘技能だ。解号を唱えると、その解号の種類によつ

て刀の性質が変化する。Jの性質变化には「一段階あつて、一段階目の性質変化は『始解』、二段階目の性質変化は『正解』と謂われているんだ。彼はJまで到達したらしく」

「ほりまひ」

「ちなみに『始解』の状態で既に手が付けられないから、俺は『正解』を見たことがない。戦闘力が五倍から十倍に変化するらしいが」詠春がそう説明すると、アルビレオは『ああ。なんだ、バグじゃなくてチートか』といふ顔した。

「なるほどなるほど」

「…………ナギ、貴方は本当に理解しているのですか？」

「むうー……とにかく強いんだろうーー?」

アルビレオはため息をつき、詠春は『俺は説明が下手なのだからとかと落ち込んだ。

「喜べお主ら、美味いドライゴンが狩れたぞ…………って、何じやJの空氣は」

そしてこの数十分後に新たな仲間、ジャック・ラカンがやってくることを、まだ誰も知らない。

SIDE・大和

「おこヤマト！　あれは何なのじゃー…？」

「あれはホツトドック屋。安くで、早くで、まよい。俺もよく世話になつた」

「そうですね、私も給料日前にはよく助けられました」

大和とテオドラと女騎士は城下町をぶらついていた。

大和が皇帝直々に依頼を受けてから、既に一ヶ月が経過している。

いくら戦争中といつても、皇女の身が危険に晒される事態などそうそう起つのはずもなく、これは楽な仕事を手に入れた、という大和の考えは初日に潰された。

もちろん、どこから捻り出してんだ、と言いたくなるほど元氣であちこちに引っ張り回すテオドラのせいである。

別に子供が多少やんちゃするくらいならば、大和にひとつといつともないが、テオドラのそれはそんな可愛いものではない。

（龍樹に向かつて石を投げた時はマジで頭を握り潰そつがと思つたな）

ちなみに龍樹といつのはハラス帝国の守護聖獸であり、まいひつとい

なき最高戦力だ。

なぜこんなことをしたのかと優しく（頭をわしづかみしながら）尋ねると、大和の氷輪丸と龍樹が戦っているところを見たかったらしい。

正直に答えたので『テ』『ピン』三発で許してやった。半泣きになつたが。

「おお？　あの看板が裸の女性の店はなんじや？」

「はっ、み、見てはいけませんテオドラ様ー！」

「ああ、あの店は

「ヤマトさんも説明しないでくださいー！」

一通り町を見て回り、疲れたから背負ってくれといつテオドラの要求を却下して喫茶店で休むことになった。

そこそこの値段の料理をバイキングの如く食べ散らかすテオドラと、『大丈夫・・・・・きつと経費で落ちるはず』と呟いていた女騎士の表情が対照的だった。

（こんな時間も久しぶりだな・・・・・・）

大和にとつて、この国での生活は路銀を稼ぐためのものであり、今日のように観光気分で町を歩いたことはない。そのせいか、半年も暮らしていた町だとこいつの「ビビ」が新鮮に感じていた。

皇帝の策に嵌まっている自覚はある。

だが、それでも、大和はこの国とテオドラたちに、愛着のようなものを持ちはじめていた。

(間抜け)

自分を罵倒しても何も変わらない。

ふと、大和は周りから向けられている視線に気がついた。

大和たちのテーブルは周りから浮いていた。

闘技場チャンピオンと、騎士と、フードファイトの如く食べ物を飲み込む少女が同席しているのだから、ある意味当然とも言えるが。

「テオドア・・・・・・テオ様、あまり急いで食べられるとお体を壊されますよ」

「むぐむぐ」

「いや、むしろひとつと食べ。速攻で食い終われ」

「むぐ?」

「ヤマアミゴー。」

「周りの奴らに注目されたり。」のまじめなやつた。

「むぐ

状況を理解したのか、スパートをかけるテオドラ。

しかし、

「むぐつーー。」

「わっ、テオドラ様ーー!? 誰か水をーー！ テオドラ様に水をーーー！」

おいらんかやばーー待てあれってテオドラ様じゃないのが本当か俺にも見せう間違いないあの騎士もテオドラ様つて言つていたぞ。

見事に喉を詰まらせたテオドラを中心へ、騒ぎが広まっていく。

(なにやつてんだ、俺は……)

びつじつひつなった。

「ん・・・・・う、ん？」

「やつと起きたか」

寝起きでボーッとする頭を振る。少しして記憶が段々と戻ってきた。
そして今の自分の状況に気づいて愕然とする。

男としては小柄だが、意外と筋肉質な背中。それが目の前にあつた。ようするに、大和に背負われている。

「ん、これが？あの女騎士に『貴方のせいなんですから、責任取つてください』って言われてな」

……そういえば、シーラヌはどうなのじゅ？」

「シーラヌ？ 誰だソイツ」

お主は一用も共に行動しておいで、名前も知らんかったのか……」

「ああ、あの女騎士か」

もう既に大和の中では女騎士で定着していた。

「あいつなら店で騒いだ謝罪とかしてやる。お前が皇女だつてことも
ばれたからな」

で、と大和は続ける。

「あー、その、あれだ……悪かつたな。けしかけたりして」

「……」

テオドリフ、喉を詰まらせた時以上の衝撃が走った。

皇族に対しても普段の調子を崩さぬ、この不遜な男が、普通に謝つている。

「……」

「……」

「……何か言えよ

「お主、大和の偽者か?」

大和は脱力した。

(久しぶりに素直になつてみればこのザマだ……)

やはり自分にこいつのは似合わない。そのことを再認識した。

そのままなんとなく会話がなくなり、無言で城へと歩き続ける。

「なあ、テオドリフ」

「なんじゅ？」

素直になつたつこでし、前から疑問に思つてこた」とを尋ねる。「

にした。

「お前、俺に戦場に行かつて言わないんだな」

「ああ、そのことか

「ふむ、トホドリは考え込む。

「ナツヅヤな、眞つてみれば勘じや」

「勘だとへ。」

「ひむ、わらわの女の勘が世間のじや。お主を安易に戦場へ連れて行くべきではないとな」

「……」

黙然とした。そして、そのまま笑いが上りしきった。

「ふむ、へへ」

「ヤマテア」

「こ、いやなんでもない。それにしても勘か……やつか

「む、からかつておるのか？」

「いいや。素直に、お前は凄いなって思つただけだ」

背中でまたテオドリフが驚いたのを感じる。

「今日せよヘヤマトに驚かされた日じやな……」

「お互い様だろ」

そのまま一人して笑こ笑ひ。

「一回だけ」

「え？」

「一回だけ戦場に出よつ。なんだつて、『紅き翼』だつたか。そいつを一回だけ追つ払つてやる」

「……本当か？」

「嘘は言わん」

少しの間、沈黙が一人の間を支配した。
そして、

「頼む」

テオドリフは頭を下げる。歎すべき民のために。

いりして、一回だけの契約が結ばれた。

第五話（後書き）

戦闘シーン……次こそ……

第六話（前書き）

主人公無双、ではなくテオ無双回。纏めきれなかつた……

第六話

S H D E · 紅き翼

目の前にそびえる建築物、グレート＝ブリッジを前に、連合の兵士たちの士氣は最高潮になつっていた。

「今日こそグレー＝ブリッジを帝国の奴らから奪い返すぞ！」

「連合の底力を見せてやる！」

「俺たちには『紅き翼』がついてんだ！ 恐れることはねえ！」

兵士たちの口から度々『紅き翼』といふ言葉が出る。

赤毛の少年、ナギ・スプリングフィールドをリーダーとする戦闘集団。

これまでの帝国との戦いにおいての活躍は目を見張るものがあり、個人の戦闘力は尋常ではない。

さらに、新メンバーとしてジャック・ラカンが参入したことにより、尚更手が付けられなくなつていた。

『紅き翼』はグレー＝ブリッジ奪還作戦の中核を担う予定となつてゐる。

彼らは迫る戦いに向けて準備を、

「んー、『赤毛の死神』……ダメだな。いまいけんとこねえ」

「そうだな……『千の呪文の男』なんてのはどうだ？」

「おお、かつけえ！ すげえぞジャック！」

「何が『千の呪文の男』じゃ、」サウザウンドマスターの馬鹿弟子。お前は未だにアンチヨ「見ながらないと詠唱もできんじゃん」が

「まあまあ、ハッタリとしてはいいんじゃないですか？ 味方の士氣も上がりますし」

「お前ら少しら」緊張しろよ……」

していなかつた。

「さて、今回の作戦もいつもどおりでいいですね？」

「……おいアル、俺たちはいつも作戦なんて立てていたか？」

「あるじゃないですか詠春 突っ込んで暴れろ、です」

「孫子に謝れ」

「まあまあ、でも実際これが一番効果的じゃないですか。あの二人が前線に突っ込んで暴れ、私たちがカバーする。単純ですがそれ故に破れにくい」

「まあ、確かに」

「……あれ、おいジャック。今俺たち馬鹿にされてんじゃねえの？」

「ちげーよ、アルの野郎、最近出番があんまり無いからひがんでんだよ。ここは大人の余裕で受け流せ」

「おお、なるほどー！」

(馬鹿じやの)

「それにしても、最近の敵は手応えがねえぜ。これなりハラスの闘技場の方がレベルが高かつたな」

「さういやジャックは拳闘士出身だったな。強い奴とかいたか？」

「おうよ、聞いて驚け！　その新チャンピオンとは今までに八回戦つたが、全て完敗だ！　手も足も出なかつたぜ！」

()(なぜ自慢げ?)()

この瞬間、アル、ゼクト、詠春の心は一つになつた。

「ジャックが手も足も出ねえとはな……やべえ、俺も戦いたくなつてきた！」

興奮を隠さうともしないナギ。

「いや、悪いが今のお前じや勝てないだらう。これは俺の勘だが、あの野郎は俺と戦つた時も手加減してやがった」

「そんなこと聞いたら余計に我慢できねえよ… なあなあ、ソイツの名前は？」

「ああ、そいつの名は」

ラカンが答えるやうとした時、彼らのいる天幕が開いた。

「『紅き翼』の皆さん、そろそろ作戦開始時刻となります」

伝令兵の知らせにより、弛んでいた空気が張り詰める。

「話の続きを」レが終わった後だな

「おっ！ 行くぜ！ めえら、『紅き翼』、出陣だ！！」

SIDE・大和

「ヤマト……本当に大丈夫なのか？」

「今更なに言つてやがる。ちょっと行って、少し藉ぎ払つてくるだ

けだ。命の取り合いまでしてくる気はねえよ

「だが……」

グレーート＝ブリッジの頂上、戦いが一望できる場所に大和とテオドラは立っていた。

本来この場所も戦闘区域内であり、大和としてもテオドラを連れてくる気はなかった。だが、

『わらわがお主を戦場に送り出すのだぞ！ わらわが見届けんでどうするー。』

テオドラが吠えたことにより、こんな所までついてきてしまったのだ。

俯いて不安げな顔を見せるテオドラに、大和は頭を掻いた。

「おい、テオドラ」

大和の声に反応して顔を上げる。
その顔色は悪い。

「俺が誰だが忘れたか？ 常勝無敗の闘技場チャンピオンだぞ？」

もう引退したけどな、と慣れないジョークまで言つ。

その言葉でやつと安心したのか、決意の表情で頷くテオドラ。

「頼むぞ」

「おう、ここで見物でもしてる」

大和は下で起きている戦闘を観察する。噂の『紅き翼』は、確かにすさまじい突破力で帝国の軍勢に食い込んでいた。

(このまま突っ込む前に)

大和は両腕の袖を上げ、両手の親指に気を集中させる。気の集中させた親指で腕をなぞることにより複雑怪奇な紋様を印す。

「黑白の羅 二十一の橋梁 六十六の冠帶 足跡・遠雷・尖峰・回地・夜伏・雲海・蒼い隊列 太円に満ちて天を挺れ」

(悪いが、奴らと戦つにてめえらは邪魔だ)

「縛道の七十七 天挺空羅」

薄い氣で作られた網が、大和を中心に展開し、天を覆いつくしていく。

この技は自らの氣で編んだ網を展開することにより、遠く離れた存在の捕捉、伝令を可能とする。

戦闘区域では突如として出現した天挺空羅に混乱していた。

『 おいらス帝国の野郎ども。聞こえていいな』

耳元に響く声に、帝国軍の誰もが周囲を見回す。が、氣で編まれた網以外には何も存在しない。

『いいか、よく聞け。セヒの『紅き翼』の相手は俺がする。てめえらはグレート＝ブリッジの防衛に専念しや』

戸惑いの表情を見せる帝国軍達。それを見て大和は舌打ちする。

（無理もねえか。戦場で突如降つて湧いた声に従うヤツなんぞいやしねえ。クソつ、対策しておくべきだった）

少しばかり無理をすれば、帝国軍を巻き込まずに相手をすることも不可能ではない。

説得を諦めて自分も参戦しようとしたが、

「テオドラ？」

テオドラが自分の袖を掴んで引き止めていた。
そして大和も理解する。テオドラの狙いを。

「なるほど、おもしれえ。やってみるよテオドラ」

不敵な笑いを浮かべてテオドラは頷く。

そして、

（帝国軍の勇者たちよ、聞け！ わらわの名はテオドラー・ヘラス
帝国の第三皇女であるー）

その声を聞いた帝国軍の者は皆、一様に動きを止めた。

巨大な軍勢が、まるで一つの生き物のよつて息をひそめる様は、不気味ですらあつた。

(皆の者！ 確かに敵、連合の勢力は強大じゃ！ かの戦場の死神、『紅き翼』を尖兵とする奴らには今まで幾度となく苦渋を舐めさせられた！)

固唾を飲んで次の言葉を待つ。

(だが、臆することはない！ 我らには誇り高き戦士が味方してくれる！ かの闘技場で無敗を誇ったチャンピオンじゃ！)

目を見開く。あの男が我らに味方してくれるといふのか？

ヘルス帝国の人間で五木大和の名を知らぬ者はいない。
そして、その『紅き翼』を凌駕するであろう戦闘力を知らぬ者もまた、いない。

(『紅き翼』の相手は五木ヤマトに任せせるのじゃ！ 皆はグレート＝ブリッジの防衛に専念！ 今回の戦いがこの戦争の正念場なのじや！)

一瞬の静寂。

そして、

ドオツツツツツ！……！

爆発した。

「やるじゃねえか」

「ふん、当然じゃ」

「こまでお膳立てされでは、自分としても答えなければなるまい。

「じゃ、行つてくる」

「つむ、はよつ戻つてくるのじゃぞ」

自分を信頼しきつた声に、ニヤリと笑つ」と返した。

「つしやあつ！　轟け　天譴ツ！..」

「これはつ、天挺空羅か！？　しかもこの規模　まさか！？」

『紅き翼』のメンバーの中で、空に拡がる氣の網に一番動搖したの

は詠春だつた。

他の面々はびちらかといつと、様子のおかしい帝国軍の方に注目してくる。

今まで必死に自分たちの進撃を食い止めようとしていたにも関わらず、急に動きを止めたかと思えば、今度は一糸乱れぬ撤退だ。ナギ達だけでなく、他の連合軍も詠しんしている。

そして自分たちに迫る脅威にいち早く気がついたのは、フォローのために索敵魔法を展開していたゼクトだった。

自分の索敵範囲内に一点の反応。

その点は恐るべきスピードでこちらに接近しており、咄嗟にその方向を視認する。

かなりの距離が空いているため、姿はほとんどわからない。

しかし、その点は急激に気の圧を増し

突如として、天をも衝くほどの刀を構え

自分たちに向かつてその刀を　　！

「全員横に飛ぶのじゃああああツツツ……」

ゼクトの号令、いや、怒号により『紅き翼』のメンバーは反射的に行動を起こす。

そして、数瞬前まで自分たちがいた地点に巨大な鉄塊が叩きつけられた。

その異常なサイズの刀は地面にぶつかっても勢いが死なず、まさに大地を割ろうとせんが如き力で抉り続ける。

度肝を抜いた先制攻撃に『紅き翼』達の額に冷や汗が流れた。もしみんなものが直撃すれば、たとえ障壁を張つていようと諸共に潰されるに違いない。

ゼクトの指示がなければ、まず間違いなく巻き込まれていただろう。

「今度は天譴　やはりつ

「この刀の形って、おこおこマジか！？」

詠春とラカンは敵の正体に確信を持つ。

「はじめまして、いや、久しぶりもあるな、『紅き翼』。できればそのままお引き取り願う」

「大和君、なぜ君がこんな所に！」

「お久しぶりですね、詠春さん」

「はあ！？」

大和が詠春に対して敬語を使つたことにより、目が飛び出そうなど驚くラカン。

こいつはヤマトの偽者か？ などとテオドリヒと同レベルのことを考えている。

「話には聞いていたが、本当にテメエもいたんだな、筋肉ダルマ」

「あ、本人だわ」

すっかりお馴染みの毒舌を受け、むしろラカンはホッとした。

「つて」「あ！ 僕を無視してんじゃねえ！」

天譴の一撃による風圧に吹き飛ばされていたナギが復帰。

「まったく、いきなりあんなもの振り回すとは乱暴な人ですね」

「これまで長く生きてきたが、あんなものは初めて見たわい」

アルビレオとゼクトも大した怪我を負っているわけでもなく、それぞれ別方向から復帰。

図らずとも大和を五方向から包囲する形となつた。
だが大和の実力を知っている詠春とラカンからすれば、これでも心もとないぐらいた。

「さつかも言つたが、このまま帰つてくれるんなら戦う気はねえ」

「……いきなり不意を打つて先制攻撃してきた人の言葉を信じじろと？」

「あんなもんただの挨拶だ」

「ふざけたことを言いよつて……」

アルビレオとゼクトは大和に怒りを顕にするが、さつきの一撃は本当に挨拶に過ぎないことを知っている詠春とラカンは気が気がない。実際、天譴ではなく『卍解』のいずれかを放つていれば、そこで終わつていただろう。

「この五人に囲まれておきながら、大層な余裕ですね」

「まあな。で、返答は？」

「そんなもの」

「断るに決まつてんだろ! うがツツッ!! マンマンテロテロツ!!」

「おいナギ!? 待て、迂闊に魔法を」

「うるせーぞ詠春! 結局の所、コイツは敵なんだろ? が!!』『契約により我に従え、高殿の王。来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稻妻!!』」

詠春の静止を振り切つて、対軍勢用魔法の詠唱に入るナギ。

「波悉く我が盾となれ。雷悉く我が刃となれ」

「喰らいやがれッ!! 『千の雷』!!!!」

「んなもん喰らうか 双魚の理」

解号が終わり、大和の刀が変化する。自身の所有する中で、ただ二組しか存在しない二刀一対型の斬魄刀。柄同士が札付きの繩で結ばれた特殊な形状をしている。

そしてこの斬魄刀の能力は、敵の技を片方の刃で吸収し、刀を繋ぐ繩と札で威力を調整して、

「あふるべつーー？」

敵に返す」とができる。

血ひの『十の雷』を受け、吹き飛んでいくナギ。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「さつ もも言つたが、 こ のま ま帰つてく れるんなら 戦つ 気はねえ」

「…………いきなり不意を打つて先制攻撃してきた人の言葉を信じじろと
？」

「あんなもんただの挨拶だ」

「ふざけたことを言こよつて……」

アルビレオとゼクトは大和に怒りを顕にするが、さつきの一撃は本当に挨拶に過ぎないことを知っている詠春とラカンは気が気がない。実際、天譴ではなく『正解』のいずれかを放つていれば、そこで終わっていたらう。

「IJの四人に囲まれておきながら、大層な余裕ですね」

「まあな。で、返答は？」

「「「「断るッ…」」」

グレート＝ブリッジの地にて、闘技場無敗の男と、『紅き翼』が激突する

第六話（後書き）

書いていて『あれ、双魚の理って魔法使いに対して無敵じゃね？』
と思いました。

ちなみに天譴は狛村の始解です。

第七話

「ジャック！　詠春！　お主らでヤツを引き止めることは可能か！？」

「はっ、余裕だぜ！　闘技場での借りを返してやらあ……！」

「こんな所で大和君と闘うことになるとは……だが、相手にとつて不足はない！」

ナギのいない今、（死んでいないが）『紅き翼』は自然とラカンと詠春が前衛、アルビレオとゼクトが後衛を担当する。後衛に向かわせないためにラカンはアーティファクトで手甲と足甲を開、詠春は自らの愛刀である夕凪を構えた。

「おい詠春！　こいつは俺一人じゃさすがに抑えきれねえ！　勝手にへばんじやねえぞ！」

「そんなこと、お前に言われるまでもない！」

そして二人は大和に向けて駆ける。

「交渉は決裂か……まあ、わかりきったことだがな」

大和は一人がかりの攻撃を、双魚の理でそれぞれ受けとめた。そのまま三人はもつれ合つかのように接近戦へと移行する。

「ラカン、インパクトオオ！…」

ラカンは剣術を使うよりも直接殴る方が性にあつていたため、大和に敗北して以来は体術の訓練をしていた。

武具の群れを飛ばす方法も大和には通じなかつたため、牽制だけにとどめている。

「神鳴流奥義、斬岩剣！」

一方、詠春はこのメンバーの中で一番大和の能力に詳しい。彼の使用している斬魄刀、双魚の理についても知つていた。故に、雷鳴剣などの放出系の技は避け、直接攻撃系の技で大和に攻撃する。

だが、達人一人の猛攻すらも、大和はいなし、逸らし、かわし続ける。

ラカンの岩をも碎くような突進を見れば、瞬歩で回避し、回り込んで詠春への楯にする。

詠春の鉄をも切り裂くような斬撃を見れば、双魚の理の十手で固定し、武器破壊を目論む。

アルビレオとゼクトは必死に大和の隙を探るもの、ナギの『千の雷』があつさりと返されたことを考へると、迂闊に魔法を放つわけにもいかない。

現状、彼らは膠着状態になつていた。

「破道の五十八　　？嵐」

てんらん

大和はそれを崩しにかかる。

ラカンと詠春の目の前に突如竜巻が現れ、視界を塞ぐ。
竜巻に直接的な攻撃力はなかつたものの、一瞬大和を見失つてしまつた。

その一瞬の隙を使い、再び解号を唱える。

「こんどはこいつだ。水天逆巻け ねじばな 摟花」

大和が唱え終わった瞬間、両手の刀は消失し、代わりに身の丈を超すほど三叉の槍が現れた。

それを片手で軽々と持ち上げ、独特の高い構えをとると同時に回転させる。

「おい詠春、あれの能力はわかるか！？」

「あれは捩花　振ると同時に、水の波濤を繰り出して敵を滅する槍だ！　絶対に下がつて回避するなよ！　波濤に巻き込まれる！」

「おっしゃ、了解！」

再び二人は大和に攻撃を開始する。

だが、カウンターに特化した双魚の理とは違い、凄まじい攻撃力を持つ捩花に二人は徐々に押され始める。

「いい加減に諦めたらどうだ？」

「はつ、抜かせ！」

「御免被る！」

既に一人の身体には無数の切り傷が刻まれていた。

たとえ槍の一撃を防いだところで、追加攻撃の波濤に粉碎される。よつて防御はできず、二人はどんどん苦しい戦いを強いられていた。

このまま大和が押し切るかと思われたが、

(つ、これは……重力か?)

双魚の理を解除したことにより、後衛の一人が戦闘に参加できるようになつた。

めまぐるしく位置が変わっていく高速戦闘の中で、アルビレオは的確に大和だけを重力で捉える。

特殊な歩法で重力の影響を地面に逃しながらも、戦いにくくなつたのは否めない。

一方のゼクトはといふと、空中で全体の流れを把握し、絶妙なタイミングでの魔法でサポートをしていた。

捩花がラカンを捉える直前でゼクトの遠隔障壁に阻まれた時は、大和でさえ驚愕に目を見開く。

(あの距離から障壁を開いて、しかも捩花を防ぐほどの強度。しかも全体の司令塔までしてやがる。……なるほど、『トイツらの中であ一番厄介なのはあのガキか』)

そう判断し、大和は真っ先にゼクトを排除することに決めた。

「君臨者よ！ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ！」

「！」の野郎、接近戦の最中に涼しい顔して詠唱しやがつて！』

「蒼火墮か、もしくは赤火砲か、攻撃系の鬼道がくるぞ！」

大和に鬼道を使わせまいと、ラカンと詠春の攻撃が一層苛烈になる。だが、

「 雷鳴の馬車 糸車の間隙 光もて此を六に別つ」

「つ、二重詠唱か！？ まづい、大和君の狙いは 」

「蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ 縛道の六十一
六杖光牢」

大和の詠唱が終わると同時に、ゼクトの周囲に六つの帯状の光が胴を囲うように突き刺さり、その動きを奪つ。

「くつ、外れん！」

「破道の七十三 双蓮蒼火墜！」

大和は捩花を上に投げ、空いた両手を合わせる。そして、その両手から蒼火墜を遙かに超える規模の波動が放出され、そのままゼクトを飲み込んだ。

「ゼクト殿っ！」

「おいおいやばいんじゃ ねえか！？」

「今のは……」

『紅き翼』のメンバーに緊張が走った。だが、その予想はいい意味で裏切られる。

「…………」

空中にいたはずのゼクトの声がすぐ側から聞こえ、大和以外の全員

が驚愕する。

大和は落ちてきた捩花を受け止め、苦い表情を隠さない。

「命中する寸前に、転移魔法を発動させたか……やっぱりテメエは厄介だな」

虚空から現れたゼクトは少々傷を負っていたものの、まだまだ戦闘可能な状態であった。

それを見て『紅き翼』のメンバーは安堵の表情を見せる。だが、

「少し、舐めてかかりすぎたか」

その場を覆う殺氣が一段と濃密になり、咄嗟に身構える。

「安心しろ、殺しあしねえ。けどな、多少は本氣でやられても、いつ

大和は捩花を解除、通常の刀の形態に戻した。

そして、

「
卍解」

その言葉を発した瞬間、大和の気の圧力が爆発したかと錯覚するほど膨れ上がった。

「かみしじのやうり
神殺鎗」

『紅き翼』のメンバーに、油断はなかつた。

いかなることが起きてても、咄嗟に回避か防御ができるよう構えていた。

だが、

まるでコマを落とされた映像の如く、一瞬後にゼクトの腹部を刀が貫通していることに、誰もが硬直した。

刺さつた時同様、一瞬後には刀は元の長さにまで縮んでおり、ゼクトは無言で崩れ落ちる。

「至つ、よつやく『紅き翼』の硬直が解ける。

そして大和はそのままアルビレオへと刀の切っ先を向けた。

(「、マズイ!）

あの刀の能力はわからないが、このままではゼクトの一の舞になることは間違いない。

そう直感したアルビレオは、自身の持てる魔力の大半を使って障壁を開。

そして、

「神殺鎗
無踏連刃」
ぶとうれんじん

まるで壁が迫るかのように、大和の持つ刀が伸縮を繰り返してアルビレオの障壁を削った。

(「さうか、この刀の特性は異常なまでの伸縮速度!）

アルビレオはそのことを看破するも、今の状況は変わらない。このままではいずれ、障壁が全て削りとられる。

(「ならば...）

アルビレオは切り札を使う。

それは重力使いとしての奥義ともいえる、自らにかかる重力の軽減。

アルビレオは自身の体重を限りなくゼロに近づけ、高速移動により大和の背後へと回り込んだ。

そして、その掌に重力球を作り出す。

アルビレオはそのまま重力球を大和に叩きつけようとするが、

「裂き狂え
瑠璃色孔雀」

背中越しに大和の声が聞こえたかと思うと、彼は無数に薙をつけた薙に絡みつかった。

「これは、一体！？」

アルビレオは必死に脱出しようと試みるが、薙は決して緩まない。むしろその強度を増していくように思える。

そしてアルビレオは気づく。自分の魔力がどんどん減っている」と

に。

「その薦についている薦は見えているな？ 瑠璃色孔雀は敵の魔力を喰らい、その花を咲かせる。諦めて大人しくしていろ」

咄嗟にその薦を見る。

確かに自分の魔力が失くなつていいくにつれて、薦はゆっくりと膨らみ始めていた。

「そうはさせん！」

「俺たちを忘れてんじゃねえぞ！」

現在大和は無手であり、詠春とラカンにとつてはこれ以上ないほどの好機だった。

二人は同時に反対方向から大和へと駆け、自らにできる最強の一撃を放つ。

「全・力・全・開！！ ラカン、インパクトオオオー！！！」

「神鳴流決戦奥義、真・雷光剣！！！」

避けようのないタイミングでの攻撃だった。

そして事実、二人は自分たちの攻撃が大和に直撃するのを確認した。

だが、瞬きをしてみれば、そこには誰もいない。

またしても硬直する一人だったが、突如詠春の両手が後ろ手に固定

される。

(「これは縛道！　だが詠唱は聞こえなかつたぞ！？」)

詠春の手を固定したのは、最も基本的な縛道の一　塞である。一流の戦闘者にとつてはすぐに解除できるものであり、詠春もすぐに弾き飛ばそうとしたが、むりにどこからともなく現れた気の繩が絡みつく。

「今度は這縄かっ！　くわつ、どうして詠唱が聞こえない…？」

二つの縛道を合わせられたならば、即刻解除とはいかない。必死にもがくが、解除するよりも早く、這縄が引かれて詠春の体は宙を舞う。

そして、引っ張られた先に大和の姿が浮かび上がるのを見て、縛道の一十六　曲光で身を隠していたのだと理解した。

「　俺は三十番台以下の鬼道に限り、念じるだけで発動できます。
『完全詠唱破棄』と呼んでますがね」

そのテタラメさに詠春が驚愕を顕にする前に、破道の一　衝が顎に直撃し、脳を搖さぶられて昏倒した。

そして同時に、瑠璃色孔雀の花が咲き誇り、存在を維持できなくなつたアルビレオが一冊の本となつて地に落ちる。

「で、残るはお前だけだ。筋肉ダルマ」

「……やつぱりお前はとんでもねえな。けどよ、こじでスゴスゴと引き下がる俺様じゃねえぜ?」

「ついでに言つておくと、お前らの攻撃をかわしたのは歩法『空蝉』一つ一技だ。直撃したように見えたろ?」

自分はここまでデタラメな相手と何度も戦つていたのか、と冷や汗を流すラカン。

「お前はどこまでボロボロになつても立ち上がりてくるからタチが悪い」

大和は瑠璃色孔雀を解除し、ラカンへと向き直る。

「だから、お前は物理的に動けなくするのが一番だ」

またしても、大和の気の圧力が増す。

「 卍解、大紅蓮氷輪丸」

そして、世界は極低温に支配される。

氷輪丸。かつてラカンが一度敗れた斬魄刀。

それがさらに力を増すというのか？

「俺が何故、捩花を使ったと思つ?」

ラカンが見たのは、巨大な翼を持つ氷の竜を纏つた大和。

「氷輪丸は氷を操る斬魄刀だが、新たに氷を生み出すよりも、その元となる水があつた方がより力を發揮する」

足元を見れば、捩花によりまき散らされた水。

「つまり、こいつことだ」

ラカンが最後に見たのは、自分に迫り来る無数の氷柱だった。

千年氷牢。

「……なんだよ、これ……」

ナギ・スプリングフィールドは自身の魔法に吹き飛ばされた後、飛行魔法を使って仲間たちの元に向かつて急いでいた。

ナギはこれでも仲間の強さを信用しており、まさか自分のいない数分の間に全滅しているとは思いもしていなかった。

むしろ、自分が戻るまでに敵を倒しているのではないか、と心配し

ていたほどだ。

だからこそ、ナギは目の前の光景を信じられない。

そこで見たのは、腹部から血を流して倒れているゼクト。

本となつて地面に落ちているアルビレオ。

外傷こそ少ないが、気を失っている詠春。

そして、

「ああ、筋肉ダルマならこの中だぞ。ナギ・スプリングフィールド」

見上げんばかりの氷の塊と、その側に立つ大和の姿だった。

「こいつらをやったのは、テメエの仕業か……？」

ナギは怒りに震える。

仲間を傷つけたこの男に。

そして、最初にむざむざ退場してしまった自分自身に。

「ああ、そうだ。まあこいつらも死んでよいねえけどな」

「せうかよ　それだけ聞けりや、充分だツツツ……」

咆哮を上げて大和に突撃するナギ。

「勘違いしているかは知らんが、俺はお前のことを低くは評価して

いない」

大和は刀を突き出し、その切つ先を地面に向ける。

「まさか、双魚の理の吸収限界に近づくヤツがいるとは、思いもし
なかつた」

そして大和は刀から手を離す。刀は音も無く地面に吸い込まれた。

「だから、喜べ。こいつを見せてやる」

卍解。千本桜景巖。

「かなり痛いだろうが

そのかわり、綺麗だろ？」

連合軍の一隊は『紅き翼』が敗北したと聞き、半信半疑ながらも救助に向かうこととなつた。

そして、彼らは驚くべきものを見る。

そこで見たのは、情報通りにボロボロとなつた『紅き翼』と、

全身に傷創を刻まれながらも、決して膝をつかぬよつて、立つたまま氣絶しているナギ・スプリングフィールドの姿だつた。

「おい、五木大和が『紅き翼』を倒したつてのは本当か！？」

「ああ、偵察のやつに直接聞いたから間違いねえ！ やつぱチャンピオンはどんでもねえよー！」

グレート＝ブリッジの内部にて、帝国軍の兵士たちはその報告に沸

を立つ。

「『これからも帝国軍と一緒に戦ってくれんのかなあ』

「それはわからねえが、とりあえずこの戦いで勝てたことでも凄いつて！ これを拠点にして連合と戦えるんなら、帝国の勝利も目前だ！」

それじゃあ、困るんだよね。

『』からともなく聞こえたその声に、帝国兵は慌てて周りを見回そうとするが、それはできなかつた。

なぜならば、彼らの胸には既に、石の槍が突き刺さつていたから。

「今回の戦いで帝国はグレート＝ブリッジを奪われる。やつこつ『シナリオ』になつているんだよ」

暗がりから白髪の青年が現れる。

「さて、早く仕事を終わらせようか」

『コズモ・エンテレケイア
完全なる世界』が、動き出した

第七話（後書き）

本当は詫助も出したかったんだけどなあ……タイミングがなかつた
……

とこりよつ、詠春がヤムチャポジションになつてゐるんだけど……

第八話（前書き）

短いです。

第八話

SIDE・紅き翼

あの『紅き翼』が撃破されたという情報は、連合軍の間に大きな動揺をもたらした。

救助部隊は『紅き翼』のメンバーを直ぐに回収、治療を行い、彼らは奪還成功したグレート＝ブリッジに運び込まれた。彼らの怪我は重傷ではあったが、致命傷には程遠く、しばらく治療に専念すれば、また戦場に復帰できるとのことだ。

だが、心の方はどうかといふと

「こんなところにいたか、ナギ」

「……ジャック」

グレート＝ブリッジの上、大和とテオドラが会話をしていた場所で、ナギは座り込んでいた。

もうすでに夜の帳が空を覆い、野営地の明かりがぼんやりと浮かんでいる。

「お前、怪我は大丈夫か？ 全身ボロボロだったらしいじゃねえか」

「……そういうジャックはどうなんだよ。氷河期時代のマンモスの化石みたいになつてた、つて聞いたぞ」

「ガハハ、俺は氷漬けにはもう慣れた」

いつもの軽口もどこか空々しく、霸気がない。

「なあ、ジャック」

「なんだ?」

「お前が言つてた闘技場の無茶苦茶強いヤツつて、あいつのことだよな?」

「そうだ。俺もあそこまで『テタラメなやつだとは思わなかつたけどな』

「……俺たち、手加減されてたよな」

「ああ。妖怪ジジイもアルの野郎も、少し休めばまた戦えるつてよ。最初から俺たちを殺す気はなかつたんだろ」

「……そうか」

会話がなくなり、二人は建物の上から雄大な夜景を眺める。

グレート＝ブリッジは連合が奪還に成功し、下の野営地では勝利の宴が開かれていた。

だが、『紅き翼』に笑みはない。

「……何が『紅き翼』だ……何が『千の呪文の男』だよ。強いヤツと戦いたいだの言つておいて、結局ボコボコにされてへこんでる」

「はは、俺も奴隸拳闘士の時はもつと強いヤツはいねえのか、とか思つてたな。まあヤマトの野郎にあつてからは考え直したが」

「……」

「……」

また、二人の間に沈黙が訪れる。

「ジャック、頼みがある」

「奇遇だな、俺もだ」

「お前、俺の新技の実験台になつてくれ」

「……ふつ、くつくく、何だよ、考へることは一緒か」

「だな。このまま負けっぱなしでは性に合わねえ。あのスカした面に一撃くれてやらにゃ、俺たちは前に進めない、だろ？」

ガハハ、と一人して笑い合ひ。

「おう！ ょっしゃ、早速戦ろつぜジャック！ 僕すんげー必殺技思いつんたんだよ！ 雷を自分に直撃させて突つ込む、『神風アタック』だ！」

「俺も新技考へついたぜ！ 世界中の生物から気合を少しづつ吸収して（無理）放つ、『超氣合玉』だ！」

二人は立ち上がり、距離をとつて向かい合ひ。

その夜、グレート＝ブリッジの上で、巨大な魔力と気がぶつかり合ひのが確認された。

（馬鹿弟子が落ち込んでるかと思つて来てみたが……いらぬ心配じやつたの）

青山詠春は、グレート＝ブリッジの一室の中で座禅を組んでいた。

（まさか、こんな所で彼に会うとは思いもしなかつたが……やはり彼の強さは変わつていなかつた）

詠春は座禅を組みながら、過去に思いを馳せる。

詠春とヤマトが初めて出会つたのは、詠春が十五の時だつた。

詠春は神鳴流の修行に明け暮れている日々の中での木家に天才がいるという噂を耳にする。

神鳴流の中で、既に詠春の相手ができるのは師範代クラスだけだったことから、その噂の天才に興味を引かれるのは当然の流れだった。木刀を引っさげて五木家に乗り込み、道場で瞑想をしていた大和に手合わせを申し込んだ記憶はまだ、詠春の中に色褪せずに存在していた。

もちろん結果は敗北。

しかし、それ以降の詠春の修行はより一層苛烈になり、得た物も確かにある。

（それでも大和君、随分ガラが悪くなつていたな……）

今の大和しか知らない人間には信じられないだろうが、昔の大和は礼儀正しく、素直な少年だった。

手合わせした以降、詠春と大和は親しくなったのだが、その時も大和は目上の人間にに対する礼儀を心得ていたのだ。

それがどうなつてああなつたのか、流石に詠春も気になつたが、今はそれよりもこれからの方が大切だった。

（今までは彼には勝てない……やはり、アレを習得するしかないか）

これまで大和に勝つことは一度もできなかつた。しかし、これからもそうであるわけにはいかない。

詠春は『紅き翼』の中で一番軽傷だった。
ほぼ無傷だったと言つても過言ではない。

だが、それは一番手加減されていた、といつことにほかならな
い。

知り合いだから、昔親しくしていたからといつ理由で手加減された。

その事実は、普段冷静な詠春の心に火をつける。

「見ていろ……絶対に追いついてみせるからな、五木大和！」

この叫びが隣の部屋にいたアルビレオに聞かれ、後で散々弄られたのは余談である

「せう言えば詠春、貴方の故郷から何かが届いていましたよ」

「本当か！？」

「ええ、私が預かっておきましたが……これは書物ですか？」

「あ…………こんなに早く届けてくれるとは、ありがたい」

詠春が手にした書物、それは青山家に伝わる秘伝の書。

本来五木家にだけ伝わる『斬魄刀』の秘伝。

だが、長い時代の流れの中で、一冊だけ青山家に流れた書物。

かつて詠春が挑み、そして敗北した記憶を持つ斬魄刀。

その名は、
斬用。

第八話（後書き）

『紅き翼』強化フラグ。

第九話（前書き）

斬月人気あるな……

第九話

「ウエスペルタティア王国の王女と会談をするだあ？　おひテオドラ、てめえ何考えてやがる」

グレー＝ブリッジの戦いから一ヶ月が経過したあくる日、緩やかな日々を過ごしていた大和にテオドラはそんなことを言い出した。

あの戦いにより、確かに大和は『紅き翼』を撃退したものの、グレ－ト＝ブリッジ自体は連合に奪還された。

テオドラから事情を聞いたが、建物内部から何者かの手引きがあったといふこと以外なにもわからず、帝国の上層部を悩ませている。

そしてその後の大和だが、てっきり国民からまた戦場に出てくれ、などと言われることも覚悟していたのだが、自分がテオドラの護衛をしていると明かすと『じゃあ護衛の方に専念してくれ』と言われた。

この小さな皇女は自分の予想以上に、国民に愛されていいるらしい。

そんなわけで、これまで通りにテオドラの護衛をする日々が今まで続いていたのだが、

「……この戦争にはな、どうやら裏で糸を引いている連中がいるよ

うなのじや。ウェスペルタティアの王女もそれに気がついたらしくて、一人で対策を練るのと同時に「ことになつたのじや」

「中立国の王女だろ。そんなヤツと会つたら同盟を壊すんじゃあ思われるんじやねえのか？」

「無論、バレたら大問題じや。だからお忍びで行く。そして大和にもついてきて欲しいのじや」

「まあ、別に異論は無いけどよ」

そのような経緯があり、大和はその会談に護衛としてつっこべりとが決まった。

会談の場所は帝国にほど近い位置で、テオドラと大和はすでに到着しており、後は王女を待つだけとなつていた。

「王女つてのはどんなヤツなんだらうな」

「わらわも眞とかで顔は知つておるがの、かなりの美人だったの
じや。ヤマトも見瀉れるかもしけねぞ」

「はい、んなわけあるか」

そんな軽口を叩きながら時間を潰していくと、フードを田深にかぶ
つた者がこちらに近づいてくるのが見えた。

そして、その女を見た瞬間、大和は目を見開いて硬直する。

「本日はこのよつな会談の機会を頂き、感謝する」

「いや、それはお互い様なのじや、アリカ殿」

彼の前でテオドラが挨拶をしているが、そんなものはまったく意識
の中に入らない。

大和の意識はアリカの顔に集中し、それ以外の情報は全て遮断していた。

ふと、アリカが大和の方を向く。

「！」の者が噂の護衛であるか？」

「そうじや。彼が今回の会談を護衛してくれる五木ヤマトなのじや」

アリカとテオドラが自分のことを話しているが、それすらも無視する。

大和はアリカの顔から目が離せない。

そしてアリカは大和の顔と雰囲気を確認し、こう言った。

「ふむ、確かに面白い護衛を雇つておるな」

「いや、面白いのはお前の眉毛だつて。枝分かれってなんだよ。面白すぎんじゃねえか」

次の瞬間、王家の魔力をふんだんにこめた平手打ちが顔面を直撃し、大和はトリプルアクセルをきめた。

「よし、埋めるか」

「ま、待つてほし〜のじや！ わりわの護衛を埋めないでくれなのじや〜！」

「へや〜、ここ最近で久しぶりにダメージ食らったや

「むしろそれで済んだのを幸運に思つべきなのじや、ヤマト……」

アリカは弛んだ空氣を引き締めるために咳払いをし、正式に自己紹介する。

「お初にお目にかかる、テオドラ皇女。わらわがウェスペルタティア王国が王女、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアじゃ」

「え、アナル？」

次の瞬間、王家の魔力をふんだんにこめた平手打ちが以下略。

「殺す。ケルベラス渓谷に突き落とす」

「ヤマトはそれでも生き残りそうな気がするのじゃが……」

「や、やばい、視界が朦朧としてやがる……」

「もハフオローのしょひもないのじや」

「さあ、テオドリ皇女。早速会談をはじめよ！」

「じつやらアリカは大和のことをなかつたことに対するつもつらしい。

テオドラとしても、こつまでも馬鹿な問答をしているわけにもいかないでの、アリカと話し合いを始める。

大和は一人に背を向ける形で周囲を警戒していたが、

「！」の間のグレート＝ブリッジでも奴らが動いていたのは間違いないのじや

「ふむ。となると、奴らは両軍に介入したことになるな」

(なんか重要なことを話してゐるっぽいが、俺としてはどうこう経緯で王女の眉毛があなつたのか、という方が気になる)

あまり集中はしていなかつた。

「過去の戦闘の記録も調べたのじゃが、戦争の勝敗が決まりそうな戦いの時は必ず、奴らの介入の跡が見られるのじゃ」

「つまり奴らの目的は、戦争の長期化か？　しかし一体なんのために……」

（元からあんな風に枝分かれしていたのか？　いや、あんな不自然な眉毛が生えたヤツがいるとは思えねえ。必ず裏がある）

「双方ともに、かなりの上層部まで入り込まれてゐるようじゃな」

「つむ、『紅毛翼』の調査によるとメガロのナンバー2も黒いし」

（せうか！　元々は極太の一本の眉毛だつたのを、真ん中だけ剃つたのか！　……なるほど、さすがに一国の王女なだけはある。侮れねえぜ）

「……マト……ヤマトー。」

『気がつくと、こいつの間にかテオドラが自分の服を引っ張っていた。

「ん、ビーフした？」

「ビーフしたは」いつかのセリフなのじゅ。ボーッとして、何か考え」とでもしておつたのか?」

「ああ、ウエスペルタティアの王女もやるじゅねえか、と思つてな」「ま、お主もようやく理解したか。無礼者の其方にはわらわ達の話しあいなど、とうてい理解できぬと思つていたが」

認識に多少の齟齬があるが、通じているので問題はない。

「とこりか、わつき『紅き翼』って言葉が聞こえたよつた気がしたんだが」

「む? 彼らならば、わらわの協力者として動いてくれていのぞ?」

「「……」」

思わずテオドラと顔を見合わせる。

「彼らがどうかしたのか?」

この前、ボツコボコしました。

「「イイエ、ナンテモナイデス」」

そんなこと言えるはずもなく、大和とテオドラは誤魔化すしかなかつた。

「日が暮れたら、変質者とか増えるしな?」

「……いつから気づいていたんだい?」

ボコリ、と地面が盛り上がり、それは徐々に人の形をとった。

「最初から。俺が王女に一回田の張り手食らった時」

「……なるほど。『紅き翼』を打倒したのはマグレじゃなさそうだね」

地面から現れた白髪の青年に、アリカとテオドラは身構える。

「白髪の男……何度か情報に上がっていたが……」

「『完全なる世界』の人間か!」

「ああ、初めてましてだねアリカ王女、それにテオドラ皇女も。僕の名はアーヴィルンクス。ブリームムと呼んでくれても構わないが」

「『1番田』ねえ……セシスのねえ名前だな。で、そのパーさんが何の用だ?」

「アリカ王女とテオドラ皇女の拉致

「

アーウェルンクスがその言葉を発した途端、アリカとテオドラの警戒は最大になつた。

「……の予定だつたんだけどね。流石に君相手じゃ分が悪そうだ。
今日はやめておくよ」

「ん？ 別にそこの王女を守る気はないが

大和がそう返した時、テオドラはもちろんのこと、アーウェルンクスさえも田を見開いた。

アリカだけが驚きもせず、表情も変えない。こうなることが分かっていたかのようだ。

「……正氣かい？ 僕らにその王女を渡せば、口クなことにならないなんてこと、少し考えれば予想できるはずだけど

「別に、俺に害がなけりや構わん」

「そ、そんな！ 大和、『ればどうこうもつなのじや！ そなたはこの会談の護衛として』

「だから、もう会談は終わつたじやねえか

「うーーー？」

確かに会談は終わっており、テオドラ自身も町に繰り出しつとしていただけに言い返せない。

「い、家に帰るまでが会談なのじゃ！」

「……遠足かよ。あのなテオドラ。俺にはあの王女を守る義理も義務もねえ。お前のことは気に入っているし、皇帝からの依頼もあるから守るさ。けどな、今日会つたばかりのヤツのために命張れってのか？」

「う、うう、でも、ヤマトならあんなやつ簡単に」

「ああ、無傷で殺せる。だからな、テオドラ。　今日会つたヤツのために、俺に人を殺せつてのか？」

大和の言葉にテオドラは固まる。

そうだ。彼は見ず知らずの人のために戦うのを嫌い、そして自分もそれを承知していたはずなのに

「へへへ、はっはははははー。」

アーウェルンクスが哄笑をあげる。

本当に愉快だと言わんばかりに。

「君は面白いな、五木大和！　どうだ、いつそ僕たちの仲間にならないか！　君がいれば僕らの計画だって必ず成功するはずだ！」

「まあ、内容によるな。テオドラを守る気なのは変わらねえし」

「ヤマトー？」

「そうだね。確かに、計画も話さずに仲間になつてくれといつのは虫のいい話だつた。……ここで、この一人に計画のことを知られるのは予定にないが、まあ直に分かることだしね」

そしてアーウェルンクスは語る。

自分たち『完全なる世界』が何を為そととしているのかを。

「なるほど、このままだつたら魔法世界は滅ぶ。だからテメハらはその前に、魔法世界人たちを『完全なる世界』に避難させようつてわけだ」

「まあかなり大雑把な概要だけどね。僕たちは誰も傷つける気はないし、殺すなんてもつての外だ。それはもちろん第三皇女も例外ではない。どうかな、少し興味が湧いてきたかい？」

「 そうだな。他に魔法世界の滅亡を止める手がないんなら、お前らの策が一番かもな」

「ヤ、ヤマト……」

テオドラの顔に絶望が宿る。
アリカは無表情を崩さない。

「ただ、一つ聞かせる。テメエらはそれで魔法世界人が幸せになれると信じているのか?」

「もちろんだ。少なくとも、このまま消えてしまつぱりはずつとマシだらう?」

その言葉を聞いた瞬間、大和から表情の一切が消えた。

「ああ、計画を教えてくれまして誘ってくれたのは嬉しいが、やつぱりテメエら気に食わねえわ」

テオドラが俯いていた顔を上げると同時に、アーウェルンクスの顔から笑みが消える。

「……理由を教えてもらつていいかな？ それとも、最初から計画を聞き出すための演技だったのかい？」

「いや、テメエらが本気で世界を救おうとしてるのはよく分かつた。むしろ世界中から後ろ指さされてんのに、一文の得にもならないことをしてんテメエらは、ただのお人好しだと思つてる」

「……ならば、何故」

「まあ、個人的な理由で恐縮なんだが

」「

青山家に仇なす者を殺せ。五木大和。

「別に、誰かが幸せになるのが許せないとか、そんなんじゃねえよ」

お前の力は、殺すためだけのものだ。

「ただな、勝手に人の幸せだの、生き方だのを決めつけるヤツが

」

お前はそのためだけに、これまで修行をしてきたのだ。

」

「俺は大ッキライなんだよ

第九話（後書き）

少し雰囲気変わるかも。

次回は戦闘。

第十話

「まつたく、計画を漏らしてしまった上に勧誘も失敗するとは……
今日の僕は散々だ」

「『』詫はいい、とつとと仕込みでもなんでも終わらせろ。待つてや
るから」

「それではお言葉に甘えて……』おお 地の底に眠る死者の宮殿よ、
我らの下に姿を現せ』」

アーウェルンクスの詠唱が始まり、それと同時に彼の巨大な魔力が
膨れ上がる。

地面を蹴り、宙を舞いながら苦もなく上級攻撃呪文を完成させた。

「挨拶代わりだよ。『冥府の石柱』」

アーウェルンクスの背後上空より、突如として大質量の石柱が複数
出現。

総数五本にも及ぶ巨大な石柱は、大和だけでなく背後のアリカとテ
オドラ共々、圧碎せんと迫り来る。
それを、

「轟け、天譴」

大和は迎撃を選択。

大質量の石柱を、それ以上の規模を誇る刀をもつて爆碎する。轟音を響かせ、打ち砕かれた岩の塊が三人の周囲に突き刺さった。闘技場のように障壁など存在するわけもなく、テオドラは目の前で始まつた『殺し合い』の重圧に押されて蹲る。

『冥府の石柱』を碎いた刀を返し、その一撃にて空中のアーチェルンクスを捉える。

だが、

「その防ぎ方は失敗だつたね」

まき散らされたのは臓腑ではなく、岩の欠片。

上半身と下半身を分断されたアーチェルンクスは、地面へと落ちる際に砂と化した。

「『石の槍』」
ドワゴ・ベトラス

周囲に突き刺さった岩石群。その中の一つから大和の頭めがけて鋭い石柱が飛来する。

大和は首を傾けることで回避するが、その石柱から石柱が生え、避け続ける大和をまるで茨のような槍が追い続ける。

「二人とも、伏せている」

石の槍は周辺の岩石からどんどんその数を増しており、石でできた檻は物理的に回避ルートを潰している。

そこで大和がとつた方法は単純明快。

全てを薙ぎ払う、である。

巨人の腕と刀は、咄嗟に地面に伏せたアリカとテオドラの上を通り過ぎ、まるでおもちゃのように周りの岩石を吹き飛ばしていく。

だが、アーウェルンクスの攻撃は止まらない。

「『千刃黒耀剣』」

まき散らされた石の礫の「ことく」が黒き刃となり、三人を包囲する。

「一斉射出」

アーウェルンクスに躊躇いはない。

この男が敵に回れば、自分たちの主以外に太刀打ちできるものがいない。

今回の任務は重要人物一人の拉致だったが、危険度で言えば大和の方が遙かに高い。

故に、魔法が通じぬアリカはともかく、テオドラ一人くらいなら死んでも構わない、という氣で攻撃している。

大和の意識をテオドラを守ることに使わせるために。

「唸れ、灰猫」

大和の持つ刀の刀身が崩れ、灰のように空中を舞う。

灰猫とは、粉々になつた刀身が相手を切り刻むという応用性の高い斬魄刀であるが、この状況でテオドラを守るには一手足りない。

「破道の五十八　　？嵐」

大和は続けてその一手を打つ。

詠唱とともに、大和たち三人の周囲を竜巻が覆う。

台風の中に入り込む形となつた三人だが、この鬼道にアーウェルンクスの一斉射出から身を守る防御力はない。

しかし、そこに灰猫が加われば話は別だ。

灰猫は？嵐の風に乗り、まるで鉄のカーテンのような防御壁に姿を

変える。

アーウェルンクスの千の刃はそれを突破せんと試みるが、その風に触れた刃は例外なく刻まれ、削られ、風化していき、最後にはその嵐に吸収されていった。

なんとか危機を逃れ、安堵するテオドラの顔に影が落ちる。

「上がら空きだよ、五木大和。『万象貫く黒杭の円環』」

咄嗟に上を見上げたテオドラの目に映るのは、無防備な上空から放たれる無数の黒杭。

下は地面、そして横は嵐。逃げ場は存在しない。

「
舞え、袖白雪」

解号と共に、大和の刀が再び変化。

そして現れた、刀身も鍔も柄も全て純白の斬魄刀に、テオドラは危機的状況を忘れて目を奪われる。

「初の舞
月白」

大和が刀で地面に円を描き、詠唱を終えた瞬間、その円の範囲内の天地全てが凍りついた。

無論、黒杭もその氷結領域から逃れることはできず、凍り、粉々になつて砕ける。

「これで終わりか？」

「まつたく……本当に、君を引き入れることができなかつたのが悔やまれる」

「なら、今度は俺から行くぞ」

大和は袖白雪を解除。

刀を半回転させ、逆手に持ち帰ると同時に、大和の体がブレる。

「じんてきしやくせつ
尽敵蟹殺」

その言葉はアーウェルンクスのすぐ背後から聞こえた。

「雀蜂」

まさに一瞬、回転をかけた瞬歩『閃花』により回り込まれたアーウエルンクスだが、それからの大和の攻撃を右手へのかすり傷で済むことができた彼は、やはり超一級の実力者だった。

（今のは瞬動！？　いや、途中で軌道を変えることができる瞬動など聞いたことがない！）

咄嗟に掌に生み出した石の剣で、大和の新たな斬魄刀　右手中指に付けたアーマーリング状の刃を防いだ。

その際、剣を持った右手にかすり傷を負つたが、それは戦闘に支障のない程度。

そのはずだつたが、

「なんだ……これは」

アーウエルンクスの右手に出現した蝶の紋章。

別に体に異常は感じない。

魔力が減少したわけでもないし、毒を打ち込まれたわけでもない。

しかし、右手に存在する蝶の不吉とは、アーウエルンクスに一の足を踏ませた。

「その紋章が気になるか？」

「……まあね、どうせ口クな物のじゃないんだろ？」「

「正解だ。その紋章は『蜂紋華』^{はうもんか}といってな、その気になる効果だ

が

大和は隣に積み上がった瓦礫に、雀蜂を刺す。

「この斬魄刀に傷つけられた位置に、蝶の紋章が浮かび上がる」

アーウェンルクスの右手同様、蜂紋華が出現した。

「そして、同じ箇所をもう一度傷つければ」

蜂紋華の中心を、雀蜂で刺す。

その瞬間、蝶の紋章が巨大化し、瓦礫を飲み込んだ。

「な？ 口クなもんじやねえだろ？」

「ツ！」

再び瞬歩にて接近、そのまま近接戦闘に移行するが、元々アーウェンクスは戦士よりも魔法使いタイプであるのに対し、大和は近接が主流。

さらに、右手の蜂紋華をかばいながら戦わなければならぬアーウェンクスは苦戦を強いられる。

「はつ、はあつ、……くつ」

「これで右手のを合わせて、もう五箇所か。そろそろ限界だろ?」

息切れするアーウェルンクスと、涼しい顔をした大和。

最早、勝敗は明らかだった。

「確かに……これは少しやばいかもね」

でも、と続けるアーウェンルクス。

「僕は慎重だから、保険はかけておくタイプなんだ」

そう囁き、懐から四枚のカードを取り出して、招喚の言葉を唱える。

その言葉に反応したカードは発光し、彼の四人の従者を呼び出す。

「一人一人が『紅き翼』級の実力者だ。それぞれ火、風、氷、影のエキスパート。君も少しは手こずつてくれるよね?」

そして彼らは自分たちにできる最大の攻撃を放つ。

『燃える天空』

『千の雷』

『こおる大地』

『千の影槍』

『引き裂く大地』

一人に対しても使う規模の魔法ではない。

五つの魔法、そのどれもが対軍勢用魔法。

圧倒的練度で放たれる、それらの攻撃は全てを灰にし、焦げ尽くし、凍てつかせ、串刺しにし、大地の力で飲み込む。

「なるほど。確かに、これはちょっとキツイ」

万象一切灰燼と為せ。

「でも ピンチと叫ばれどもしないな」

流刃若火。

「逃げたか……まあ妥当な判断だな」

刀をひと振り、解除して鞘に戻す。

「それにしても王女さん、アンタ胆が座つているな。普通はそこの
じやじや馬姫みたいになるはずだが」

魔力や気の飛び交う戦闘を間近で見せられたせいが、テオドラは氣
を失っていた。

そして、そのテオドラを平然と支えるアリカ。

「ふん、普通の戦闘ならばいざ知らず、其方の戦いなど見ても怖く
なるわけがない。そこらの子供が喧嘩してある方がわらわには恐ろ
しいわ」

「ああ？」

「まだわからんか？ 人を殺すのが怖くて、怯えながら剣を振つて
おる其方など、恐ろしくもなんともないわ」

「 おい、テメエ」

大和がアリカに掴みかかる。

そしてその時、

「五木ヤマトッ！ 姫さんから手を離しやがれッッ……」

ナギ・スプリングフィールドの咆吼が響く。

大和はその声を聞きながら、またややこじっこになつた、とため息をついた。

第十話（後書き）

テストがあるから、少しうつくりになるかも。

外伝一（前書き）

みんな大好き刀子さんのターン。

『脇を締め過ぎです。もう少し力を抜くといいですよ』

京都の旧家の家系図は、非常に入り組んでいる。

宗家や分家、その他のしがらみが複雑に絡み合ひ、少しでも自分の家の地位を上げようと必死だ。

そして彼女、葛葉刀子はいわゆる分家、あまり地位の高くない家の出身だった。

氣や魔力といった、生まれ持つた素質は血筋によって左右される。

無論、それだけが力の強さを決める要因ではないし、日々の修練により増幅させることも可能だ。

稀にだが、先祖返りのような現象を起こして、強い力を宿すこともある。

実際刀子もそのタイプで、宗家である五木家にも入らぬほど氣を宿していた。

だが、それが必ずしも良い結果に結びつくとは限らない。

強い力は宗家の人に疎まれる。
分家の分際で、と。

強い力は分家の人に妬まれる。
同じ分家なのに、と。

その生まれ持った氣と剣術の才能は、神鳴流と出会うことにより最大限に引き出され、宗家を含めた同年代で刀子に敵うものはいなかつた。

刀子自身剣術は好きだつたし、自分が力をつけることで家の地位が上がり、家族が喜ぶのも嬉しかつた。

そのために多少の陰口を叩かれようと、我慢した。
宗家や分家人間に嫌がらせを受けても、我慢した。

だが、今日家族に頼まれたことは刀子には我慢できなかつた。

三日後の宗家との御前試合、相手の顔を立てるために、わざと負ってくれ。

それからは何を言ったのかは覚えていない。
恐らくは怒鳴ったのだと思つ。

ただ感情に任せたままに、心の内側に溜まっていたドロドロを吐き出した。

この時の刀子は僅か十歳。

この年の子供にしてはよく我慢した方だし、聞き分けの良い子供として今まで振舞っていた。

しかし、ストレスを感じないわけではないし、嫌なことがあれば確実にそれは心に蓄積していく。

そして今日、それが爆発してしまった。

刀子は家族に一方的に泣きわめき、叫んだ後、修行を終えた時に持っていた木刀を握りだまま、訳も分からず外に飛び出した。

外に飛び出した刀子は、とにかく人のいない場所にいたくて、山の中に入つていった。

本来、許可なく立ち入ることは禁止されていたが、冷静さを失った刀子は思い至らず、そのまま茂みを搔き分けて進む。

そこで、ふと水の音が聞こえた。

(「の音つて……滝?」)

その音に釣られるように歩いていくと、見上げんばかりの滝の下についた。

涙やその他諸々により、顔を洗いたかった刀子は滝壺にまで移動する。

(……ひどい顔やな)

顔を洗う際に水面で自分の顔を確認したが、目は赤く腫れ上がつており、とても人前に出られた顔ではなかつた。

何も考えずに家を飛び出したはいいが、行く宛もなく、これからどうすればいいかもわからない。

途方に暮れる刀子だが、ふと家から出る時に持ち出した木刀に気がつく。

他にすることもないので、仕方なく河原で素振りをすることにした。

いつもならば、素振りをしていれば雑念が消えていく。

だが、今日に限って余計なことばかり考えてしまう。

刀子が剣術を始めたきっかけは、親に褒められたからだ。

幼い頃、子供心にもわかつた。

自分が頑張れば、お父さんやお母さんが喜ぶ。

だから今まで努力してきたところに、一体どこで間違ってしまったんだらうつか。

思い返せば、また涙が滲んできた。

慌てて袖で顔を拭う。

そして、少年の声が響いてきたのは、そんな時だった。

「脇を締め過ぎです。もう少し力を抜くといいですよ

「だ、誰やー?」

突然届いた声に刀子は動搖する。

そして、ここが立ち入り禁止の地であることにようやく思い至った。

(妖怪の類！？ いや、たとえ人間でも、宗家の入やつたら………)

最悪の可能性に、刀子の顔が蒼くなる。

周囲を見回すが、人影は見えない。

その時滝の上の方から、とう、といづ間抜けな声が聞こえた。

「へ？」

刀子は反射的に上を見上げる。

そこには、自分と同じ年頃の子供が両腕を広げて、滝壺に向かって落っこちているという、よくわからない状況があった。

その子供は頭から着水。水飛沫をほとんどあげない、見事な入水だった。

予想外の出来事に思考停止する刀子だったが、しばらくして再起動する。

そして気づいた。少年が浮いてこない。

訝しむ刀子だったが、ようやく水面に影が浮かび そして絶句した。

ふかり、と浮いた少年の周りに、なんか、血のような赤いものが。

「え……えええええー!？」

「いやー、助かりました。ここって結構水浅いんですね」

予想外でした、と笑う男の子。

それを見て刀子は、はあ、と氣のない返事しかできなかつた。

あの後、動搖から立ち直った刀子はすぐに少年を引き上げ、応急手当をした。

少年も額を切つただけであり、出血量のわりに軽傷だつた。あんなに慌てた自分はなんだつたのだ、と問い合わせたい。

「えつと、それあなたは誰なん……ですか？」

慣れぬ敬語で刀子は尋ねる。

家同士の付き合いの関係で、同年代の人間の顔は大体覚えている。たとえ関わりの少ない家でも、少なくとも顔に見覚えくらいはある。よつて、このまったく見たことのない少年の正体がわからなかつた。

「僕は大和といいます。この辺を散歩してたら道に迷っちゃつて……山に迷い込んだ時は、もうダメだと思いましたよ」

ああ、それと別に敬語はいいです、と付け加えた。

「それで山の中をさまよつていたら、素振りの音が聞こえてきたので、こっちに来たらああなつた、といつ次第です」

大和と名乗るこの少年は、ひょつとしたら宗家の客人ではないか、と刀子は考えた。

それならば自分が顔を知らないのも領けるし、退屈で外を歩いて道に迷つた、と考えれば辻褄があう。

「えっと、ウチは葛葉刀子って言います。それで、実はこの『おひて』
勝手に入っちゃダメなんすけど、ウチ色々あつて混乱して」

刀子の言いたいことがわかったのか、ああ、と笑いながら頷く。

「大丈夫ですよ、誰にも言いません。そもそも僕も勝手に入っちゃ
ったわけですし、おあいこです」

それと敬語はいつもません、と囁く。

「うへ、でも、君も敬語ついひとつある」

「僕のは癖になってるんです。不快に感じるなり直すよつて努力し
ますけど……」

「や、そんなことないー！」

刀子の躊躇には、自分がだけ敬語を使つていのいのは子供っぽい、と
いつ意地だったのだが、それを自覚することになかった。

「じゃあ、僕もできるだけ普通に話すようにするから、刀子ちゃん
もそれでいい？」

「…………うん。ええけど、その刀子ちゃんって」

「嫌だった？」

「…………ウチ、自分の名前、あんまり好きひつけねん。かわいくない
し……」

「 もう？ 凜々しい雰囲気に似合つてゐると思つた。それと、僕のことも大和でいいから」

不思議な少年だと思った。

会話のペースをずつと握られっぱなしだ。

それは別に不快ではないけれど、気が付けばお互に名前で呼ぶことを決められてしまった。

(あ、そういうえば、苗字聞いてへん)

「それで、刀子ちゃんはこんな所に何をしに来たの？ ここには雄大な大自然しかないけど」

「え？ あ、ええと、それは」

家族と喧嘩して家を飛び出してきた、とは言いつらかった。

第一、事情を話して、外部の人間に八百長をもちかけられたなどと知られれば大目玉だ。

どう誤魔化したものかと、周囲に忙しなく目を泳がせる。

そこでふと、川辺に置いてある木刀が目についた。

「そ、そう！ 素振りしに来たんよ！ ウチの道場じや、あんまり集中できへんかったから！」

かなり苦しい言い訳だが、大和は深く問い合わせでもなく納得した。

「じゃあさ、刀子ちゃんが素振りしてた姿、見学してていい？」

「え……」

予想外の切り返しに、刀子が言葉に詰まつた。

「で、でも、もうそろそろ暗くなるし」

「大丈夫。夜までには帰るし、それにどのみち刀子ちゃんに付いていかないと、山を降りられないしね」

「じゃ、じゃあ直ぐに送るから」

「それはわざわざここまで来た刀子ちゃんに悪いよ」

「ウチの素振りなんて見てもおもらないで？」

「僕も剣術を習っているから、何かアドバイスとか出来るかもしないよ？」

反論を片っ端から潰されて、結局刀子は彼の前で剣を振ることになつた。

河原で素振りをする刀子と、それを石に座りながら見学する大和の構図は、傍から見れば奇妙なものだつただろう。

「やつぱりもう少し腕の力を抜いた方がいいよ」

(「へ、じつと見られると恥ずかしい）

「刀子ちゃん？」

「え、な、なに？ 大和くん」

「いや、なんかボンヤリしてゐみたいだつたから。なにか悩み」と
？

「うん、そんなんやあらへんよ。それで、せつきは向て言つたん
？」

「そりそり、腕の力がね……」

大和は自分の体で解説する。

大和の説明はとてもわかりやすく、下手な師範代よりも要領を得ていた。

その知識に驚きながら、この大和という少年は一体何者なのだろうか、という疑問が胸の中で膨らんでいく。

（そういえば、ウチの素振りの音が聞こえたって言つとつたけど、こんなに滝の音がうるさかつたら、普通聞こえへんもんぢやう？）

疑問が疑問を呼び、我慢できなくなつた刀子は、この不思議な少年のことでもつと知りたいと思つよつになつた。

「ねえ、大和くんの素振りも見せてくれへん？」

「ん？　いいよ」

あつさりとア承した大和は、刀子から木刀を受け取り、その感触を確かめてから剣を振る。

そして彼の素振りを見た刀子は目を剥いた。

（す、すごい。木刀がほとんど見えへん！）

集中力、構え、体さばき、剣速、残心、そのどれをとっても刀子よ
り上。

特に、風切り音さえ置き去りにするほどの剣速は、いつそ感動すら覚える。

その知識と指導力から只者ではないと思っていたが、大和の力量は刀子の予想の遥か上を行っていた。

「ふう、これでいい？」

一通り型を終えた大和が、刀子に尋ねる。

しかし刀子は鮮やかな、美しくすらある剣舞に見蕩れており、すぐに返事を返せない。

「刀子ちゃん？」

「……ふえ？」

「いや、ふえて……」

「……はつ、い、いや、ちやうねん！ その、凄く綺麗な太刀筋だったから見蕩れちゃって、ああもう何言つとんのウチ！？」

テンパつた。

「いや、これぐらに刀子ちゃんなりすぐにはできないよ~。」

「いや、無理や……ウチ、そんなんできる自信ない……」

「大丈夫だつて。ほら、じつあにおいで」

大和は刀子の腕を掴み、優しく引き寄せる。

「ええ！？ ちよ、何するん！？」

「はい、木刀持つて」

「そんなん強引すぎ……え？」

「僕が型を教えてあげるから、一緒に練習しよう。」

「……」

「ん？」

「……スケベ」

「ええええー！？」

「はい、上上で足を前に出す。大切なのは重心を崩さないこと」

「なるほど……」

刀子の力は、大和のわかりやすい指導のおかげもあり、この短時間にしては飛躍的に上昇した。

大和は観察眼も異常に優れていた。

悪い癖があれば即座に指摘し、正しい型に直す。

本当にこの少年は何者なんだろうか。

その疑問は刀子の胸の中に残っていたが、そんなことがどうでもよくなるほど充実した時間だった。

「すういな、こんなに早く覚えちゃうなんて」

「ううん、大和くんの教え方がよかつたからや」

新しい技、新しい足捌きなどを覚えた刀子の精神は高ぶつており、今すぐにでも試したくなっていた。

次の試合はいつだろ？、と考えた時、不意に思い出す。

三日後の宗家との御前試合、相手の顔を立てるために、わざと負けてくれ。

「あ……」

「どうしたの？」

「え、な、なんでもないで」

思い出しちゃった。

田舎は二日後、わざと負けねばならない。

感情のやり場を無くし、家を飛び出しちゃったものの、田舎といつもの田舎子を非常に重んじる。

御前試合で宗家が分家に無様に負けることが、宗家にどうぞこれほどの屈辱であるか、聰い刀子は十分に理解していた。

刀子自身、落ち着いた今となつては父と母の間の喧嘩ともわかる。

宗家に恥をかかせたとなれば、その後に一番苦しまるのは他でもない刀子だ。

ただ、こんなに一生懸命に指導してくれる大和を見ると、わざと負けるといつのが、ひどい裏切りに思えて

「みんなさーい……」

「え、どうしたの刀子ちゃん？」

「みんなさー...」

ボロリ、ボロリと

涙がこぼれ落ちる。

「え、ええ!? どつか痛めたの!? それともさつき、刀子ちゃんに触りながら教えたのが気持ち悪かつたり!?

「…………なんとか……」

罪悪感に耐え切れず、とうとう泣き出す刀子。

それを見て慌てる大和。

「えええええええんーー！」

「ええええええええええええ！」？

「そんでな、大和くんに申し訳ないって思つたんよ……」

「やうだつたのか……」

刀子は大和に事情を説明した。

といつても、宗家だと正直に全てを打ち明けてしまうわけにもいかず、ただ『今度の試合でわざと負けないといけない』とだけ言つた。

「ホンマにめんな、せつかく色々教えてくれたのに……」

「ハハん、刀子ちゃんが氣にする」とじやないよ」

「でも」

「はい、『でも』は禁止。そんな事情があるなら仕方がないよ。それとも、僕と一緒に練習するのはイヤだつた?」

「そんなわけない!」

自分で驚くほどの声が出た。

そんな刀子を見て、大和は笑う。

「ならいいじゃない。それに、僕にも隠してある」とはあるし

「大和くん?」

「ん、ああ、ゴメン、ゴメン。もう暗くなつてきたり、それから帰らないとね」

「あ……」

わづかの静かな時間が終わってしまった。

刀子の心に悲しみと、寂しさが募つた。

「さあ、家の人気が心配しちゃうよ。早く帰らう」

「…………うそ」

そして二人は山を降りる。

その間、二人に会話はなかつた。

「ここまで大丈夫。 もうあとはわかるから」

「……うん」

「刀子ちゃんは大丈夫？ ここから一人で帰れるの？」

「……うん、大丈夫。 この辺詳しいから」

上の空で受け答えをする刀子。

「そう。 それじゃあね、刀子ちゃん」

「あ……」

くるり、と大和は宗家の屋敷へ帰つていく。

再会の約束もできなかつた。

ううん、それ以前に剣術を教えてくれたお礼もしていない。

何か声をかけなければいけない。

でもなんて言えばいいんだろ?「へ

ありがとう?「へ

またね?

それとも……

「刀子ちゃん」

はつ、と意識が浮上する。

気が付けば、彼は歩みを止め、こちらを振り返っていた。

「用並みなセリフで悪いんだけどね……」

彼は恥ずかしそうに頬をかく。

そして、言った。

「刀子ちゃんには、泣き顔よりも笑顔の方が似合つてゐる。だから安心して。僕がなんとかするから」

不覚にも、また泣きそうになつた。

そして、家に帰つた刀子は家族から告げられる。

宗家の方でなにかゴタゴタがあつたらしく、御前試合は急遽、中止になつた。

父と母が刀子に謝る。

すまなかつた。

辛い思いをさせた。

刀子は泣きそうになつたが、ここで泣いたら進歩がない。

唇を噛み締めて、必死に涙を堪える。

彼にこんな顔を見せるわけにはいかない。

結局、今日は一度も彼に笑顔を見せてはまできなかつた。

それなのに、彼は泣き顔よりも笑顔の方が似合つと言つてくれた。

ならば、ここで笑顔の練習をしておくれただろう。

また、あの場所で出会った時に、とびっきりの笑顔を見せるため。

外伝一

「君臨者よ！ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ！ 焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ！」

胸の前で印を組み、詠唱する大和。

「破道の三十三 赤火砲！」

突き出した腕から、その名の通り、まさに大砲のような火球が発射され、赤い残光を引いて滝に直撃。

瞬時に蒸発した水分は衝撃波とともに、周囲にまき散らされた。

霧のような蒸気が眼鏡を曇らせるが、刀子は気にせず、といつより気づいていないようだった。

口をあんぐりと開けて、大和のテタラメさに思考停止する。

「これが中級鬼道の赤火砲。威力を弱めて出せば照明にもなるしかなり使いどころの多い鬼道だよ」

大和はなんでもなさそうに言うが、本来鬼道というものは、鬼道衆なる専門家が一生をかけて極めていくものだ。

補助的に使う、といつのならばわかる。

だが今の大和の赤火砲は、威力、スピード共に実戦でも通用するレベルだった。

剣を振るつて鬼道も使える、などという人間がいるなど聞いたこともない。

結局、大和が声をかけるまで刀子は呆然としていた。

あれから、刀子は暇な時間を見つけては山の中の滝まで行った。

大和は大抵の場合ここで修行しており、刀子が来るようになつてからは合同で訓練、もしくは大和が刀子の指導をするという日々が続いた。

入れ違いになることもあつたが、刀子は大和と初めて会つたこの場所が気に入つており、ここ以外の場所で待ち合わせをする気にはなれなかつたのだ。

それには大和と二人きりになりたい、という乙女的要素もなきにしもあらずだつたのだが、幸か不幸か、刀子本人を含めて気づいてい る者はいなかつた。

そして、それほどの時間を共に行動しているとやはり、大和が何者なのかという疑問が再び浮かび上がる。

しかし、それを聞いてしまえば、この穏やかな時間が壊れてしまうかもしない。

（でも、もし大和くんが宗家の客人で、もうすぐ帰らなあかんとかやつたら……）

そんなこと耐えられるわけもない。

聞こづが聞くまいが、どちらにせよ別れの可能性はある。

だったら、せめて勇氣を出して聞いてみよう。

そこまで決意するのに三口かかった。

「や、大和くん！」

「ど、どうしたの急に血相を変えて」

「あなたは一体何者なん！？」

……もう少しマシな尋ね方はなかつたのかと、数秒前の自分を殴りたい。

「僕？」

「う、うん。だって、大和くんのこと今まで見たことないし、だったら宗家のお客様なんかなって思つたんやけど、ずっとここに来てくれてるし。剣の腕がすごいと思つたら、三十番台の鬼道を簡単に使つちゃうし」

「あー……（本当は詠唱破棄もできるんだけど、それを言つたら大変なことになりそうだな）」

思い当たる節があるのか、視線を逸らしながら頬を搔く大和。

「いや、別にすげー秘密があるとかじゃないんだけど、今更言いつのはちょっと恥ずかしいというかさ」

「教えてくれへんの……？」

刀子の上田遣いと涙田（無意識）のコンボにより、大和の心は多大なるダメージを負つた。

「えっと、言つてもいいけど、それで刀子ちゃんの態度が変わったりしないかなって」

「ウチつてそんなに信用ないんや……」

「えつ？ いや、あの」

さらば追い打ち。

「「めんな……大和くんの迷惑も考えんで」

「ぐふひ」

トドメをさした。

「ま、待つて！　聞ひへ、言つからー。」

「ゴホン、と咳払いし、大和が自分の苗字を告げようとした時、

「一ひーつ！　大和君、今日は俺と試合する予定だつたわうがーー！」

山の下から若い男の怒りの声が響いてきた。

「あつ、やっぱ。詠春さんだ」

「え、詠春さんって……あの青山家のー？」

刀子は、思わず人物の出現に目を見開く。

青山家と近衛家、京都においてこの二つの家を知らぬ者はいない。

特に優れた武芸者を輩出する青山家は、武を志す者たちから崇拜されてさえいる。

刀子もその例に漏れず、彼らを目標として設定し、いつか追いついてみせると息巻いていた。

もとも、最近はその目標が大和に変わつたあるのだが。

「あわわわわ」

「いけない、今日は詠春さんと三本勝負する口だった」

完全に忘れてた、と頭を搔く大和。

どうしてそんなに落ち着いているのだろうか。

あの青山家の詠春と勝負できる、と分家の人間が言われれば、一ヶ月ほど山籠りして備える。比喩ではなく。

それをすっぽかしておいて、全く慌てていない。

刀子の中の大和の印象が、もはや宇宙人のそれに近づいた。

「『めんね刀子ちゃん、この埋め合わせはいつか必ずするからさ』

ちょっとと行つてくるね、とまるで近くのコンビニ行つてくる的なりで大和は山を降り始めた。

刀子はそれを口を開けて見送っていたのだが、途中で大和がふと足を止める。

「僕の名前は五木大和。これからもよろしくね、刀子ちゃん」

イタズラが成功した子供のような笑顔。

刀子は、その言葉をすぐには理解できなかつた。

いつき？ イツキ？ 五木？

五木つて……あれ、なんか、葛葉の宗家が、そんな名前だつたよ
な。

「……ええええええええええええええ……？？？」

もう何度も田になるかもわからない、刀子の悲鳴が響きわたつた。

「ちよっと、お母さん…」

かれこれ一時間ほどフワーズしていた刀子だったが、我を取り戻した瞬間、家に向けて走った。

「あらあら、エーッしたの刀子ちゃん。そんなに血相を変えちゃって

「五木大和くんって知ってる…？」

その名前を聞いた瞬間、刀子の母親はわずかに目を見開いた。

「……エリヤー彼のことを見つたの？」

「え、あ、その」

その反応から、自分はなにかいけないことを聞いてしまったのかと心配になる。

「聞いたやアカンことやつた……？」

「……そんなことはないわ。でも、刀子ちゃんが彼のことを見つてるなんて思わなかつた。どこかで知り合つたの？」

「うそ。」の前、家を飛び出した時に……

それを聞いて、母親は納得した。

「じゃあ試合が中止になつたのも、やっぱり彼の……」

「お母さん？」

「ああ、そういうえば説明がまだだつたわね。別にあの子の存在は隠されているわけじゃないわ。実際、大人たちの大体は彼のことを知つてゐるしね」

「じゃあ、なんで」

「……才能がありすぎた、からかしら。剣術も鬼道も」

「それがいけないことなん?」

「いけなくはないのよ……ただね、剣術で青山家を上回る子がいる、ところのはあまり広まつていい情報じゃないの」

「あ……」

それは刀子も以前に経験したこと。

旧家は面子を重んじる。

確かに、五木家は代々伝わる由緒正しい一族だ。

だが、青山や近衛といった頂点に比べると、どうしてもこいつらが見劣りする。

その家たちにとつて、大和の存在はあまり広まってほしくないに違いない。

「だから、彼のことを口に出さないのは暗黙の了解のようなものなの。誰だって青山に睨まれたくないから」

「せうやつたんや……」

そんな事情も知らずに、自分は大和に無神経なことを聞いてしまった。

自責の念に駆られて俯く刀子だったが、その肩に優しく手が置かれる。

「でもね、刀子ちゃん。大和君と青山家の子たちはとっても仲がいいの」

「え？」

「大人の事情なんて知つたことじゃない。そういうことなのよ、あの子たちにとつてはね」

そう言われて、刀子は思い出す。

勝負をすっぽかされて怒っていた詠春だが、恨んでいたような声だつただろうか？

青山家から圧力をかけられているにも関わらず、大和は詠春のことを探んでいるようだつただろうか？

「あ……」

そんなことはなかつた。

詠春の声は不真面目な弟を叱るよつな声だつたし、大和も詠春に隔意があるよつには見えなかつた。

つまり、彼らにとつてはどうでもいいことなのだ。

「それにしても大和君かー。ねえ刀子ちゃん、どうせなら玉の輿を狙つてみない？」

「……ふえ？」

母親のその発言により、シリアスな空氣は粉微塵にされ、ちょうど帰宅した父親が『刀子をやれるか!』と叫び、てんやわんやの大騒ぎとなつた。

「は、初めまして。わたしは葛葉刀子つていいます」

「俺は青山詠春。別にそんなに固くならんでいいよ」

「そりどすえ刀子はん。ウチは青山鶴子。もつと碎けていきまひょ」

「わ、わたしは青山素子です。よろしくお願ひします、刀子さん」

その後、刀子は大和から青山家の三人を紹介された。

(あ、アカン。この人たち、なんかオーラみたいなん出とるー。)

錯覚だ。

元々、この三人は家の地位などをあまり気にしない質だったのもあり、親しくなるのにそう時間はいらなかつた。

修行の時間が終われば、誰からともなくいつもの滝まで集まり、そこで遊んだり、剣を教え合つといった生活が続いた。

刀子は大和の修行の成果もあり、急激にその力を増して、今や鶴子のよきライバルとなつた。

そんなんある口のこと、

「へへへへ……」

素子が泣きながらいつもの場所に現れる。

既に素子以外の全員が集まつてあり、大和と詠春、刀子と鶴子のペアに分かれて試合をしていた。

泣きながら現れた素子を見た四人は、血相を変えて詰め寄る。

特に大和と詠春と鶴子の三人は、幼い素子を溺愛していた。

「IRJに来るまでに、蜂に刺されました……」

「いいか、蜂退治に使える鬼道は何だつたかな……飛竜撃賊震天雷砲で

「まあ待てよ大和君、ここは俺がこの前覚えた雷光剣でだな」

「まったく、一気に殺すなんて一人とも甘いですなあ。
匹斬り刻んでいくのに決まってるやないですか」

三人は顔を見合わせて笑う。

「蜂狩りじゃあつーー！」
一部の蜂を絶滅せんぞつーー。」

L

そのまま二人は山の中に消えていった。

取り残される刀子と素子。

「……」

「……」

「それじゃ、素子ちゃんはウチと稽古しことか？」

「は、はい！ よりしくお願ひします、刀子姉さまー！」

「破道の八十八 飛竜撃賊震天雷砲ーー！」

「神鳴流奥義、雷光剣ーー！」

「神鳴流奥義、百烈桜花斬ーー！」

その日、巨大な山のひと区画が消滅した。

楽しい日々。

「ぐぐ……今日は大和君から一本取れると思つたのに」

「あそこで勝負を焦つたのが敗因だす。もう少しじどり構えなアカン」

「兄様……かつこわるい」

「ふげんつーー？」

穏やかな日々。

「ねえ、大和くん。一つ聞いてええかな？」

「どうしたの刀子ちゃん」

「大和くんはすうじく強いし、毎日修行しどるけど、一体なんのために力をつけてんのかなって」

「……」

「聞いたやアカンかつた……？」

「……いや、隠す理由もないけど、苗字と一緒に、知られるのがなんか恥ずかしいというか」

照れくさそうに頬を搔く大和。

それが大和の癖だと理解するほどには、刀子は彼とともに行動していた。

「毎日修行して、力をつけようと/orしてるけどさ、別に戦うのが好きってわけじゃないんだ。いや、むしろ嫌いなぐら」

「うん」

それも理解していた。だから気になつた。

「……話は変わるけど、鬼道つてや、破道に比べて縛道はあまり評価されてないんだ」

「そうなん?」

「うん。敵を殺さずに捕らえるところのは軟弱なんだって」

でも、と続ける。

「僕はどちらかといえば縛道の方が好きだな。作成者の、できるだけ人を殺したくないっていう気持ちが伝わってくる」

「……」

大和は今、大事な話をしていふことを察して黙り込む刀子。

「僕らの修行してるのは、どう言い繕つてもなにかを傷つける技術だ。それは言い訳のしようもない」

「……」

「でもさ、この技術でなにかを守れることもあると思うんだ。僕はこの技術で、人を守れる存在になりたい。多くの人の命を救えるような存在に」

そう、お伽噺の英雄のように、僕はなりたい

「……もし」

刀子が口を開く。

「もし、大和くんが英雄になつてくれたら、ウチのことも守つてくれますか？」

「ああ、もちろんーー！」

満面の笑みで言い切る大和。

刀子はその顔に見蕩れ、どんどん顔を近づけていき

「ちょ、二人とも押さないで……！」

「もう少し詰めいや、ウチが見えへん……！」

「あ、あ、刀子姉さまがキスしそう……！」

「「マジかー？」」

大和と顔を見合せた。

二人揃って笑う。

そして、傍らに置いてある木刀を手にとった一人は、そのまま茂みへと歩いていき、

「「のわーーつーー？」」

二人分の悲鳴が響きわたった。

こんな日がいつまでも続くと思っていた。

こんな穏やかな日が、いつまでも続くのだと。

だが、大和と刀子が初めて会った日から三年後、その日に

全てが壊れた。

それから一年後

「ここに来のも久しぶりですね……」

真夜中、丑三つ時を過ぎたころ、刀子はいつも遊んでいた場所までやってきた。

刀子は十五歳になり、昔のよつなオドオドした態度はもう無い。

「起きる、紅姫」

刀子の持つ刀が鍔の無い、短めの直刀に変化する。

斬魄刀は、宗家である五木家だけのものであり、普通は分家に伝えられることなどない。

だが、血の滲むような修練により、宗家中でも敵うものがいなくなった刀子は、特例として一冊だけ斬魄刀の蔵書を見ることが許された。

そして、刀子は見事、斬魄刀『紅姫』を屈服させることに成功した。

「啼け、紅姫」

刀を一閃、刀身から放出される血霞みは、見事に巨大な滝をまつぶたつにした。

「大和さん……あれから、私は強くなりました」

一年前のあの日、大和になにがあつたのか、刀子は詳しく知らない。

ただ、あの日に天ヶ崎夫妻が西洋魔術師に殺されたことを発端とする、大きな戦争があつたとしか知らない。

そして、その戦争に大和が参加し、西洋魔術師を皆殺しにして、帰つてこなかつたことしか

大和が消えたその日から、詠春は物思いにふける田が多くなり、その後に武者修行の旅に出た。

鶴子も素子も、この場所にはあまりこなくなつた。

刀子は河原の石を拾う。

うつすらと赤い石だつた。

そう、まるで血が染み込んだかのような、赤い石。

本当に、刀子はあの日に大和が何を思い、何をしたのか知らない。

ただ、いつも想像した。

この技術で、人を守れる存在になりたい。

笑いながらそう語った少年は何を思い、その刀を振るつたのだろうか、と。

「なんで……ウチを置いていつたんよ……」

刀子の目から涙がこぼれ落ちる。

血に染まった赤い石に、吸い込まれていく。

だが、決して血は消えずに、こびりついたまま。

刀子は涙を流し続ける。

その光景を、ただ月だけが見ていた。

第十一話（前書き）

文がグダグダだ……

第十一話

「なんじゅ、これが『紅き翼』の秘密基地か。ただの掘つ立て小屋ではないか！」

「そーだそーだ。こいつらゲストだぞ。VIPだぞ。もつと待遇よくじやがれ」

「…………ヤマトとじゅ馬姫。今の俺たちはお尋ね者なんだが、そこんどこ理解してんのか？」

「ひむかのじゅ筋肉ダルマ。闘技場でヤマトにナちゃんけちゃんにされたくせ」

「よし、俺つて今喧嘩売られてるよな？　だったら買つていいよな？」

「？」

「助けてなのじゅヤマトー！　筋肉ダルマが襲つてきたのじゅー！」

「あ、テメ＝卑怯だぞ！」

「よし任せろ。焼死、凍死、圧死、溺死、感電死、ショック死、窒息死、衰弱死、野垂れ死に、どれがいい？」

「最後のひびいな！」

「ふふふ、楽しそうですね。ねえ詠春？」

「わづか……？」

和氣藪々（？）に行動を共にする、大和たちと『紅き翼』。

アーウェンルクスとの戦闘を終えた後、『紅き翼』は王女の危機に駆けつけた。

そして、そこにいたのは殺氣立つた大和に、今まさに掴み掛かられんとしていたアリカ。

その状況を見て、リーダーであるナギは即座に割つて入るつとしたのだが。

「……」

「おや、ナギはまだ拗ねているのですか？」

「……拗ねてなんかねえよ」

「ヤニヤと笑うアルビレオ。

「まあ仕方ないだろ。かつこよく助けにきたのいいものの、勘違いで命の恩人に攻撃しそうになつたんだから」

タバコとステッジが似合つ渋い男、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバークも同調する。

「それにしても、あの張り手は痛そうでしたね……空中で二回転もする張り手なんて初めて見ました」

その弟子である、高畠・T・タカミチが無邪気に傷口を抉つた。

あの時、ナギは大和に向けて突撃。完全に戦闘態勢に入っていた。

大和も、ナギの様子から説得は不可能と判断し、迎撃の姿勢に移る。

誤解と勘違いから『紅き翼』との全面戦争になるところだったが、それを止めたのはアリカだった。

「心配してくれたのは有難いが、少し落ち着け」

「ふもつふ!?」

大和に拳を振り上げていたナギの顔面に張り手が炸裂。

見事なトリプルアクセルをきめた。

(アレ痛いんだよなあ……)

地面に墜落し、痙攣するナギを見下ろす。

少し、哀れだつた。

「ナギ！ 勝手に飛び出すな……って、大和君！？」

「詠春さん……」

続々と『紅き翼』のメンバーが集まる。

「何だお前ら、この男とは知り合いなのか？」

「ふむ、知り合いとおもいますか、なんと言おうか。どちらかといえば裏ボスって感じでしょうか、ガトウ」

「裏ボス？」

「……以前、グレート＝ブリッジで辛酸を舐めさせられた相手ですよ」

「『ハイツ』が、噂の！？ まだ子供じゃないか！」

「……子供で悪かったな。俺はもう帰るぞ」

氣を失つていいテオドリフをアリカからひつたくり、肩に担いで『紅き翼』に背を向ける。

「待て」

「……なんだ。王女さんよ」

アリカに呼び止められ、嫌々な顔を隠そりともせず振り返る。

「先程は助かった。礼を言つ

「ああ？」

「わらわを助けるつもりはなかつたのだろうが、結果的に奴らに捕まることもなかつたのも事実じゃ」

「あつそ、どーいたしまして」

素つ氣無く言い放ち、再び歩を進める。

「待つてくれ、大和君！」

だが、今度は別の人物に呼び止められた。

「……なんですか、詠春さん」

「君と話がしたい。少しの間でいい、私たちに付いてきてくれないか？」

その発言をした詠春に、『紅き翼』から正氣か？ といつ視線を向けられる。

ちなみに、ナギはまだ痙攣していた。

「俺には話なんてないですよ」

「君が去った後の、刀子君の様子を知りたくはないか？」

一瞬、大和の肩が揺れた。

「私も、刀子君も、鶴子に素子ちゃんも、君と話したいことは山ほどあるんだ。頼む、少しだけでいい。時間を私にくれないだろうか？」

詠春は深々と頭を下げる。

「……」

大和も詠春も、他の人間もなにも言葉を発しない。

その沈黙を破ったのは、

「いいではないか、ヤマト」

「テオドラ、……お前、起きていたのか？」

大和の肩に担がれた、テオドラだった。

「田が覚めたのはついさっきじゃがの。それでもそことの野との会話は聞いた。別にちょっとと話すぐらいよいではないか」

「やがましい、ガキは黙つてろ」

「なにを一つ！ ヤマトだつてそんなに変わらないではないか！」

いつものじゃれ合いをする一人に、『紅き翼』の面々は呆気に取られる。

「ならばわらわが『紅き翼』と行動すればよいのじゃ！ そしたら護衛であるヤマトもついてこなければいけないのじゃ！ わらわ天才じや！」

「せうか、なら遠慮なく行つていい」

大和はテオドラをラカンへ投げ飛ばす。

美しい放物線を描き、ラカンにキャッチされた。

「そんなバカな！？ 命にかえても守つてくれるのではなかつたのか！？」

「誰がいつそんなこと言った」

「むが一つ……」

ラカンの腕の中で暴れるテオドラ。
たまに腕や足などがラカンの顎に直撃する。

「ちょ、コイツいい加減に離せ！ 筋肉臭い！」

「お？ そんなに俺様の筋肉臭が気に入つたかい？」
「く嗅いでいいぞ」
よし、遠慮な

「...」
「...」

テオドラの絶叫が響きわたる。

その間、ずっと詠春は頭を下げ続けていた。

「詠春さん……やめてください、貴方がそんなことをする必要はないません」

「俺が京都を離れて武者修行する理由のひとつは、君を探し出すことだ。前回は戦場だったが、今回の機会を逃すわけにはいかない」

1

一
頼む

このまま断り続ければ、詠春は土下座でもしそうな勢いだった。

青山家に仕えていた身分として、居心地の悪さがひどい。

「…少しだけです」

結局テオドラを放つておくこともできず、大和は一時『紅き翼』と行動を共にすることに決める。

この間、ナギはずっと地面で痙攣していた。

『紅き翼』の隠れ家に案内された大和は、ナギの威嚇やラカンの挑戦、タカミチの尊敬の視線などを受け流していた。

(「マイシラ、俺が敵だつてこと忘れてんじゃねえだろうな……）

テオドラはといえば、ラカンとじやれついていた。

その光景を見た大和はため息をつく。

そして、少し離れていたガトウ達が状況の整理を始めた。

「つまり、マクギル議員亡き今、連合すら頼ることはできません。我々も敵の罠により、指名手配されてしましました」

「そりか……連合も帝国も、既に奴らの手の内が」

「残念ながら」

「なるほど、これで世界中が敵に回つたわけじゃな」

絶望的な状況であるにも関わらず、アリカの顔には焦燥は見えない。

むしろ不敵な笑みすら浮かべる。

「だが、まだお主らがある。一人一人が一騎当千の『紅き翼』が」

アリカはナギに正面から向き直った。

「我が騎士ナギ・スプリングフィールドよ」

「騎士？ 僕は魔法使いだけど……」

そこまで言つたナギは、周りから『空氣読め』の視線を受け、黙り込んだ。

「我らに味方はおらぬ。連合も敵。帝国も敵。このままでは世界は奴らに滅ぼされるのを待つだけじゃ」

「……」

ナギも大和も、その言葉を受け入れる。

「誰も頼ることなどできぬ。これからもわらわたちが奴らと戦うといひ」とは、世界と戦つことと同義」

セイドアリカは一度言葉を区切った。

「 それでも、戦い続ける覚悟がお主にはあるか？」

そう問い合わせられたナギは不敵に笑う。

「ああ。俺たちはこんなとこひで折れるはず、ヤツな翼は持つてねえ」

その言葉を聞いたアリカも笑う。

「ならば、我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が楯となり、我が剣となれ」

「く……まつたく、相変わらずおつかねえ姫さんだぜ」

そして、ナギは騎士の誓いを立てる。

田の畠の明かりに照らされたその光景は、まるで物語の中のようだ

つた。

それを見た大和は思つ。

自分がかつて目指し、失敗した道を。

自分は、どこので間違えてしまったのか、と。

「すまないな、こんな時間に呼び出しちゃって

「いえ」

現在は夜。

詠春に呼び出された大和は、隠れ家の外で落ち合つた。

「まず、君が無事でよかつた。あの日に行方をくらませてから、君が無事かどうかもわからなかつたからね」

「……」

「京都を出てから、ずっと一人で旅をしてきたのかい？」

「……ええ、旅費は拳闘士の試合とかで稼いでいました」

「そうか。まあ、大和君なら問題なかつただろう」

「ええ」

「……」

会話が途切れる。

大和が心を開く様子がないのは明白だ。

詠春は思わず天を仰ぐ。あの素直な大和がここまで変わつてしまつたことに。

「大和君。あの日に一体何が起きたのか、俺に教えてはくれないか」

「……」

「いや、何が起きたのかは大体理解している。あの時に君が何を思つていたのか……それを教えてくれないか」

詠春の真摯な願いに、大和は首を振る。

「……別に、大したことじゃありません」

そう告げる大和の顔に、表情は存在しなかつた。

「ただ、人のために戦うとか、少し疲れたんですね」

「……そつか

詠春は、大和が自分にこれ以上本心を打ち明けてはくれないだらうことを悟った。

「とりあえず、君が無事で安心した。できるならば京都に一度戻つて、刀子君たちに顔を見せてくれると嬉しい」

「はい……」

大和は踵を返し、隠れ家に戻つていく。

詠春はその場に座り込み、もう一度天を仰ぐ。

一年前のあの日も、こんなに綺麗な夜空だったな、と思つた。

「で、今度は王女さんか」

「うむ。お主たちが外に行くのが見えたからな」

「……こんなに堂々と盗み聞きしてたのをバラすやつ、初めて見た
わ……」

隠れ家の小屋の前、部屋に入つて寝ようとしていた大和の前に立つ
ていたのはアリカだつた。

「その点については謝罪しよう。すまなかつた

「……いや、別に気づいて見逃してたし、大事なことも話すつもりもなかつたしな」

大和は特に気にしていない。

そんなことよりも、さっさとベッドで寝たかった。

アリカの横を通り過ぎて、小屋の中に入ろうとする。

だが、

「……おい、なんだよこの手は」

アリカの手が、大和の腕を掴んで離さない。

「話がある」

「断る」

アリカの提案を聞く前に却下。

内容など簡単に予想できる。

「どうせ、『紅き翼』と協力しあつて言いつもりだろ？ 悪いがパスだ」

「先程お主が言つていた、人のために戦うのが疲れたと、そういうことか？」

「ああ。心配しなくとも、アンタの騎士は強い。俺なんざいなくと

も『紅毛翼』だけで十分に世界なんぞ救えるぞ」

実際に戦つてみてわかった。

ナギ達の力は、まだ伸びる。

現在はあのアーヴェルンクス達の方が強いだろうが、このまま成長を続けば、間違いなく追い抜くだろう。

「だから、この手を離せ」

「ふむ、先程は我らの騎士の誓いを羨ましそうに見ていたのでな、てっきりお主も世界を救いたいのかと思ったわ」

「……っ」

無言で腕を振り払う。

「わらわはこれでも王族じや。人を見る目くらいはある。お主が内心では、人を救いたがっていることぐらい丸わかりじや……どうしてそこまで無理をする」

図星だった。

そもそも、戦つことが嫌いなのに、刀を捨てていない時点で語るに落ちている。

結局、五木大和はまだ、縋っているのだ。

刀に。

力に。

この力で、何かを守りたいと。

第十一話（後書き）

次で過去編完結予定。

京都、関西呪術協会の総本山のさらに奥。

とてつもなく広い屋敷の部屋の中で、一人の男が跪いていた。

「申し上げます。関西魔法協会の西洋魔法使い達は最終防衛線を突破。ここ、総本山に向けて進撃中であります」

跪いている男が、絶望的な状況を知らせる。

「敵の総数　およそ百」

その部屋の奥には簾に覆われた空間があり、そこから老人のため息が漏れた。

「……本国でAクラス、またはAAクラスによる混成部隊。儂らの小飼いの術者では足止めにもならんとはな……」

数日前、関西呪術協会の一員である天ヶ崎夫妻が、西洋魔法使いによつて殺されるという事件が起こつた。

メガロメセンブリアの魔法使いにより行われた犯行は、瞬く間に関西に衝撃をもたらし、元々険悪だった両者の関係に火種を放り込む形となる。

今回の事件は、メガロの元老院の一人が功を焦り、関西を滅ぼしたという功績をあげるために企んだものであった。

小康状態にあつた両者の間で、西洋魔法使いが関西の術者を殺すと
いう事件は、戦争のきっかけとなるには十分だつた。

いたる場所で小競り合いが起きる。

やられたからやり返す。それの繰り返し。

関西呪術協会と関東魔法協会は、もう引き返せないところまで来て
いた。

伝令が去つた後、薄暗い部屋に残されたのは老人だけ。

「大和……大和はあるか」

「此処に」

その部屋に、五木大和がどこからともなく現れる。

「今の状況は把握してあるな」

「はい、当主様」

簾の奥に潜む老人、彼こそが現代の五木家当主、五木元蔵。

実質的な戦闘力は少なかつたものの、その類い稀なる政治力を用いて五木家の地位を向上させてきた老獴。

そして、大和の実の祖父である。

「ならば話は早い。大和よ、お主の力で西洋の魔術師どもを蹴散らしてこい」

「……」

「どうした、何か不服でもあるのか」

跪き、下に顔を向けた大和は、苦しそうに声を出す。

「……戦いは、避けられないのですか……」

「無論だ。そもそも、先に手を出してきたのは向こうの方。今更矛を収めることなどできはせぬ」

「しかしつ！」

「一番最初に西洋魔法使いに殺された、確か天ヶ崎といったか？
その娘も哀れだのう。葬式の時、一人の遺体に縋り付いて泣いていたそうではないか」

「……つ」

「大和よ、状況は最早引き返せぬここまで来ているのだ。奴らの狙いは青山家と近衛家、お主は青山の御三方と親しかろう。彼らを守るのがお前の役目だったはずだ。何を躊躇つことがある」

「それは……」

「詠春殿や鶴子殿はまだ未熟だ。今の彼らでは百のAクラス魔法使いを相手にするのは不可能。だが、既にいくつかの正解にまで至つたお前ならば、西洋魔術師とも渡り合えるだろ?」

詠春や鶴子は将来の武を約束されてはいるが、現時点では戦力として大きな期待はできない。

それ以前の問題として、彼らは青山家の者。

いわば総大将だ。

大将自らが戦争に参加するようなリスクの大きい行為、関西からしたら認め難く。

「……私の縛道を使えば」

「不可能だ。今回の敵は殺さずに済むほど甘くはない。そもそも縛道は敵を長時間拘束するのに向いてはおらん。そんなことはお主も重々承知のはずである!」

「……」

大和は黙り込む。

なんだかんだと言い訳をしたところで、結局大和には人を殺すだけの覚悟が無いだけの話。

そして、それを見抜けぬ元蔵ではない。

「やはり、お前には甘い部分が枷となるか」

「……申し訳、ありません」

大和自身、自分が甘いことは自覚している。

自分が戦場に出なければ、他の誰かが代わりに戦場で死ぬことになるのだろう。

それならばいつそ、最初から大和が敵を皆殺しにすれば、少なくともこちらの犠牲は抑えられる。

そこまで分かつていても、大和は人を殺すことを、受け入れることは出来ず。

「……今のお前を戦場に送ったところで、戦力としては期待できぬな」

思わず大和は顔を上げる。

「ふむ、まあ関西の今の勢力からいって、お前を無理に出す必要もないな。他の分家などから戦力を徴収すれば、十分に奴らに対抗できるであろう」

無論、犠牲は出るであろうがな、と言葉を続ける。

元蔵のその言葉を聞いた時、大和は不覚にも安堵した。

誰かを救いたいという願望は、確かにある。

だが、大和は未だ十三歳。

味方を守るために敵を殺せと言われても、簡単に頷くことはできなかつた。

「お前は五木家の切り札でもある。そういうそれと出すわけにもいかんしな。今回の戦では分家から兵を集めるとしよう」

大和は自己嫌悪に駆られながらも、異議を唱えることができない。

「それに、ここ最近の分家の成長振りならば、Aクラスの魔法使いと云えどもやつやつ引けをとるまい」

……不意に、嫌な予感がした。

「彼らならば、その身に変えて京都を守護するであら」

自らの第六感が叫ぶ。それ以上言わせるなど。

「ほれ、なんといったかな、急に力をつけてきた分家の娘」

だが、元蔵の言葉は止まらず。

「 葛葉刀子のような才能ある者達が集まれば、奴らに対抗することもできるであろう」

最初は見てみぬ振りをしようとした。

しかし、滝の下で泣いているその子をどうしても放つておけず、つい声をかけてしまった。

葛葉刀子と名乗ったその子から話を聞けば、どうやら宗家である五木家からの八百長が絡んでおり、そのことで家族と衝突したという。そこまで聞いた時、思い出したのだろうか、彼女は再び泣き出しそうになる。

なぜだらうか、会つて間もないにも関わらず、大和はその子の泣き顔が見たくなかつた。

家に帰つた大和は、宗家の嫡男であるといつ立場を利用して、試合を中止に追い込む。

今まで人の言ひことには逆らわない、優等生だった大和の最初の反逆だつた。

それからというもの、毎日その修行場に通いつめた。

彼女は青山家の三人とも打ち解け、身分の差など気にしない関係にもなれた。

共に修行し、共に遊んだ。

自らの夢も語つた。

笑顔の似合つ、優しい女の子だった。

その彼女が、戦場に出る？

自分が戦わないせいで？

Aクラスの魔法使い達と殺し合いでさせられるといつのか？

大和はゆっくりと立ち上がる。

自らの策が上手くいったことを察した元蔵は、簾の奥でほくそ笑んだ。

「そこに戦装束を用意してある。衝撃、防刃性能に優れた『死霸装』といわれるものだ。それを着ていくがいい」

その部屋の出口付近に、全てが黒に覆われた着物が置かれてあつた。

大和は緩慢な動作でそれを拾い上げ、その部屋を後にする。

その背中に、声が投げかけられる。

「お前の力は殺すためのものだ」

一瞬だけ、足を止める。

だが、大和は言い返すこともなく、そのまま歩いていった。

その集団は、夜の闇に紛れ、森の中を進んでいた。

「まつたく、たかだか小国の土着勢力一つのために、オレらが動く必要あるんすかね？」

その中の一人、軽薄そうな雰囲気を漂わせた男が言った。

「任務中の私語は慎め。もうここは既に敵地だぞ」

先頭を歩く男、恐らくはこの中のリーダー格であろう男がたしなめる。

「へーへー、お固いじつで」

軽薄そうな男はあまり反省している様子はない。

だが、それは周りの男達も同様であった。

彼らはメガロに雇われた殲滅部隊。関西を滅ぼすために組織された手練たちだ。

Aクラス、もしくはAAクラスの戦力だけで集められた、一流の戦闘者達。

軽薄そうな男にして、一人で村一つぐらいは焼き尽くせる程の力を持っている。

それほどの力を持った彼らだが、現在は大して緊張しているわけでもなく、どこか弛緩した空気が流れていった。

それもそのはず、彼らは既に関西の術者と幾度か交戦しているが、まったく手応えを感じなかつたのだ。

こちらは一人で数人を相手にすることができる。

それほどの実力差があり、なおかつ、この山は百の味方が包囲しているのだ。

集中しろ、という方が無理な話である。

リーダー格の男が何度も注意を促すが、部下の男たちは大して聞いていなかつた。

なんの前触れも無く、リーダー格の男の頭が、吹き飛ぶまでは。

「……へ？」

首の無い体がゆっくりと自分達の方へ倒れてくる。

そしてその男から、思い出したかのように大量の血が吹き出て、後ろの男達の体を濡らした。

「お、おい……」

リーダーのすぐ後ろにいた、屈強な肉体を持つ魔法使いが呆然と近づく。

そして、今度はその魔法使いの胸に風穴が空いた。

「う、敵襲だつ！！」

ここまで時間、僅か数秒。

それだけの時間で魔法使い達は現状を認識し、戦闘態勢に移る。

「あがつ」

「ゴフフ」

だが、死の連鎖は止まらない。

何が起こつてゐるのか把握する前に、体の急所のどこかが欠けていく。

しかも、立ち直りの早い、場馴れしている人間を優先的に狙つてゐるらしく、魔法使い達はすぐに体勢を立て直すことができない。

「狙撃だ！ 全員、円陣を組んで障壁を展開しろ！」

彼らが障壁を展開し、戦闘態勢に入るまでに、半数である六人の仲間が犠牲になつた。

自分達にできる最硬の障壁を展開した瞬間、障壁に敵の攻撃が衝突。

(これは、雷の槍か！？)

彼らを襲っていた攻撃は破道の四　白雷。

雷の槍を相手にぶつけるという初級の鬼道であるが、その異常なまでの収縮率により、最早電磁砲と言える代物になっていた。

おまけに完全詠唱破棄で放たれるので、発動を見極めた時には体に風穴が空いている。

その攻撃を見た魔法使い達は顔を蒼ざめ、慌てて障壁に追加の魔力をつぎ込む。

だが、

「ぶつ手切れ、くびきりおんなち馘大蛇」

その声が聞こえるのと同時、大きい刃の突起が幾つもある巨大な刀が障壁を喰い破り、三人の首を飛ばした。

残り三人となつた魔法使い達は呆然と目を見開く。

粉々になつた障壁の向こうに見えるのは、真っ黒な着物を着た子供。

彼らの目には、その光景がひどく現実味のないものに映つた。

子供の口が僅かに開く。

九人

彼らはそれが、この少年が今まで殺した仲間の数だと理解した。

残り三人の内の一人が恐慌状態に陥る。

命の危機に瀕した男は、反射的に最も使い慣れた魔法である、魔法の射手を連續で発動させた。

「魔法の射手！」 連弾・光の30矢！」

魔力によつて編まれた光弾が、黒い着物を着た少年へと飛来する。

だが、当たらぬ。

見たことのないステップを踏み、曲線的な動きで光弾を回避していく。

あつという間に懐まで踏み込まれ、最後の足掻きとばかりに杖を振り回すが、スコツという間抜けな音と共に、刃の突起が頭に突き刺さった。

「『来れ雷精、風の精！ 雷を纏いて吹きすゞ南洋の嵐！ 雷の暴風！』」

その隙にもう一人が上位魔法を起動。雷と風の嵐が、少年を飲み込んだ。

「や、やつた、これで終わ」

り、という前に、彼の首が飛ぶ。

少年がとつた戦法は単純。かわして、回り込んで、首を切り落としあけである。

これで、残りは一人。

「……嘘だろ、なんだよ、この化け物」

最後に残った魔法使いである、軽薄そうな男が呟く。

彼が生き残ったのは単純に運だ。

立ち直りが早いわけでもなく、すぐに反撃したわけでもない。

そして運良く最後まで生き残った彼だったが、これからも殺されないほど運がいいとは思っていない。

即座に反転、自分の杖に跨り、脇田も振らずに逃走を図る。

しかし、少年はそれを追撃。

さらに変化した斬魄刀にて、男の腕にかすり傷を負わせた。

男はかすり傷など気にも留めず、その場を飛び去りうとするが、不意に手足に違和感を感じる。

(手足が、動かない！？)

男は杖のバランスをとることができず、木に衝突して地に落ちる。

それでも這はずつて逃げようとするが、その足に刀が突き立てられた。

おかしい。

手足が動かないのはまだ分かる。

斬られた時に麻酔かなにかを体に入れられたのだろう。

だが、それならば痛覚も消えるはずだ。

だというのに、彼の足は燃えんばかりの苦痛を訴える。

彼が混乱の極みに達していると、背後から少年の声が届いた。

「お前らの勢力と配置を教える」

その声に、慈悲や慈愛は一切存在しなかつた。

足に刀を突き立てられた男は、無意識に喋った。自分達の標的、勢力、その配置にいたるまで。

刀がゆっくりと引き抜かれる。

助かった、そう安堵する男の胸に、刀が突き立てられて

「た、助けっ」

「ああああああああああああああ！」

その部隊はパニックに陥っていた。

刈れ、
風死かぜじに

その声が響いた瞬間、風切り音がしたと思えば、一対の鎌でつながった特殊な刃の形状をしている鎌が飛来。まとめて数人の命を刈り取つた。

魔法使いとしてだけでなく、魔法戦士としても訓練を受けた男もあり、この攻撃に反応するものも確かに存在した。

高速回転しながら飛来する鎌を、引きつけてかわす。

その一連の動きは洗練されており、Aクラス魔法使いの実力の高さが垣間見える。

だが、木の幹に鎌が引っかかり、大回りしながら戻ってきた鎌に、その首は刈り落とされた。

「どうから攻撃が飛んできているんだ！？」

「それよりも障壁を張るのを優先しろ！」

「だ、誰か、俺の腕が……」

風切り音がするたびに、確実に仲間が死んでいく。

そんな異常な状況に統制などとれるはずもなく、混乱が混乱を呼ぶ。

鎌は鎌を最大限に使い、不規則な動きで先読みを許さない。

気が付けば、一人の男だけが残り、その周囲の人間は全員命を散らしていた。

ヒュン、ヒュン。

「ひつ……」

戦意を喪失した男の耳に、死を呼ぶ風切り音が届いた。

咄嗟にその方向を見る。

そこには真っ黒な着物を着た少年が、まるで死神の如く鎌を回して立つており

その瞬間、飛来した鎌に、命を刈り取られた。

二十八人。

「おかしいな、他のグループと念話が通じない」

そのグループはかなりの大所帯だった。

補給、支援を専門としたメンバーが多く、その護衛も含めると三十人を超える。

その中で、連絡を担当している魔法使いが首を傾げた。

「念話が通じないだと？」

「ああ、スコットとアルクがリーダーの班だ。この二つの班に念話が届かない」

「ふむ、何かトラブルったか、それとも戦闘中か……」

その二つの班の全員が殺されているなど、考えてもいない。

だが、その思考はすぐに覆される。

卍解、狒狒王蛇尾丸

直後、巨大な蛇の骨がグループのど真ん中を突つ切り、その直線上にいた人間のことごとくを圧殺した。

一いつに分断され、呆然と蛇の骨を見上げる魔法使い達だが、場馴れした彼らはすぐに正気を取り戻す。

「敵襲だ！ 全員戦闘態勢に移れ！」

「ちきしょう、よくも仲間たちを！」

突如現れた蛇に対し、その胴体に向かって攻撃魔法を放つ。

『雷の暴風』『闇の吹雪』『魔法の射手』などの攻撃は、的確に骨の関節部分に命中し、バラバラにすることに成功した。

「やつたぞ！」

蛇の骨を解体することに成功し、沸き立つ魔法使い達。

だが、その分かれた関節部分が発光していることに気がついたのは、ほんの数人だった。

「おい、まだ終わっていない！」

「は？」

狒牙絶咬
ひがぜうじやう

人の脊髄を模したかのような骨。

一つ一つの関節が人間サイズである。

その関節部分が、突如として近くの魔法使いへと飛ぶ。

「……あれ？」

呆然とした声が響く。

彼らの内の大多数が、骨の突起により心臓を貫かれていた。

解体された刀身を相手に突き立てる技、狒牙絶咬。

その技をかわすことができたのは、このグループのリーダーを含めた三人だけ。

彼らは発光する関節に脅威を感じ、一斉に空へと逃れたのだ。

だが、彼らに襲い来る脅威は、未だに終わってはいない。

「関節が、繋がっていく……！」

空から見下す彼らの目に映つたのは、地上でどんどん関節が結合していく蛇の姿。

「マズイ、地上に降りるぞ！」じや的になる。」

リーダーの指示が飛び、残り一人の魔法使いもそれに従う。

しかし、時既に遅く、

「うあああつつ！」

「ぎゃああああああ……」

元通りに復元し、空中を泳ぐように移動する蛇に、一人はその胴体に薙ぎ払われ、もう一人は口に挟まる。

凶悪なまでの顎の力により一瞬で魔法使いは咀嚼され、バラバラの手足が森へと落ちていく。

一人だけ残つたリーダーも、蛇のスピードには劣つており、地上に降りる前に顎にくわえられた。

「障壁……展開！」

それでも諦めずに障壁を展開し、咀嚼されるのを防ぐ。

彼の全魔力を注ぎ込んだ障壁は十一分にその力を發揮し、蛇の顎の力にも負けぬものだつた。

このまま凌ぎきることができるば、と思考する男だが、口の奥に、巨大な氣の輝きを田にし、凍りつく。

狒骨大砲

ひこつたいほう

障壁などまつたく意に介さぬ一撃が放たれ、死体も残さずに男は消えた。

五十九人

「だめだ、他のグループと念話がほとんど繋がらない…」

「どうなつてんだ！ こんな島国にオレ達に対抗できるヤツらがいるなんて聞いてねえぞ…」

総本山に侵入している魔法使い達も、ようやく異常事態に気がついた。

念話が通じないだけならまだしも、魔力を索敵できる人間が、味方の魔力反応がどんどん消えていくのを報告し、全体の指揮官を務める男は決断した。

分散していくつかのグループを集結させ、混乱を鎮めた。

現在は、全員で総本山の青山家と近衛家を囮指している。

索敵要員に、限界まで周囲の警戒をさせ、不意打ちを防ぐためである。

不審な反応があれば、そこに向かって絨毯爆撃。

この作戦は功を奏し、報告にあつた黒い着物の少年の迎撃に成功した。

隠れていた森」と爆碎され、魔法使いの前へとその姿を晒す少年。

一定の距離を置き、少年と魔法使い達は向き合つ。

「報告にはあつたが、本当に少年だつたとは……」

指揮官が思わずといった具合に声を漏らす。

こんな年端もいかぬ子供を相手に、自分達は半数以上の味方を失つたなどと、にわかには信じられる」とではない。

「大人しく投降してくれれば話は早いのだが……その気はないようだな」

「……」

少年は何も答えない。

ただ、髪の間から覗く目は、この不利な状況下においても、諦めの色を見せてはいなかつた。

「全員、上位魔法起動用意！」

指揮官の指示を受け、戦闘要員の魔法使い達が、一斉に起動キーを唱える。

「発射！！」

数十発の上位魔法が、まるで覆い尽くすかのように少年に迫る。

少年の前方に、氣で編まれた円形の楯が出現する。

その楯を開いたまま、少年は上位魔法の嵐の中に突っ込む。

すべての魔法が集中する現在地点にいるよりも、それより前に突っ込んだ方がよいという判断だ。

「つ、くつ」

だが、それでも上位魔法の威力は凄まじい。

円闇扇はみるみるうちに削られていき、その身は焼かれ、焦がされ、傷ついていく。

体にいくつもの怪我を負いながらも、少年は魔法の嵐を突破した。

「打ち碎け、天狗丸！！」

少年の前にいるのは、魔法を放ったばかりで無防備な魔法使い達。

このチャンスを逃すまじと、少年の刀が変化、巨大なトゲ付きの金棒になる。

「う、おおおおおおおお……！」

それを全力で振り回し、敵を滅殺せんとする。

しかし、

「第一陣、障壁展開！」

突如として現れた障壁に、轟音を鳴らしながらも止められてしまつ。目を見開き、驚愕を顕にするが、敵はその隙をつかないほど甘くはない。

「『魔法の射手』、多重起動！　この少年を寄せ付けるな！」

光、風、雷、炎、水、闇など、様々な属性を備えた魔力弾が少年へと迫る。

それらを薙ぎ払い、かわし、逸らしながら少年は距離を取らざるを得なくなる。

そして、この統制の取れたグループは、今までの敵とは違つことを感じ取っていた。

「今のもじのぐとは、末恐ろしいな」

指揮官が、しゃがみこむ少年に声をかける。

「だがこの人数差だ。いかに優れた戦闘力を有していようと、数の暴力には抗えん。降伏することを勧める」

指揮官の、冷徹な声が響きわたる。

「 青山家と近衛家の人間を引き渡せ。そうすれば、命だけは保証しよう」

少年は聞こえているのかそうでないのか、ゆっくりと立ち上がった。

少年の一拳手一投足に、全員が息を飲んで集中する。

そして、少年は刀を前方に突き出す。

思わず身構える魔法使い達だが、その予想は裏切られる。

少年は刀の切つ先を地面に向け、そのまま手を放したのだ。

(観念したか……)

思わず安堵する指揮官と魔法使い達。

しかし、彼らの予想はまたしても裏切られる。

地面に落ち、そのまま突き立つと思われた刀が、なんの抵抗もなく地面に吸い込まれていったのだ。

そして同時に、少年の気が爆発的に高まる。

卍解、千本桜景巖

せんばんざくらかげよし

足元から巨大な千本の刀が立ち上るという絶景を目にし、魔法使い達は状況も忘れて魅入った。

「いとうけい
咲景・千本桜景巖」

「　いかん、全員障壁展開しろっ！－！」

真っ先に我を取り戻した指揮官。

彼は自らの第六感に従い、全方位に向けて障壁を展開させる。

その直後、桜色の渦流が魔法使い達を襲った。

「な、なんだよコレはっ」

「ヤバい、障壁を抜かれちまうー！」

最早彼らの目には桜色しか見えない。

三百六十度、球体の内部に包まれるかの」「と、無数の斬撃が覆い尽くしていた。

（不味い、このままでは術者の魔力が持たん！　一人でも力尽きればその時点で終わりだ！　何か、何か打開策は……！）

指揮官は必死に頭を回転させるが、このような状況は想定したことがない。

まさか子供がこれ程の力を持つているはずがない」と、自らの思い込みが招いてしまったミスだった。

（一体、どうすれば……！）

考える指揮官の肩に、そっと手が置かれる。

振り返つてみればそこには、真剣な顔をした一人の男。

彼と最も長い付き合いである、この部隊の副官だ。

その副官が口を開く。

「……このままでは持ちません。せめて、貴方だけでも脱出してください」

「う、ふざけるな！　お前たちを置いていけるわけないだろー！　第一脱出する方法など、どこにも……！」

「いえ、あります」

そう言つて、副官は彼の胸に何かを押し付ける。

指揮官の胸元で発光する、その紙は

「これは、『転移魔法符！？』

「すみません。私には、こんな形でしか貴方に恩を返せない」

彼が子供の頃から面倒を見ていた男だった。

戦災孤児だったのを拾い、魔法の技術を教え込んだ。

戦闘者として、人を殺すことを強いてきた。

ずっと、恨んでいたのだと思っていた。

「や、やめ

「 生きて、ください」

副官の泣き笑いのような表情を最後に、彼はその場を飛ばされ、桜色の濁流が全てを飲み込んだ。

九十九人

少年が飛ばされた指揮官を見つけた時、彼は夜空を見上げていた。

「来たか……」

「……」

少年は周囲を見渡す。

彼にとつて、この場所は特別だった。

流れ落ちる滝、足元の砂利、周りの森も、昨日までと何も変わっていなかつた。

「逃げようつかとも思つたのだがね……逃げたといふで、どうするのだと思い直したのだよ」

指揮官の男がこの場所に飛ばされたのは偶然だ。

しかし少年は、変わらない周囲の景色が、自分を責めているように感じた。

少年がゆっくりと口を開く。

「降伏しろ」

「断る。私は一部隊のトップだ。降伏したところで、生きては帰れないだろ?」「

そう言って、指揮官の男は杖を構える。

「それに、今の私には形容しがたい感情が渦巻いていてな。君と戦わねば、それが收まりそうにないのだ」

攻め込んでおきながら、自分勝手だとは思つがね、と付け加える。

それを聞いて、少年は無言で刀を構える。

両者ともに動かない。

木々のざわめきだけが、周囲を支配する。

先に動いたのは指揮官の男。

詠唱を始め、攻撃魔法を発動させようとする。

だが、長年指揮ばかりを担当し、魔法を自ら使うことほとんどない彼の詠唱は、悲しいほど遅く。

少年の刀が、彼の胸に突き立つ方が、遙かに早かった。

ぽたり、ぽたりと、赤い霧が垂れる。

それは刀を伝い、少年の手をも赤く濡らす。

指揮官の男の体が、ゆっくりと傾いでいく。

やがて刀が抜け切る頃、男の口が僅かに動いた。

すまない、リオン

彼の体は完全に倒れ、河原の石を赤く、紅く、染め上げていく。

「……」

血塗れた刀を持つ少年 大和は、静かに肩を震わせる。

結局、こうなってしまった。

お伽噺のように、ハッピーエンドになると想っていた。

しかし、これが現実。

人を救いたいだの言つておきながら、今日大和は百人の人間を殺した。

目の前に横たわるこの男にだつて、大切な人はいたはずだ。

その証拠に、彼は誰かの名前を呼びながら死んだ。

不意に、元蔵の言葉が蘇る。

お前の力は、人を殺すためのものだ。

思い出の場所を、血が染め上げていく。

この日から、彼は人のために剣を振ることをやめた。

外伝三（後書き）

投稿のペースが続かない……

第十一話（前書き）

短いです。

「王女さんよ……俺なんかをスカウトしてくれんのは嬉しいけどな、俺はもう、そういうのを田指すのはやめたんだ」

「ほひ、そういうのはなんじや？」

「正義の味方とか、そんなんだよ」

月明かりに照らされた大和の顔は、一気に老け込んだようだった。

「逆に聞くけど、なんでアンタらはそんなに頑張れるんだ？ 見知らぬ人を救うために人を殺して……苦しいだけじゃねえか」

大和はアリカに問う。

どうして、たつたの八人で世界なんでもを抱え込むのかと。

「アンタには世界を救う義務なんてないだろ……もひ、そんなに頑張んなくてもいいじゃねえかよ」

言い切つてから、自分は本当に情けなくなつたな、と思つた。

「……そうじやな、確かに、わらわとて人間だ。人を殺す命令を下せば心は痛むし、挫けそうになることもある」

「……」

「それに、わらわの父君も『完全なる世界』の一員だ。いつの田か、わらわの手で打ち倒さねばならぬ時が来るじゃあ！」

「なら、もう」

いいだろ、と続けよつとして、息を呑む。

アリカの田を見てしまつたから。

その、命そのものを燃やしていくかのよつな瞳を。

「人を殺すのが怖い？ 大いに結構だ。人を殺すこと好きなのよりは百倍マシといつものじやうひ。わらわがお主に文句を言いたいのは別のことだ！」

「あ……」

「お主が傍観者気取りでいることに、わらわは何よりも腹が立つ！ どうせ、自分が動けば世界がどう動くかわからないのが怖いのじやうひ！ その神のような思考が気に食わん！」

「……」

「思ひ上がるなよ。誰がじつはおのれ、お主もこの世界のたった一欠片だ」

ああ、なんとなく分かった気がする。

「君の世に産まれた以上、お主の行動は全てお主のもの。誰にも否定はせぬ」

びっくりして、彼女を見るのが、こんなに苦しいのか。

「お主には何かをする権利がある。お主の行動も、この世界を造る一つの要素なのだ!」

必死に『生きてる』彼女が、眩しいんだ

「だから、自分は世界の邪魔者だ、などという顔をするでない」

大和の肩が震える。

「なあ、王女さん……」

「なんだ」

「俺も……ずっと、後悔してた」

「うむ」

「初めて人を殺した日から、ずっとずっと、後悔してたんだ」

「そりゃ」

「俺なんて、生まれてこなければよかつたって

その言葉を言った瞬間、左頬に痛みが走った。

目の前には、右手を振り切ったアリカ。

魔力もなにも籠めていない、ただの女性としての張り手。

だが、今まで受けた張り手の中で、一番効いた。

「人を殺したことを悔やむのは自然なことだ。受け入れるとも、乗り越えるとも言わん。だがな、事実だけは認める。己の人生から目を背けるでない」

その言葉を聞いて、大和は過去に思いを馳せる。

僕はさ、この技術で人を救いたい

お前の力は、人を殺すためのものだ

すまない、リオン

「なあ……」

大和が口を開く。

「アンタの言うとおり、俺は行動することで誰かの人生を左右する

のが怖い、ただの臆病者だ」

そして、閉じ込めてきた思いを語る。

「人を殺したくないってのも、ただの言い訳」

アリカは無言で聞く。大和の人生を。

「ずっと、自分の存在から目を背け続けていたんだ」

すべての思いを吐き出して、大和の心には、たった一つの約束が残つた。

お伽噺の英雄に、僕はなりたい

「そんな僕でも、誰かを救いたいと、思つてもいいですか？」

それは、嘘偽りのない『五木大和』としての言葉。

今まで自分を縛っていた呪縛はもうない。

そんなもの、目の前の王女が吹き飛ばしてしまった。

そして、アリカが僅かな笑みと共に、口を開く。

「そんなもの、自分で決める」

「ふつ……くくく」

思わず笑ってしまった。

「まつたく、本当に自他共に厳しい王女なんだ」

「ふん、こんなものは序の口じや」

「はは、『紅き翼』の連中、絶対に味方する側間違えたぜ」

「ぬかせ」

大和は笑う。アリカも笑う。

「さて、そろそろ戻るつぜ。他の奴らも心配する頃だろ」

「うむ」

一人は小屋に向かつて歩き出す。

満天の夜空を見上げながら、大和は思った。

刀子ちゃんに、黙つて出ていったことを、いつか謝りに行こう。

「ありがとよ……だいぶ楽になつた」

「……ふん」

そしてその日、少年は夢を語り出した。

第十二話（前書き）

これから投稿が不定期になりますが、できるだけ早く書き上げていいと思います。

第十二話

「ま、そんなわけで、これからは俺も『完全なる世界』と戦うことになった」

「「「「「「「……え？」」「」「」「」「」」」

明朝、大和の突然の宣言により、『紅き翼』+テオドラは目を丸くした。

そして詠春は、大和の顔つきが昔に近づいていることに気がつく。

「大和君、もしかして……」

「ええ……全部が全部吹っ切れたわけじゃないんですけど、少しづつでもいいから、前に進んでいきたいな、と……今まで色々心配かけました」

照れくさそうに頬を搔く大和。

その仕草は紛れも無く、彼の昔からの癖で

「そりか……良かつた、本当に良かつた」

それを見た詠春は思わず涙ぐむ。

「え、ちょ、ちょっと待つのじゃ！なんか感動のシーンっぽいのだが、わらわ達まったくついていけないのじゃー。」

テオドラの叫びに同調する『紅き翼』。

「つるせこぞテオドラ。空氣読め」

「できるかなのじやああああああああーーー。」

結局、いつものじやれ合いになる大和とテオドラ。

一方、『紅き翼』の反応はどうと

「別にいいんじやないですか？」
彼が協力してくれるというならば
心強い」

「そうじゃなく、実力は保証済みである」とじゅうし

「アタマの鬱か……燃える鬱じやねえか！」

「お、おい待てよ、アルにお師匠にジャック！　コイツはグレート＝ブリッジで戦つた敵だぞ！？」

概ね同意の意思を見せる『紅き翼』だったが、ナギは異議を唱える。

「ナギ、お前は負けたことを根に持つて居るだけじゃねえが」

「むぐつー?」

完全に図星をつかれるナギ。

「まつたぐ、ナギはツン『テレ』ですねえ。心中では誰よりも彼のことを認めているのに」

「ああ! ? テメエぶつ飛ばすぞアル!」

「でもこの前、『あの野郎は絶対に俺が倒す!』って息巻いていましたよね」

無邪気にナギの傷口を抉るタカミチ。

「……お前つて気持ち悪いヤツだな、バカフィールド」

「ぐがあがががががあああがが

大和にトドメを刺され、ナギは床でのたうち回る。

「ヤマトはわらわの護衛をやめてしまうのかー?」

「いや、別にテオドラの護衛をやめる気はねえし、ましてや『紅き翼』に入るつもりもねえ。ただ、俺は俺で帝国側から動いてみようつてだけだ」

「おお、それならばわらわも異論はないぞ! むしろ協力するのじやー!」

大和とテオドラの間でも話は纏まつた。

「さて、それじゃ帰るぞテオドーラ」

「もつなのか？ もう少しいらっしゃよいではないか」

「ダメだ。女騎士とかも心配するが。お前は一応皇女だろ？ が

「一応とはなんじゃ！」

じゅれ合しながらもテオドーラは帰還の用意をする。

流石にテオドーラも本気で発言したわけではない。皇女である自分の責任というものを理解している。

仕度を終えた二人は隠れ家から外に出る。『紅き翼』のメンバーも見送りをするらしく、外に出てきた。

「あ、そうだ！ 記念に全員で写真でも撮りませんか！？」

タカミチが名案とばかりに声を上げる。

「写真ねえ……俺はいいが、テオドーラや皇女さんは立場上マズイんでねえの？」

現在、『紅き翼』は御尋ね者だ。

指名手配犯と親しげに写真を撮るというのは問題ありなので、最終的に大和と『紅き翼』だけで写真を撮ることにした。

「で、なんでお前が隣に来るんだバカフィールド」

「俺だつてお前の隣なんて『メンだつてのー。』

「もつ撮りますから、一人とも喧嘩しないでくださいよ」

結局、大和とナギが顔を背け合つといつ、微笑ましこよくなつでないような『真しか撮れなかつた。

「それでは、これで失礼します詠春さん」

「ああ、君も気を付けてくれ」

「お前らも縁があつたらまた会つかもな」

「おひへ、また闘技場で戦おうぜヤマトー。」

「けつ、もつ来るんじゃねえよ」

「バカフィールド、お前には言つてない」

「ああー!？」

『紅き翼』との別れをすませ、大和はアリカへと向を直おる。

「王女さん、今回はアンタにも世話をなつた」

「……立ち直おつたのはお主自身の力によるものじゃ。わらわは何もしておらぬ」

「それでも、感謝する」

「……ふん」

アリカは顔を背ける。どうやら照れているらしい。

「あんまりバカフィールドが頼りないなら俺を呼べ。多少は力になれる」

「んだと」「ハアー！」

「ナギ、もうあなた完璧にチャンピニアですよ」

そうして大和とテオドリは帝国へと帰還し、『完全なる世界』との抗争に身を投じることになる。

(まだ、あの日の気持ちを完全に取り戻したわけじゃない)

思い返すのは、いつもの場所で、少し気になっていた女の子とした約束。

みんなを助けたい。

(でも、いつかきっと、取り戻してみせる)

大和は再度「」に誓つ。

たとえ辛いことがあらうとも、今度は見失わないようだ。

第十四話

帝国へと帰還した大和は、敵の情報収集などを全てをテオドラに任せ、自分はその圧倒的なまでの戦闘能力を使つことに専念した。

大和ほどの力をもつてすれば下つ端の敵など生け捕りにすることは容易かつたが、それでも人質をとられるなどをして、自らの手を汚すこともあつた。

人を斬つた日、その夜は例外なく吐いた。

その度に、自分はなんと弱いのだらうと自嘲する。

その様子を見ていたテオドラも大和の身を案じ、もつといい、戦わなぐてもいいのだと言つた。

だが、大和は諦めなかつた。

むしろ人を殺すことに慣れるのを忌避していた。

人を殺すことに罪悪感は感じているし、それを許されようとも思っていない。

だが、胸の中に残る、一つの約束。

自分の夢。

大勢の人を救う、お伽噺の中の英雄になりたい。

ただ、それだけは忘れないよつと努めた。

そして田畠は流れ、とうとう運命の田が来る。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

オステイアの空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』。

それを一望できる崖の淵に立つ『紅き翼』に、セラスの伝令が届けられる。

「ナギ殿！ 帝国、連合、アリアードネー混成部隊、準備完了しました！」

「おひ、『苦勞セ』」

「あ、あああのナギ殿！ も、もしよろしければサインをしてはもらえませんでしょつか？」

セラスの催促により、ナギは淀みない動作でサインを書き上げる。

((((練習してたな))))

セラスは受け取ったサインを感動の顔で見ていたが、ふと咳付き、こくづいた。

「『剣の王』は今回の戦いには参加しないのですか？」

その言葉に、『紅き翼』の面々は顔を見合わせる。

「アイツ、今は帝国の上層部に入り込んだ『完全なる世界』と戦ってるんだろ、お師匠？」

「そりゃしの。時間がかかりそうと書いておつたし、来度の戦には間に合わなかつたよじやな……」

『剣の王』こと、五木大和の不在を知り、セラス達の顔が曇る。

だが、

「おいおい、俺がこんな大事な場面で来ないわけがないだろ？」

セラス達の背後から、いつもの飄々とした声が届いた。

「大和君、間に合ったのか！？」

「ええ。少し手間取りましたが、帝国にいた連中はほとんど逮捕しました」

黒い着物に、腰に下げた一本の刀。

以前とまったく変わらない様子で五木大和が合流した。

「ケツ、テメエなんざいなくとも余裕だつての」

「久しぶりだな、四人共」

ナギの絡みを軽快にスルーし、『紅き翼』のメンバーに声をかける。

「まったく、こんなタイミングで登場とは、貴方も役者ですね」

「帝国での仕事を終わらせてから速攻で来たんだ。狙つてたわけじやねえよ」

そこで大和は『墓守り人の宮殿』に目を向ける。

「……なるほど、召喚魔共がうじやうじや出てきてやがるな。『紅き翼』が内部に突入し、周りの軍隊がそれを援護する作戦か」

「つむ、お主もワシらと一緒に来るか?」

ゼクトの誘いに、大和は少し考えてから首を振った。

あれほどの数の魔族と戦うとなれば、混成部隊にはかなりの犠牲者がいる。

大和はそれを避けたかった。

「いや、俺は周りの魔族達を全滅させてから合流する。それまで負けんじゃねえぞ?」

「テメエが来る頃には終わらしてやるよ

「上等だ」

大和とナギは顔を見合させて不敵に笑う。

それを見たセラスは、この二人がいれば大丈夫だという確信を持った。

「さて、まずはド派手に数を減らしてやるか

卍解、雀蜂雷公鞭

大和の右腕に、ハチの下腹部を模したような照準器付きの砲台が出
現。

その異様な武器に、その場にいた全員が無意識に一歩後ずかる。

彼らの本能が『コレはヤバい』と警告していた。

大和はそれを、魔族の群れが守護する『墓守り人の宮殿』へ向ける。

「コイツは、一撃決殺の始解状態の時ほど甘くはねえ」

金色の蜂の針が、ミサイルの如く飛翔する。

凄まじいスピードで飛ぶ砲弾は、魔族の群れを簡単に突破。『墓守り人の宮殿』に着弾した。

そして、

一撃必殺。

その場にいた全員の髪を逆立てるほどの大爆発が起こった。

「わ、わつわわわ」

セラスは爆風に吹き飛ばされそうになり、咄嗟に近くの建造物にしがみつく。

あの『紅き翼』でさえ、今まで見たことのない規模の破壊力に瞠目した。

爆風による粉塵が晴れ、現れた光景に、全員の口があんぐりと開く。

『墓守り人の宮殿』の三分の一が消滅していた。

それを見た大和は一言。

「…………せつめいた

大和の額から一筋の冷や汗が流れる。

「いや、滅多に使わない正解だったから手加減の仕方がよく分からなかつたんだ」

「ヒーラが姫子ちゃんまで巻き込まれてんじゃねえだろ?」

「いや、まあ、魔法無効化もあるし、大丈夫じゃね？」

「大丈夫じゃねええええええ！」

マジックキャンセル

その頃の『墓守り人の宮殿』内部。

「くつ……申し訳ありません、どうやら私はここまでのようですが」

建物内部にて、一人の男が倒れ伏していた。

水の使徒である彼は、強大な気の反応を感じると同時に、転移魔法を多重起動。

自分と仲間の従者達、そして主を含む五人を爆発の範囲外へと飛ばした。

しかし、ただでさえ複雑な転移魔法を即座に、しかも五人の人数を転移させた代償は大きく、彼は転移と同時に倒れた。

「おい、大丈夫か！？」

水の使徒と特に親しかった火の使徒が駆け寄る。

「……すまない、私はここまでようだ。お前が、アーウェルンクス様をお守りしろ」

「そんなことを言つたな！ そんな、まるで最後の言葉みたいな！」

火の使徒は必死に彼を抱き起こす。

そんな火の使徒の様子を見た水の使徒は薄く笑つた。

「まつたくお前は……いつまでたつても……変わらな……」

その言葉を最後に、水の使徒の体から力が抜ける。

「う、お、おおおおおおおおおおおおおお！」

抱きかかえる体から力が抜けていくことを感じた火の使徒は、嘆き、怒りが籠つた叫びを上げた。

それを見たアーウェルンクスはこう思った。

(いや、魔力が切れただけで、まだ死んでないけどね)

「ほら、お前らもさつさと行つて」

「色々と納得いかねえ……」

ブツブツと文句を言いつつも、『墓守り人の宮殿』へと突入するナギ達。

大和の一撃により魔族達は数が激減していたが、それでも尋常では

ない数だった。

「さて、俺はコイツらを掃除してからだな」

刀を天に向けて掲げる。

「 霜天に坐せ、氷輪丸」

その声と共に、戦場に闇が下りた。

「そ、空が……！」

セラスが、連合軍が、帝国軍が、アリアドネー軍が、魔族達でさえもが空を見上げる。

天が鉛色の雲に覆い尽くされていく。

それは、まるで神話の中の出来事のようだった。

天相従臨。てんそうじゅうりん 四方三里の天候を支配する、これこそが氷輪丸の真の力。

大和は振り返り、呆然としているセラスに告げる。

「援護はいいが、巻き込まれないよつに注意しりよ~。」

そう行つて、大和は獣のような笑みを浮かべる。

卍解、大紅蓮氷輪丸。

「最初から、全力で飛ばしていくからなッ！」

『墓守り人の宮殿』の内部にて、『紅き翼』とアーウェルンクス達が向かい合つ。

「やあ『千の呪文の男』、また会つたね。これで何度目だい？」

今まで幾度となく杖を交わしてきた相手。

それを田の前にして、ナギは冷静だった。

「俺をその名前で呼ぶんじゃねえ。その名前はな、あの野郎をぶつ倒した時に改めて名乗る予定なんだよ」

大和との戦いの記憶は、ナギの中に色濃く残っている。

そして、その絶望感と反骨心は、確実にナギの力量を上げていた。

それはナギに限つての話ではない。

ラカン、詠春、アルビレオ、ゼクトもまた、かつての敗北を無駄にはせず、大和との戦いを通じて己を見つめなおしていた。

今の『紅き翼』は、才能にものを言わした戦闘集団ではない。

自分に出来ることを考え、どう動けばよいのかを即座に判断できるようになっていた。

「僕達もこの半年で君に随分数を減らされてしまったよ。それに、さつきの一撃で、僕の従者が一人戦闘不能になってしまったしね」

それを聞いたナギ達は目を逸らす。

アレを叩撃してしまった彼らからすれば、かなり複雑な思いだつた。

「五対四か。それじゃあ、お師匠は待機していくてくれないか

「確かにこちらの方が一人多いが……よいのか?」

「ああ、お師匠の手を煩わすまでもねえよ。俺たちの成長っぷりをしっかり見てくれ」

そう言って、ゼクトを除いた『紅き翼』が一步前に出る。

彼らの顔を見たゼクトは、喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

(まったく、いつの間にそんな顔ができるようになったのじゃろう
(な)

弟子と仲間達を案じる気持ちはもちろん存在する。

だがそれ以上に、ゼクトは彼らの戦いを見たくなった。

「無様な戦いを見せるでないぞ」

「おひ、任しどカー。」

今ここに、最終決戦の火蓋が切つて落とされた。

「つ、危ないです！」

アルビレオは、自らに向けて放たれた漆黒の豪腕をかきうじて回避する。

彼が戦う相手は影の使徒。

そして、自らことつて相性の悪い相手もある。

なぜならば、影で作られる魔法には重量がほとんど存在していない。

アルビレオの重力魔法は物体の重さを数十倍にまで増やすことができる。

しかし、元となる質量がなければ、魔法はほとんど意味をなさない。質量が存在しないのは火や風も同じだが、それらは大氣」と押しつぶすことで防ぐことが可能。

だが光や影といった魔法を重力で防ぐには、それこそブラックホール級の重力が要求される。

よって、敵の攻撃は回避か障壁で凌ぐしかなく、現在アルビレオは影の使徒を相手に苦戦していた。

「まったく、私は後ろでコソコソと戦うのが性に合っているのですけどね」

だが、軽口を叩くアルビレオの顔に焦りは無い。

彼もまた、大和との戦いを経験してから変わったのだ。

重力魔法は支援に向いているが、それだけではこれから戦いで通用しないかもしれない。

そして、彼の選んだ方法とは。

「鬼道とは奥が深い。重力に特化した私ですら、この鬼道の習得に半年もかかりました」

アルビレオが詠唱を開始する。

「滲み出す混濁の紋章 不遜なる狂氣の器 湧きあがり・否定し
痺れ・瞬き 眠りを妨げる 爬行する鉄の王女」

影の使徒がアルビレオの詠唱を止めるべく、影の巨人を生み出す。

影の巨人は質量こそ存在しないものの、魔力に覆われた腕を振り下ろされれば、それはそのまま攻撃力に変わる。

直撃すれば、体術の心得の無いアルビレオがどうなるかは火を見るよりも明らかだ。

見上げんばかりの巨人が腕を振り上げ、アルビレオを圧碎せんと迫る。

「絶えず自壊する泥の人形 結合せよ 反発せよ 地に満ち尽の無力を知れ」

だが、それよりも一瞬早く詠唱が終わり、

「破道の九十 黒棺」

突如出現した黒い長方体に、影の使徒も、巨人も、完全に呑み込まれた。

「時空が歪むほどの重力の奔流。大和直伝の鬼道です。あなたでは、理解することもできなかつたでしよう？」

黒き棺が消えた後、巨人は消え去り、影の使徒もまた、全身から血を吹き出して倒れる。

「ここに勝敗は決した。

「神鳴流奥義、雷光剣！」

「『雷の暴風』！」

青山詠春と対峙しているのは雷の使徒。

神鳴流には雷を放出する技が多く、奇しくも雷を得意とする一人の対決となつた。

大和には敗れたものの、詠春は青山家の中でも天才と呼ばれるほど の剣士であり、その技量は高い。

戦いは詠春が優勢のまま進んでいた。

「流石に手強いな、青山詠春」

「諦めて降参でもするつもりか？」

夕凪を青眼に構え、油断なく相手を睨みつける。

「いや、ここの短期間で腕を上げたことに感心しているだけだ」

だがな、と続ける。

「強くなつたのは、お前達だけではないぞ！」

叫ぶと同時に、雷の使徒の体が発光する。

さうして体中から放電現象まで起き、魔力が全身に行き渡つていく。

青白く発光する敵に、詠春は警戒を強めた。

だが、集中していた詠春は、その知覚をあつたりと乗り越えられ、背後から一撃を食らつた。

「が、はあっ！」

背中に強い衝撃。

その衝撃は肺にまで届き、体の中の酸素を強制的に吐き出せられ

た。

ダメージは残っているが、詠春は現状把握を優先させる。

詠春はあの時、瞬きすらしていなかつたにも関わらず、彼の目にはまるで敵が消えたように見えた。

次の瞬間に背後からの攻撃。

さうに、先程の魔力と放電現象を鑑みれば、答えは一つ。

「……雷化か」

「その通り。お前達に対抗するべく、私達も力をつけた」

言葉を交わす最中にも、詠春の身体には傷が増えていく。

雷のスピードは、音速などとは桁が違つ。光速の世界だ。

常時雷化こそ会得していないものの、物理攻撃は通用しない。

攻防共に高いバランスのとれた術式だ。

向かい合つ詠春と雷の使徒。

だが、その距離は最早ゼロと等しい。

幾多の怪我を負い、圧倒的に詠春が不利な状況だが、その日はまだ死んではいなかつた。

「……氣に入らん田だな。まだ隠し玉を持っているわけでもなかろう」

「隠し玉ね……お生憎様だが、とつておきのが残つている」

「なに?」

「あの男に勝てたのは昨日のことだつたからな。実戦でいきなり使ふのは少し怖いが、それも致し方ない」

「……お前、何を言つている?」

もつ詠春の耳に、敵の言葉は入つてこない。

自分の内に、深く、深く、沈んでいく。

その様子を見た雷の使徒は、絶好の機会だといふのにも関わらず、一步も動くことができなかつた。

まるで、田に見えぬナーナに、気圧をれているかの如く。

詠春は夕凪を真っ直ぐに突き出す。

そして叫んだ。

「『斬月』……」

直後、膨大な量の気が詠春の体から吹き出した。

「むっ、ぐ」

詠春の気に押され、雷の使徒は後ずさる。

そして彼が目にしたモノは。

「なんだ……それは……」

詠春の持つ刀。ただの野太刀だったはずのそれが、変化していた。

柄が無い。鍔も無い。刀としてまともな形を成していない。

まるで、鍛え上げた刀をそのまま武器として鍛冶場から持ち出していくかのよう。

どう考へても上手く扱えるはずがない。

あれならば、以前の方が刀として洗練されていた。

第一、雷化してしまえば一切の物理攻撃は効かない。

だというのに、何故、自分はあの刀を恐れているのだ。

詠春が刀を大上段に構える。

明らかに間合いの範囲外。そこから振るつとも、絶対に当たらない。

だが構わず、上から下へと、真っ直ぐに振り下ろす。

「月牙天衝」

刀が、詠春の気を喰らつ。

そして斬月は、氣を糧として巨大な斬撃を具現化する。

その光景たるや、まさに三日月。

雷の使徒は、自らに迫る脅威によつやく我を取り戻す。

(ツ、雷化!)

反射的に全身を雷へと作り替える。

自らを褒め称えたいほどのスピードでの発動だった。

この時点では雷の使徒には物理攻撃の全てが通用しなくなっている。

この斬撃がどれほどの威力を有しているか、当たらなければ関係ない。

雷の使徒は、斬撃が自分の身体を通り抜けていくであろう未来を確信した。

だが、その未来は、容易く打ち砕かれる。

いかなる防御も許さぬ三日月が、雷の使徒を圧碎した。

「私にも年長者としての意地がある。あの時のように、大和君にだけ全てを背負わせることはない」

「オラオラオラアアツツー！」

「つおつ、コイツ氣合がすげえな！」

拳打の応酬を繰り広げるのは、ジャック・ラカンと炎の使徒。

「よくも、よくもアイツをやつてくれたなあつ……！」

「アイツって、ひょっとして大和の攻撃に巻き込まれたってヤツか
？ 僕関係なくね？」

「やかましいわあ！」

色々と誤解しながらの戦闘だったが、それでも火の使徒の怒りは確
実に攻撃力へと変換されていた。

「うわつとつと、こりゃ結構ヤバい雰囲気だな」

一撃一撃が石をも碎くような威力。それが雨あられとばかりに襲い
かかって来る。

さすがのラカンも捌ききることができずに、数箇所まとめて食いつ
てしまう。

ちやつかり同じ分だけやり返しているが。

「これはこれで楽しいけどよ、キリがねえな」

そう言って、ラカンはついこの間習得した必殺技を繰り出すことを決めた。

一度大きく下がって距離をとる。

「よつしゃあ、最後はカツ！」良く決めてやるぜ！」

ラカンは腰を落とし、気を体中に送りつける。

火の使徒はラカンの尋常ではない気の量から、大技が来ることを予測し身構えた。

気合を溜めている間に攻撃することもできるだろ？が、この戦いは火の使徒にとつては弔い合戦。

（主には悪いが、私はコイツらを正面から打倒してみせるー。）

ラカンの気が爆発的に膨れがり、そして

「……やべえ、必殺技の出し方忘れた」

沈黙が場を支配する。

ラカンは冷や汗をダラダラ流し、火の使徒は完全に無表情だ。

そして火の使徒は一歩ずつラカンに近づいていく。

その両腕に、煉獄の炎を纏わせながら。

「ちょ、ちょっと待て！ 今の無し！ タンマ！ やり方思い出すまで待つてくれよ！」

相変わらず無表情のまま火の使徒はラカンに近づく。

「ええいくそつ、アレはじゅうやつて出すんだだけつけか。えーっと、
じつか！」

無意味に力を溜めたり、奇妙なポーズをとるラカン。

もう一人の距離は半分になっていた。

「だーつ！ 僕様としたことがこんな所で凡ミスかよ！ セつかく
スゲエ技ができたのに！」

喚いても結果は変わらず、どんどん距離を詰められる。

そして、ラカンは結局、

「ああもう何でもいいからなんか出ひやああつっ…」

ヤケになつた。

しかし、元々ラカンは頭で考えて動く人間ではない。

新しい技に関しても同様、感覚を優先させたからこそたどり着けた。

火の使徒の拳が迫るその瞬間、ラカンは完全に適当に術を発動させる。

そして、ラカンの上半身の服が弾け飛び、火の使徒の拳を片手で止めてみせた。

「危ねえ危ねえ、やつと成功したぜ」

「なつ……」

火の使徒の口から驚愕の声が漏れる。

自らの拳を止められたことではない。

ラカンの背中と両肩に、恐ろしいほど の 気が纏わりついでいる。

あまりの気の密度により、ラカンの上着が千切れて飛んだ。

「大和の鬼道を参考にして、それを拳に乗せれば俺最強じゃね？ つていう発想から思いついた技だ。中々スゲエだろ？」

そう言って、ラカンは空いている右の拳を固めた。

彼の腕は白く練り上げられた鬼道で覆われている。

以前にこの技を見た大和は、呆れた声でこう呟いた。

まさか、自力で『瞬閻^{じゅんえん}』に至るヤツがいるとはな。

ラカンは右の拳を振り抜く。

彼の拳打からすれば、それはかなり緩やかな速度であつたが、鬼道の方は違つた。

ほんの少し指向性を持たされただけで、堤防が決壊するかの如く溢れ出す。

それは火の使徒を呑み込み、壁を破壊し、なお止まらない。

まさに形を持つた『暴力』そのものだった。

結局、瞬闘は『墓守り人の宮殿』を突き抜け、外に出るまで止まることはなかつた。

「さつすが俺様。これで大和にリベンジだな！」

「……あの馬鹿、瞬闘の先に人がいなかつたからよかつたものの、巻き込まれたらどうするつもりだつたんだ」

自分のことは棚に上げて、大和は愚痴る。

現在、大和は魔族達の群れのど真ん中にいた。

それというのも、あまりにも敵の数が膨大だつたため、一気に終わらせてやろう!といつ考えだつた。

「セラス! 全軍の撤退は完了したか!?」

「はい、この付近では私以外は撤退しました!」

「というかお前はなんで残つてんだよ! お前もそのまま退けばよかつたるうが!」

「私はこれでもアリアードナー部隊を任せています! 貴方を見捨てるわけには……」

「今から大技放つから邪魔だつて言つてんだよ!…!」

怒鳴りつけながらも、セラスに群がっていた魔族達を蹴散らす。

そして大和はセラスを片手で抱き寄せた。

「ちょ、大和殿！？」

「黙つてろ。絶対に俺から離れるな」

憧れの英雄に抱き寄せられ、さらに『離れるな』などと言われたセラスは赤面する。

そんな状況ではないのだが。

大和は天に向けて、氷輪丸を掲げる。

その時、戦場にひとりの雪が舞い降りた。

その雪は風の影響を受け、まるで桜の花びらのよつて空を舞う。

そして、その雪が魔族に触れた瞬間、巨大な氷の華となり覆い尽くした。

セラスは大和の腕の中で目を見開く。

このような技は見たことも聞いたこともない。

さらに、天相従臨により現れた雲から、どんどん雪は降り続けていた。

雪の花びらは不規則な軌道を描き、触れた魔族達を瞬時に凍りつか

せる。

セラスの目には、まるで花びらが魔族の命を吸い取り、花を咲かせているかのように見えた。

ひょうてんひやつ
氷天百華葬

「すごい……」

確かにこれならば味方にも被害が出かねない。

セラスは自分がかなり危険な場所にいたのだと気付き、今更ながら

顔を青くする。

そんなことを考へてゐる内に、この周辺の魔族達は全て氷の華に覆われ、まるで氷のバラ園の中にいるかのような錯覚を抱かせた。

「ほら、今の内にひとつとと部隊に戻つて指揮をしろ。まだ遠くでは別の部隊が戦つているぞ」

「は、はい！」

大和の腕から脱出し、自らの指揮する部隊へと帰還しようとするグラス。

それを見て、大和も別部隊の援護に向かおうとする。

その瞬間、『墓守り人の宮殿』から大和に向けて閃光が放たれた。

「ツ、やば」

一目見ただけで分かつた。

この閃光は違う。

あのアーウェルンクスですら、この光を放つことは不可能。

もつと、そう、この光は別次元のものだ。

（だが、ギリギリかわせる）

大技を放った直後の気が緩んだ瞬間を狙つたのだろうが、それは計算違ひだ。

この程度のことで油断するほど大和は甘くない。

瞬歩を使って回避しようとした試みる。

「あ……」

だが、その直前で気がついた。

自分の後ろで、セラスが閃光を見て硬直している。

完全に固まつており、あの体勢からの回避は不可能。

この状況を打開すべく、大和の頭はフル回転を始める。

そして弾き出した結論は、

「破道の八十八 飛竜撃賊震天雷砲！」

防御も回避も不可能。

ならば迎撃により、少しでも威力を削る。

結論から言つと、その作戦はある程度成功した。

大和は背後のセラスを守りきることができた。

「大和殿！？」

て

碎かれた氷の竜と共に、大和が墮ちていくことを引き換えにし

第十五話

「……まったく、理不尽なほどの強さだね」

「」託はいい。姫子ちゃんが何処にいるか言え

『墓守り人の宮殿』内部にて、ナギがアーウェルンクスを撃破。

彼の胸ぐらを掴み、持ち上げる。

ナギの体には目立った外傷は無く、相當に腕を上げてることを伺わせる光景だった。

「皆さんも終わつたよつですね」

「まあな。多少の怪我は負つたが」

「つおつ、詠春お前、刀がやたらとカッコ良くなつてねえか?」

「四人とも修行を怠つておらんかつたよつじやな。まあ、少しヒヤヒヤせられる場面はあつたがの」

他の『紅き翼』のメンバーも集結する。

多少は消耗しているものの、全員が戦闘可能な状態だった。

最早『完全なる世界』に勝ち田は無い。

その場にいた誰もがそう考えていた。

だが、アーウェルンクスは笑う。心底愉快だと言いたげに。

「ふ、ふふふ。まだ、君は僕が黒幕だと思っているのかい……？」

その瞬間、アーウェルンクス諸共に、ナギの腹部を閃光が貫いた。

次の攻撃に一番最初に気づいたのは、やはりゼクトだった。

「皆の者、上からアカいのが来るぞー！」

ゼクトの声が響きわたると同時に、上方から無色の閃光が放たれる。

「クラディスクター・アイギス
最強防護！」

「障壁展開！」

ゼクトは『己』の魔法の中でも屈指の防御力を誇る楯を呼び出した。

アルビレオも、自分の魔力の殆どを障壁に費やす。

「月牙天衝！」

「瞬闘！」

詠春とラカンも、自らの最高の攻撃力を誇る技で閃光を相殺せんと試みる。

だが、閃光は止まらない。

巨大な閃光はその威力を削られながらも、『紅き翼』に降り注ぐ。

ラカンの片腕が吹き飛び、詠春は腹部を数箇所貫通されている。

アルビレオは外傷こそ少ないものの魔力が底をつき、一番怪我が少ないのは体力と魔力を温存していたゼクトだった。

「な、何が……起きた……」

詠春が倒れ伏しながらも、攻撃された方向を向く。

「おいおいマジか……アレは、一体何なんだよ

失った片腕を抑えながらラカンが呆然と呟いた。

魔法世界人である彼には、目の前にいる敵が『どうこうした存在』か、うつすらとだが認識できる。

一目見ただけでわかつた。アレは、自分にとつて絶対に敵う者ではない。

それこそ、大和の氷輪丸を見た時以上の绝望。

黒いローブを着た年齢も性別も不明の存在を、ジャック・ラカンは確かに恐れていた。

だが、

「……はつ、上等だ」

吐血し、腹部から血を流しながらもナギ・スプリングフィールドは立ち上がる。

「おひなぎっ！ 待て、アイツはやべえ！」

「おじおこじうしたよジャック。怖氣付くなんてお前りしくないぜ

口の端から血を流しながらも、ナギは不敵に笑う。

「俺には解るんだよ！　アイツは俺らに敵う相手じゃねえんだ！」

「……かもな。俺にだって、アイツがヤバいことぐらい解る」

それでもナギは諦めない。

「　けどな、ここで立ち止まってたらあの時と同じく何も変わんねえ
だろ？　がッ…！」

大和に敗北したあの時、ナギは何も出来なかつた。

仲間が傷つけられていふといふのに、相手に一撃を入れることすら叶わなかつた。

その屈辱と恐怖はリーダーであるナギに容赦なく襲いかかつた。

だからあの日の夜、ナギは血ちで誓つたのだ。

強くなる。

あんな思いを、一度としないために。

ナギの堂々とした後ろ姿に『紅き翼』の闘志に火が灯る。

「……ったく。んな」と叫われたら、ビビッとする自分が情けなさすぎるだらうが

ラカンは失った左腕を抑えながらも立ち上がる。

「リーダーにそこまで言わせてしまったなら、我々も応えねばな」

詠春も腹部の怪我を帯で止血しながら、斬月を構える。

「ふふふ、今の私では大して力にはなれそうにありませんが、……それでも、微力ながら死くしましょ」

魔力切れにより震える膝を強引に立たせて、アルビレオがいつもの笑みを浮かべる。

「元よりワシの怪我はこの中で一番浅い。そろそろ出番が欲しかったしな」

目立つた外傷の無いゼクトが、ナギの隣に立つ。

そして、

「　よく吠えた、バカファイールド」

五木大和が、ボロボロの体を引きずりながら現れた。

「大和君！？ その怪我は！」

「ちょっと外でソイツにやられましてね」

黒いローブの人物、『造物主』を顎でしゃぐる。

「よひ。さつきの借りを返しに来たぜ」「

右足は折れ、体中から血を流し、刀に寄りかかりながらも大和は戦う意思を見せる。

だが、最早近接戦闘は不可能な状態だった。

「おいおい、『剣の王』ともあうつものがボロボロじやねえか。イ
メチョンか?」

「はつ、腹に風穴開けておいて、よくぞがへ

ナギと軽口を叩きながら、大和は横に並んだ。

これが、大和と『紅き翼』が眞の意味で手を組んだ瞬間。

「詠春さん! 筋肉ダルマ! 敵の注意を引きつけてくれ!..」

大和の指示が飛ぶ。

「はつ、余裕だぜ!」

「任せろー。」

ラカンはを、詠春は斬月を使って『造物主』へと仕掛ける。

だが、一人の攻撃は曼荼羅の如き障壁に阻まれた。

「月牙、天衝！」

詠春は式の太刀を織り交ぜながら月牙天衝を繰り出すものの、始解に至つて間もない。

曼荼羅の障壁を抜けたとしても、『造物主』に致命傷を『与える』ことはできなかつた。

慣れぬ戦いを続ける内に、怪我のせいでどんどん体力が削られていく。

「瞬闘！」

ラカンは片腕で瞬闘を使い、圧倒的なまでの破壊力で『造物主』を薙ぎ倒さんとする。

しかし、『造物主』が掌をかざすと、曼荼羅の障壁の密度が一気に跳ね上がつた。

それを見た大和は『造物主』の障壁の特性を理解する。

(オートで全方位に展開している第一の障壁。さらに掌をかざすことによって数十倍の密度になる第一の障壁。……第一の障壁は、恐らく俺でも突破は不可能だ)

現在大和はなんでもなさそうに立っているが、実際は気合で体を支えているだけである。

間違いなくこの場にいるメンバーの中で一番の重傷だ。

接近しての高速戦闘などできるわけもなく、セラスを助ける際に使つた鬼道のせいで、氣も大して残っていない。

だが、

「おいバカファイールド」

「なんだよ」

「お前の全力で、あの野郎をぶつ倒せ」

今の彼は独りではない。

「……今の俺の最大火力でも、あの障壁を突破する自信はねえぞ」

「構わん。俺が一度だけ、アイツにお前の全力を直撃させてやる。だからお前はただ、バカのように全魔力を注ぎ込めばいい」

あの、二年前の夜とは違う。

「ならば、私たちの魔力も使って下さい。とは言つても、私の魔力はほとんど残つていませんがね。それでも無いよりかはマシでしょう」

「……そうじやな。今一度、お主に賭けてみるかの」

もう、独りで何もかもを背負つこむ必要はない

「けつ、」の技はテメエにリベンジするためのとつておきだつたんだがな！ 仕方ねえからここで披露してやるよ！」

そう叫ぶと同時に、ナギの持つ最高品質の媒体である杖に、ナギとアルビレオ、セクターの魔力が注がれる。

杖は発行しながらその形状を変えていき、神をも殺せるかのような槍へと変化していった。

大和はそれを見届けると、その一撃を確実に当てるための下準備に取り掛かり始める。

(通用するのは一回だけ。だが、その一回は絶対に防ぐことはできない)

大和は刀を抜き、その斬魄刀を呼び出した

「くそつ、二人だけでコイツを抑えんのはキツいぜ！」

「大和君達はまだ準備ができないのか！？」

ラカンと詠春の二人は『造物主』相手に、時間を稼ぐという無謀な行為を続けていた。

既に一人の体には幾重にも傷が刻まれ、流れ出る血が一人の体力を奪っていく。

そして、腹部に深手を受けている詠春は、ラカンよりも体力の消耗

が激しかった。

血を大量に失つたことによる貧血で、詠春は足元の石に躓くという初步的なミスをしてしまう。

۱۹۶۷

その隙を見逃す『造物主』ではなく、無色の閃光が詠春を貫いた。

詠春は無言でその場に倒れ伏す。

ラカンの反撃。

瞬間を纏つた右腕により、『造物主』の横つ面をぶん殴る。

収束しきれずに溢れたエネルギーが、ラカンを中心として渦巻いた。

「ちへじょうが……」

それでも届かない。

ラカンが最後に見たのは、片腕で自らの攻撃を完全に防いだ『造物

『』と、視界を埋め尽くす無色の閃光だった。

前衛の一人を倒し、大和達に向き直る『造物主』。

「解せんな……」

その黒いローブの奥から男とも女ともとれる声が響く。

「お前達はこの世界の真実を知っているはずだ。だとこいつに何故、そこまでして彼らに味方する?」

この世界は作り物。

この世界に住む人々も紛い物。

なのに、どうして彼らにこだわるのかと『造物主』は問う。

「確かに、この世界はまやかしなのかもしない」

大和は刀を前方で回転させる。

「でもな、俺が戦っているのは魔法世界人のためじゃねえんだよ」

残っている気を、全て刀に注ぎ込む。

「ただ俺は、自分自身に胸を張れる俺であろうと決めた。それだけのことだ」

そして大和は悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべる。

「なんだか、いい香りがするとは思わねえか?」

「つー?」

倒れる、
逆撫さかなで

その瞬間、『造物主』の世界が変わる。

上が下に、下が上に、右が左に、左が右に。

「これは

「おもしれえだろ? ロイシは逆撫つってな、敵の動作や感覚を上下左右、全て逆にすることができる」

『造物主』は左腕を動かそうとする。

だが、動いたのは右腕だった。

『造物主』は腕を下げようとする。

だが、意に反して腕は上がった。

「今だ、バカフィールド！ 思いつきりぶちかませッ！！」

体を思い通りに動かせない『造物主』目掛けて、ナギの全魔力を注ぎ込んだ槍が飛翔する。

「成程、上下左右の全てが逆」

『造物主』は掌をかざすことで、障壁の硬さを爆発的に増すことができる。

しかし、掌を正確にかざすことができなければ障壁は発動しない。

体の感覚の異変に慣れる前に、ナギの槍が『造物主』を貫く。

そのはずだった。

「 そして、前後も逆か」

いきなり体の感覚が逆になり、すぐに反応できる生物などいない。

なおかつ、上下左右だけでなく、前後までも入れ替わっている」と
に気付くなど人間技ではない。

しかし、『造物主』は反応してみせる。

飛翔する槍に向け、正確に掌をかざした。

(駄目か!?)

ナギ達の顔に絶望が宿る。

だが、曼荼羅の障壁が展開され、槍が衝突する瞬間。

「ああ、一つ言つて忘れていたが」

槍が、前触れなく消滅し

「見えてる方向と、ダメージを受ける方向も逆だから」

背後から現れた雷の槍に、『造物主』は貫かれた。

それを見届けた後、大和の意識は震んでいく。

元々気合だけで立っていたようなものだった。

体が休息を求め、大和も抵抗することなく倒れる。

ただ、完全に意識が闇に落ちる前に、ゼクトの声と、ナギの怒号が聞こえた気がした。

第十六話（前書き）

新たに小説を書き始めるところ無謀なことをしていますが、これから
の小説を優先させるので安心してください。
(まずこの小説を楽しみってくれている人がいるかは疑問ですが
……)

第十六話

「……つ、ぐ」

「大和殿！？ 目が覚めたんですか！？」

激痛に顔をしかめる大和の視界に広がったのは、見慣れぬ天井とセラスの顔だった。

「……」

「オステイアの艦の中です。戦いが終わった後、一番近くにいた艦隊に救助を求めました」

「他の奴らは……戦いはどうなった？」

「覚えていないのですか？」

そう聞かれ、大和に最後の記憶が蘇る。

ナギの槍が、『造物主』を貫いたことを。

「どうか……俺達は、勝ったのか」

「はいっ。『造物主』を倒した後に魔力無効化の力場が展開されま

したが、それも反転術式で抑え込みました！」

大和は起こしかけていた体をベッドの上に落とす。

痛む両腕で顔を覆つた。

「終わったのか……」

「はいっ……」

セラスの目から涙が溢れる。

「全てが終わりましたっ……」

「そうか……」

「世界は救われました……」

「ああ……」

「私が今ここにいるのも、貴方のおかげです」

「……」

「本当に、ありがとうございました」

ベッドの上の大和に、深々と頭を下げる。

純粋な感謝の眼差しを向けられ、大和は気まずそうに顔をそらした。

「いや、別に……」

「いえっ、貴方に抱きかかえられたり、庇われたりしなかつたならば、私は確実に死んでいました！」

自分で言いながら少し恥ずかしかったのか、赤面するセラス。

一、三回ほど深呼吸をして、心を鎮める。

「あのつ、その、それで、べ、別に吊り橋効果とかそんなんじゃなくてですね！ わ、私は！」

その時、部屋の扉がコンコンとノックされた。

身を乗り出した体勢でフリーズするセラス。

「入つていいぞ」

「うむ、失礼する」

扉を開けて入ってきたのはアリカだった。

「よう、久しぶりだな王女さん」

「ああ。今回の戦いではお主のおかげで、兵達の犠牲がかなり減ら

された。礼を言つ

そう言つてアリカは大和に頭を下げる。

それを見た大和は照れくさそうに頬を搔く。

「……さつきも言おうと思ったが、俺は自分のために戦つたのであつて、別にお前らのためじや……」

「それでもじや。民の犠牲が減つたことには変わりない」

一国の王女が頭を下げるという場面を見せられて、セラスの頭の中はパニックになつた。

(え、ええええええええ！！？？ いや、これってどういうこと！？
大和殿も平然としてるし！？ 一人は以前からの知り合いだった
の！？)

内心でテンパつているセラスを見て、アリカは咳払いをする。

「すまんが、少し席を外してもらえぬだらうか」

「へ、あ、はいっ」

いくらアリアドネー部隊の隊長といえども、王女に席を外せと言わ
れて何とは言えまい。

頭の中が疑問で埋めつくされ、フリつきながら部屋を出ていった。

セラスが出ていつたことを確認した一人は話を再開する。

「他の『紅き翼』達は無事なのか？」

「うむ。ジャック・ラカンと青山詠春が重傷ではあるが、命に別状はない」

「そうか。そいつはなにより」

そつ言つて、大和は体を起こす。

「で、本題はなんだ？」

「……」

「アンタが戦後処理を放つて、わざわざ俺のところまで来たんだ。
なんかトラブつたんだろう？」

「……その通りじゃ」

アリカは話す。

自分達の勝利、それがどんな代償の上に成り立ったのかを。

「なるほど……オステイアの崩落か」

「ああ、わらわは世界を救う代わりに自國を滅ぼす」

「……そつか」

まともな判断力を残した人間ならば、当然の決断だ。
そもそも反転術式を発動させなければ、そのままオステイアは滅びていた。

最善の道は、あの時点で存在しなかつた。

アリカは次善の道を即座に選んだだけだ。

アリカに責任などない。

「アンタ、それでいいのか」

「……いいわけ、なかろうがつ！」

オスティアの王女が吠える。

「わらわとて、最後まで他の道を探した！」

「誰が好き好んで自國の民を死なせようか！」

「だが、他の道など存在しなかつた！」

「これしか、これしかなかつたのじゃ……！」

言い切つたアリカは、俯いて肩を震わせる。

それを見た大和は一つの決意をした。

「なあ王女さん。一つ、とびつきり素敵なプランがあるんだが、乗るかい？」

大和の語る作戦。

それは悪魔の契約。

契約したが最後、一度と「安らかに過ぐ」せる日は来ない。

そして、アリカは

セラスは艦内を散策していた。

大した怪我はしておらず、部隊の指揮権もアリアードナーからやつてきた援軍に譲渡済み。

ぶつちやけ暇だった。

しかし、セラスは悩んでいた。

(王族であるアリカ殿に、敬語も使っていなかつた……や、やつぱり一人はただならぬ関係！？)

まるつきり見当違いである。

(どうすればいいのでしょうか……アリカ殿に勝てる要素がまったく見当たりません)

セラスは悩み続ける。

一人で百面相をしながら廊下を歩くセラスだったが、通りかかった人が避けていることに気づいてはいない。

(うへ、このままじや落ち込むばかりです。外に出て頭を冷やしましょう……)

トボトボと歩き続ける。

セラスが大和を憧れるよつになつたのは、グレート＝ブリッジの戦いよりさらに前だつた。

アリアードナーに所属しているセラスは、闘技場の警備を担当したことがある。

その時に見てしまったのだ。圧倒的強者といつもの。

氷の竜を操り、ジャック・ラカンを子供のようにあしらった大和。衝撃を受けた。

自分と大して年が変わらないといふのに、彼はどうほどのかみにいるのだろうか。

それからといふもの、セラスは大和の噂を追いかけ始める。

グレー＝ト＝ブリッジで『紅き翼』を撃破した。

当然だろ？

テオドラ第三皇女の護衛として、闘技場から引き抜かれた。

彼ほどの力ならば、国も放つておくまい。

そして、彼を追いかける理由は、少しずつ変わっていき

甲板に出たセラスは新鮮な空気を胸いっぱいに吸い込んだ。

この艦は王都オステイアに向けて飛行中であり、眺めも最高だった。

いい場所を見つけ、思わず顔を綻ばせる。

しかし、次の瞬間に凍りついた。

「や、大和殿！？　どうしてこんなところに…？」

自分の想い人であり、命の恩人でもある五木大和が甲板にいたからだ。

「ん……ああ、セラスか」

大和はボンヤリとした目をセラスに向ける。

「どうしてこんな場所に来ているんですか！ 貴方は今絶対安静なんですよー…？」

「ああ、悪い悪い。すぐに戻るよ」

大和殿？

「」で、セラスはようやく大和の様子がおかしい」とに気がつく。

大和は一瞬だけセラスに目を向けたものの、またすぐに外の光景を眺め始めた。

だが、セラスが違和感を感じたのはそこではない。

今の大和は、隙だらけなのだ。

それこそ、セラスですら倒せそうなほどだった。

いつもは抜き身の刀のような雰囲気を放っていたにも関わらず。

「どうか、なさつたのですか？」

「いや、ちょっと外の空気を吸いたくなつただけだ。今から戻る」

そう言って、大和は甲板の手すりから離れた。

そのままセラスの横を通り過ぎ、艦内に戻らつた。

「ま、待つて下さいー！」

大和が自分の横を通り過ぎようとした時、セラスは思わず大和の手を握りしめた。

「……なんだ？」

「え、あ、その」

思わず止めてしまったものの、セラスにこれといった用事はない。

強いていうならば大和の様子が気になつたからなのだが、流石にそれは用事としては苦しい。

（な、何を言へば……）

せりふにテンパる。

そして、反射的に口から出でてしまった。

「好きです！」

「え……？」

大和がセラスの顔を見る。

そして、セラスは自分が何を言つてしまつたのかをようやく自覚した。

(あわわわわわわわわーーー？？ わ、私は一体何をーーー？)

だが、時既に遅し。

吐いた言葉は飲み込めない。

(ああ、色々と終わりました……)

雰囲気もなにもあったものではない。

こんな告白が受け入れられるはずもないだろう。

セラスは目を閉じ、大和の言葉を待つた。

しかし、予想とは違つて、頭に手の感触。

「え……」

しばらく硬直してから、ようやく頭が回りだす。

(頭、撫でられてる……?)

恐る恐る目を開ける。

すると、本当に大和に頭を撫でられていた。

「ありがとな」

大和は、笑顔だった。

「お前の気持ちは素直に嬉しい」

しかし、セラスにはやはり違和感しか感じじない。

「でも、すまない」

まるで今にも泣きだしてしまいそうな、そんな顔。

「俺なんかのことは忘れて、新しい出会いを探してくれ

「

振られた」とよりも、大和がそんな顔をしていることの方が、心に刺さつた。

『紅き翼』の面々の治療は終わり、ラカンと詠春も出歩けるほどには回復した。

その後、離島にて終戦の式典を執り行い、オースティア市民の大部 分がナギ達を祝福してくれた。

ただ、その場に大和の姿はなかつた。

ナギ達は現在、離島をぶらついている。

「ははは。ボロ雑巾みたいだぜ、ジャック」

「ま、俺と詠春はヤツの攻撃を至近距離で食らひまつたからな。名誉の負傷つてヤツだ」

「それにしても、ゼクト殿のことは残念だったな……」

「戦争だったんだ、そういうこともあるだろ。敵も味方も大勢死んだ」

「……いや、お師匠は」

ナギはゼクトのことを語りうとしたが、アルビレオに止められる。

(今はまだ話すなつてことが……)

「おこナギ。それより姫さんとはじくなつたんだよ?」

ラカンが暗い空気を変えるためか、おどけた調子で聞く。

「……別に、なんもなかつたつ。式典が終わってからは一度も

会つてねえし

「本当かー？」

「暑苦しいから顔を寄せんな」

「詠春、貴方の刀はずつとその形態のままなのですか？」

「ああ、コイツは常時解放型というタイプらしくてな。正直持ち運びに苦労している」

そんなやり取りをしていると、近くの建物に備え付けられたモニタ一が目に入った。

(あれは……今回の戦いでの戦死者のリストか)

人の名前が順番にスクロールされている。

気がつけば、いつの間にか周囲の人たちは黙祷を捧げていた。

ナギ達もそれに習つ。

二刀ラス

ヒューバート

ネヴィル

シーザー

エドワーズ

ルーファス

ゼクト

その名前が出た時、『紅き翼』のメンバーは皆、顔を伏せた。

(お師匠……)

ゼクトがどうなったのか、本当に知っているのはナギとアルビレオだけだ。

しかし、もうゼクトが戻つてこないという意味ならば、ラカン達も間違つてはいない。

『紅き翼』もオステイア市民も、英雄を失つた悲しみに心を痛める。

た。だが、その次にスクロールされた名前に、『紅き翼』は目を見開い

第十七話（前書き）

一話同時投稿です。

「おいどうなつてるー、どうして魔法が使えないんだー！」

「そんなもん俺が知るかよー！」

「誰か、私の娘を見かけませんでしたか！？」

王都オステイアはパニックに陥っていた。

ある一時を境に、魔法がまったく使えなくなるという異常事態が発生。

自らの手足のように扱ってきた魔力が消え、オステイアの市民は恐慌状態となつた。

さらに追い打ちをかけるかのように地震が起こり、オステイアの数箇所が崩落する。

それはまさに、この世の終わりのような光景だった。

「お母さんー、お母さー、きやあー！」

はぐれた母親を探し、子供が周囲を見回す。

だが、このパニックの中ではそれもままならず、走り回る大人に突き飛ばされてしまった。

「うう……痛い……」

少女にとって、いつも通りの一日のはずだった。

親の仕事の関係上、離島のパレードには行けなかつたが、その分夕食を豪華にしようと家族で話し合つた。

お母さんと二人で町に出かけ、良い食材を買つた。

戦争が終わつたお祝いをしよう、とお母さんと笑いあつた。

パレードに行けなかつた分、お父さんに埋め合わせをしてもらひ、と話し合つた。

「なのに、どうして……」

足をくじいてしまつたのか、少女は蹲つたまま動かない。

しかし、あることに気がついた。

先程まで逃げ惑つていた周囲の人間が、今は全員立ち止まつてゐる。

「……？」

不審に思い、周りの人間を見回す。

すると、一人の例外もなく空を見上げていた。

少女もつられて上を向く。

すると、そこには

「綺麗……」

見る者を虜にするような、蒼い光がオステイアの街を包み込んでいた。

「おに姫さん！ ナギだ！ 応答しやがれ！」

この魔力消失現象の中で、『紅き翼』もまた動き出していた。

指名手配され、逃亡中に使っていたボロ船に乗り込み、この現象の正体を知っていると思われるアリカに連絡を入れる。

ブリッジのモニターに、アリカの顔が映される。

「……ナギか。何の用だ」

「何の用か、じゃねえだろ！ 一体これはビバービーだとだー！」

「……見てのとおりだ。妾は世界を滅ぼす黄昏の姫御子の『反魔法場』を、姫御子」と封印した。これはその代償なのだ」

「つ、なんでも言わなかつた！」

「言えばまづにかできたのかー！」

即座に返され、ナギが言葉に詰まる。

「くせツ、今からそつちに向かつ！ 待つてろー！」

「ここにお主の力は必要ない！ それよりもまだ崩落を始めていい区域に行つてくれ！ 姫達が逃亡中に使用していたボロ船なら

「

「もう乗ってるよー。ちくしょうつ、こんな時に大和の野郎は何してんだ！」

その名前を聞いた瞬間、アリカの顔に動搖が生まれた。

「……おい姫さん。アンタ、何か知っているのか」

アリカの表情の変化をナギは見逃さなかつた。

「……」

「姫さん！」

生まれた動搖は一瞬だけ。今のアリカは完全に無表情だ。

アリカはゆつくりと口を開く。

「……今、妾達が行なつてることは、ただの『保険』なのだ」

「『保険』だと……？」

「そうだ。この魔力消失現象で失う命は、ほぼゼロだらつ」

「姫さん、アンタ何言つて……」

その時、蒼い光がどこからともなく舞い降り、オステイアを包み込んでいくのをナギは見た。

首の後ろがチリチリとした感覚を伝える。

この感覚を、ナギは何度も味わったことがあった。

そう、この感覚は

「大和……？」

「さて、始めるか」

オステイアの周囲に無数に存在する浮島。

その中の一つ、直径百メートルもない島に大和はいた。

右手に持った刀を地面に突き立てる。

既に下準備は終えており、後は実行に移すだけ。

大和は深呼吸を一つ、そして、両の手を強く打ち鳴らした。

「縛道の百

時殺

大和の体から、蒼い光が溢れ出す。

それは絡み合い、もつれ合いながら爆発的に体積を増していく。
さながら蒼一色で構成されたオーロラのように、オステイアを覆つた。

それを見届けた大和は息を深く、深く、吐き出す。

一番重要な工程を終え、大和は安堵した。

（だが、まだ集中を切らすわけにはいかない……）

神に祈るような姿のまま、大和は自らの意識の中に潜っていく。

だが、ふと懐かしい気を感じた。

鬼道に長ける大和は、それが詠春による天挺空羅だということをす

ぐに理解する。

(詠春さん……鬼道は苦手だったのに、天挺空羅を使えるようになつていたのか)

まだ京都にいた頃、いつもの場所でよく鬼道の訓練を見ていたことを思い出し、大和は苦笑する。

天に伸びる気の網は大和から見れば拙いものではあるものの、詠春が修行を怠つていなかつたことを証明していた。

大和を捕捉することに成功したのか、気の網の一部が大和の元に飛んでくる。

『……君……大和君!』

「詠春さんですね？ 聞こえていますよ」

『よし、繫がつた!』

天挺空羅の向こう側から複数人の声が聞こえる。

『うやら『紅き翼』の全員が集まつてゐるようだ。』

『大和君は今どこにいるんだ！？』

「オスティアの周囲に浮遊している島の中の一つです

『そんなところで一体何を……って、おいナギ！ 押すな！』

『おい大和！ テメエこんな時にどこで油売つてんだよ！』

現在、詠春はボロ船中の一室で座禅を組んでいる。

魔力が消失しているために念話などは使えず、氣で発動する鬼道でしか大和と連絡がとれない。

苦手な鬼道を成功させるための努力だったのだが、側にいたナギが飛びついたために体勢が崩れそつた。

『バカフィールドもいるのか、丁度いい。仲間を連れて今すぐにオステイアから離れる。魔力消失現象に巻き込まれるぞ』

「それはもう聞いた！ 僕達はこれから逃げ遅れた人達の救助を

』

『必要ない』

ナギの言葉は途中で遮られる。

『だからお前らはやつたとこの場を』

「必要ないつて、どうこうことだよ」

『……』

「テメエと姫さんは何を企んでんだよー 答える大和!』

『……簡単な話だ。俺が鬼道を使って、オステイアを地面に軟着陸させることだよ』

それを聞いた『紅き翼』は息を呑む。

大和の『デタラメさはよく知つてはいたが、今回はその中でも群を抜いていた。

オステイアはその辺りに浮いている島とは訳が違う。

ウェスペルタティア王国はどちらかと言えば小国の部類に入る。

だが、仮にも一国の首都。

それを一人の鬼道で浮かすなど、最早笑い話だ。

しかし、大和のことを知る人間ならば、また話は違つてくる。

「お前、首都を浮かすなんてこと本当にできるのか」

『ああ。浮かすといふよりは、時間停止の鬼道を使って落下のスピードを緩めるといった方が正確だがな』

「マジかよ……」

『マジだ。だからオステイアは俺に任せて、お前らは避難した人達の混乱を収めてくれ』

驚愕する『紅き翼』達だが、ナギはモニター越しのアリカの様子がおかしいことに気がつく。

「どうした姫さん。顔色が悪いぞ」

「……」

『なんだ、王女さんもいるのか?..』

「ああ、モニター越しだけじよ

「あの、少しよろしいですか?」

通信にアルビレオが割り込む。

『なんだアル。今俺は集中してんだから、できるだけ手短に話せ』

「わかつています。私が聞きたいのは、それほどの術を行使する貴方になんらかの代償があるのでないか、ということです」

アルビレオがそれを聞いた瞬間、アリカの表情が凍りついた。

『……』

大和も黙り込んでしまう。

「返答はなしですか。詠春、貴方の知っている範囲でなにか副作用のようなものがある鬼道はありますか？」

「……ある。俺が知っているのは一刀火葬という鬼道だが、それを放つには腕一本を代償にしなければならない」

犠牲破道と呼ばれる、破道の九十六　一刀火葬。

それは焼け焦げた己の腕を生贊に捧げることで発動する禁術。

そのおぞましさに、『紅き翼』達は顔を歪めた。

「一つの都市を浮かべるという鬼道に、何の代償も無い訳がない」

アルビレオもまた、大和に鬼道を教わった身。

だからこそ、出来る範囲が大体わかる。

「大和、貴方はこの犠牲鬼道を使おうとしているのですね？」

『……そうだ』

「一体、何を捧げるつもりなのですか?」

時間停止の鬼道は、それだけで禁術。

ましてや、オステイアを丸々包み込むほどの規模だ。

その分代償も大きく

『身体全部だ』

その咳きは、空虚に響いた。

「つ、ざっけんな……」

ナギが拳を強く握り込む。血が滲むほどに。

「テメエ、ふざけんじやねええええッッッ！――！」

そして叫ぶ。

「何考えてやがる！？ オステイアの連中救つて！ そんでもって自分が犠牲になつて！ そんなもんただの自己満足じやねえか！」

『さうだが、それがどうかしたか？ 少なくともお前に俺の人生をどうじうづ言われる筋合いはない』

「んだと！」ア！

そこで、ナギは気付く。

先程からアリカが一言も喋らないことに。

「まさか姫さん、アンタも……」

アリカはゆっくつと頷ぐ。

「……ああ、知っていた」

「姫さん……！」

『おいバカファイールド。王女さんを責めるのはお門違いだぜ。そもそもこの方法を提案したのは俺だしな』

それでもなお言い返そうとするナギだったが、ふと思い出す。

戦死者のリストの中に大和の名前が入っていたことを。

それはつまり、最初から生きて帰るつもりが無いことを証明していた。

『悔しいか？ それならその気持ちをよく胸に刻んでおけ。今お前が感じている無力感は、王女さんもまた感じているものだ』

そう言われてナギは気付く。

モニターの端にチラッと映されたアリカの手。

その手もまた、血が滲んでいた。

『結局のところ、お前に力が無いのが悪い。そして俺には力がある。だから俺を止められないんだよ』

ナギは近くの壁を思いつきり殴りつける。

大和の言葉は全て真実だった。

大和のすることに文句を言える筋合いなどない。

『お前は王女さんを救つてやれ。ソイツは俺のことも背負つちまつだろうからな』

思えば、最初から大和は自分のためだけに戦っていた。

人を救いたいというのも、ただの自己満足。

こうして犠牲鬼道を発動しているのもまた同じ。

最後まで自分本位に、夢を叶えようとしているに過ぎない。

『俺には叶えたい夢がある。今回の崩落はそれを叶える大チャンスなんだ。誰にも邪魔は、させない』

僕は破道よりも縛道の方が好きだな。作成者の、できるだけ人を殺したくないという思いが伝わってくる。

僕達の持っている技術は、人を傷つけるためのものだ。それは否定しようがない。

でも、この技術で誰かを護ることもできると思うんだ。

僕はこの技術で、人を守れる存在になりたい。多くの人の命を救えるような存在に。

そう、お伽噺のような英雄に、僕はなりたい。

オスティアが、緩やかに降りてゆく。

その大地にたくさんの人を乗せながら。

人々は皆、外に出て蒼い光を見つめる。

誰もが無言だった。

しかし、誰もが理解していた。

この蒼く、優しい光が、自分達を守っているのだと。

都市が地面に降りるまで、人々はその光から目が離せなかつた。

体が消えていく。

自分の手をかざしてみると、地面が透けて見えた。

地面に突き立つてゐる自分の刀を撫でよつとする。

残念ながら、その前に手は完全に消えてしまつたが。

結局、名前すら付けることはなかつた。

しかし、間違いない自分と共に歩んできた相棒だ。

ありがとうと言おうとして、自分の喉が消えてこるので返すべく。

苦笑しそうにして、口が無ことに気がついた。

仕方なくオステイアの方に目を向ける。

自らの鬼道はその役目を果たし、都市を緩やかに地上へ降ろしていく。

これならば被害もほとんど無いだね。

せめて最後まで見届けたいが、視界が霞んできた。

この瞳もまた、その役目を終えようとしている。

まだ思考は残つていいようなので、過去に思いを馳せてみた。

様々な出会いがあった。

挫折したこと也有った。

また、血の足で歩き始めた。

そして、大和に残つた最後の誓い。

ねえ、刀子ちゃん。

色々と遠回つてしまつたけど。

一度、諦めやつになつたけど。

俺、やつと英雄になれたよ

『紅き翼』とアリカがその場所にたどり着いてから、誰も言葉を発しなかつた。

大和のいた場所に残っていたもの。

それは、一本の名も無き刀だけ。

皆、無言で見つめ続ける。

一人の英雄の生き様を表す、その一本の刀を

第十七話（後書き）

色々と批判が怖い……

当たり前ですが、これで完結はしません。むしろこれから始まると
いう感じです。

第一章 最終話

大戦より十数年後。

京都、総本山にて。

「長、お願ひします！ 私に神鳴流を教えて下さい。」

「刹那君……」

「私はこのちや……お嬢様が川で溺れた時、何もできませんでした……だから、強くなりたいんです！ 次は守れるようになりたいんですね！」

近衛家の屋敷にて、桜咲刹那が詠春に頭を下げていた。

「……刹那君、貴方は木乃香の友としてよくやつてくれていると思います。しかし神鳴流を修めるとなると、木乃香との時間もあまり取れなくなるでしょう」

「はい」

「神鳴流の修行は厳しい。途中で断念する者も、残念ながら少なくありません」

「はい」

「それでも、決心は揺るがないのですか？」

「はいー。」

ついこの前、木乃香が川で溺れるという事故があった。

幸い命に関わるものではなかつたが、その時の無力感は今でも刹那を苛んでいる。

(むへ、あんな思いは一度としたくない……ー)

刹那の決意の固さを感じ取つたのか、詠春は目を閉じたまま頷いた。

「わかりました。刹那君にはこれから神鳴流の一員として、修行に参加してもらいます」

「ありがとうございますー。」

刹那はよつと一層深く頭を下げる。

「……貴方になら、託してもいいかもしませんね」

「え？」

「」で待つていて下さいと告げ、詠春はその部屋を後にする。

数分後に戻ってきた詠春は、その手に一本の刀を携えていた。

その刀はあちこちが古びていたものの、汚れや埃は無く、入念な手入れがされていることを伺わせる。

詠春は刀を刹那の前に置いた。

「この刀は私の友がかつて使っていたものです。年代物ですが、造りは頑丈ですので受け取って下さい」

「そ、そんな貴重な刀を私などに渡してよろしいのですか?」

「貴方は木乃香を守ると誓つてくれた。私の友もまた、人を守るうとする誇り高い人物だったのです。この刀は貴方にこそ相応しいでしょう」

刹那はおずおずと刀を手に取る。

子供の手にはずつしりと重く、ゆっくりと引き抜かれた刃は差し込んだ陽光を反射した。

(綺麗や……)

思わず見蕩れてしまつ。

「あの、この刀に名前はないのですか?」

「名前は付けられていませんでしたが……刹那君が名付けますか?」

詠春に問われ、刹那は少し考え込む。

「失礼ですが、この刀を使っていた人の名前を聞いてもいいですか?」

「……大和、とこう名です」

「ならば、私はこの刀の名を『大和』としたいと思ひます。」

何故だろうか。

まだこの刀に主として認められていないと、刹那はそう感じた。

「私、一生懸命修行します！ そしてこの刀に相応しい剣士になつて、お嬢様をお守りしてみせます！」

だからこそ宣言する。

たとえ今は弱くとも、いつか必ずこの無骨で、そして美しい刀に認められるような使い手になつてやると。

刹那が出ていった後の部屋で、詠春は願つた。

「大和君……どうか、彼女達を見守つて下さい」

その願いは、未来で確かに聞き届けられる

『第一章 終』

第一話（前書き）

この小説の刹那は、ちょっとアレな子です。

第一話

詠春に『大和』を授かってから三年、あの日から刹那は毎日修行漬けの日々を送っていた。

神鳴流の修行は厳しく、幼い刹那には辛いものであった。

時には挫けそうになることもあり、その度に『大和』を見て、最初の誓いを思い出す。

「のちゃんを守りたい。」

それだけを考えて、大の大人でさえ音を上げるような修行を乗り越えてきた。

この三年は体の下地作りに専念し、剣術を習つことはなかつたが、同年代の子供と比べれば格段に強い肉体と氣を持っていた。

元々人外である鳥族の出身だ。伸び代は人間よりも多い。

基礎を積み上げる期間を終え、刹那は本格的に神鳴流の修行に入ることになった。

しかし、ここで問題が発生する。

関西呪術協会の中で、刹那の立ち位置はいいとは言えない。

元々詠春が何の断りもなく連れてきた子供だ。

詠春からすれば、刹那が人間と鳥族のハーフであるなどと迂闊に吹聴するわけにもいかず、一時期隠し子と噂されたこともあった。

そして一人娘である木乃香と近しいこともまた、刹那の立場を悪くしている。

木乃香に取り入りたい一派からすれば、刹那は嫉妬の対象だ。

必然、その悪意は様々な形で刹那に襲い来る。

刹那は迫害されることには慣れていた。

鳥族の里にいた時も、羽や髪が白いこと、つことで不吉の対象とされていた。

だから周りの人間に誹謗中傷を受けようと、我慢できた。

他の神鳴流を志す者達に陰口を叩かれようと、我慢できた。

無論、その心は何も感じない訳ではなかつたが。

それでも、辛い夜には『大和』を抱いて寝ることで落ち着くことが
できた。

『大和』に気を込めると何故か不思議な気分になる。

まるで誰かに見守られているような、そんな暖かい気持ちになるの
だ。

だから刹那は毎晩気を込め続ける。

ありがとうと、心の中で呟いて。

「はっ！ たあっ！」

山の中に刹那の掛け声が響きわたる。

その声は近くにある滝の音と混じり合って、打ち消されていった。

刹那は『大和』を両手に持ち、何度も振り下ろす。

その軌道はお世辞にも綺麗とは言えず、刃筋も立っていないため、たとえ人に斬りかかつてもただの打撃武器に成り下がるだろう。

それ以前に握り方からしておかしい。

刀といつもは、利き腕とは逆側の手で柄の先を持つ。

そうするにとよつて、ここに原理を使って刀を振るうことができるのだ。

しかし刹那の両手はくつついており、まるで野球のバットを持つかのようだった。

それもそのはず、刹那はまともな剣術の指導を受けていない。

神鳴流の師範代の一人が刹那を疎んでいる派閥の一員であるせいでの剣術の稽古をほとんど見てもらえないのだ。

それどころか道場からも追い出される始末。

行き場を無くす刹那だが、過去の体験から人に頼ることに慣れていないために、詠春に相談することも思いつかなかつた。

「のままではこのちゃんを守れない。

そう考へた刹那は、たとえ独学になろうとも力をつけることを決意した。

実際のところ、指導者も無しに剣術が上達することなどほとんど無いのだが、この時の刹那は九歳。

色々と浅はかな年頃だった。

しかも修行する場所に選んだのは、よりによつて立ち入り禁止の山。

本人はそのことを知らずに（教えてくれるような人がいないため）適当に選んだのだが、このことが他の人間に知られれば、むしろ保護者である詠春の立場が悪くなる。

下手に相談するよりもよっぽど迷惑な行為だつた。本人はまつたく気づいていないが。

自分がかなり危ない橋を渡つていることなど知らずに、刹那は剣を振り続ける。

（アカン……全然強くなつてる気がせえへん……）

この場所で素振りをするようになつてから五日。

刹那は手応えをまったく掴めずについた。

（やつぱり、師範代の人に頭下げて教えてもらつた方がええんやろうな……）

流石に五日も剣を振つていると、指導者の不在がいかに大きいかわかる。

刹那が剣を持つ理由は、木乃香を守るため。

そのためには自分のちつぽけなプライドも捨てる覚悟だった。

自分は何も悪いことをしていないので、といつ思いは確かにある。

だが、木乃香の優先順位はそれよりも遙かに上。

後一回だけ素振りをしたら、道場に行つて師範代の人に頬み込むことに決めた。

（最後の一回、集中して振るひ……）

『大和』を大上段に構え、気を練り上げる。

息を深く吐き、体中に力を籠める。

そして、裂帛の気合と共に刀を降り下ろそうとして

力を入れすぎだ小娘。 そんなんじゃ紙も切れねえよ。

「え……？」

刹那の頭の中に、聞き覚えの無い男の声が響いた。

刀を大上段に構えたまま、周りをキョロキョロと見回す。

見晴らしのよい河原には刹那以外、誰もいない。

首を傾げるも、気のせいだと自分を納得させて、再び刀を降り下ろそうと

といふか、まず握り方が滅茶苦茶だろうが。まったく、見ていてイライラする。

「だ、誰なん！？」

一度だけならば氣のせいとするもできたが、流石に一度田ともなれば無視できない。

刹那は『大和』を構え直し、周囲を警戒する。

しかし、相変わらず周りには誰もいない。

この異常事態に刹那は混乱する。

(だ、誰もおらへんのに声がするつて……ひょ、ひょっとしてオバケ！？)

繰り返すが、この時の刹那は九歳である。

オバケや幽霊が苦手な年頃だった。

声が、届いている？ そんなことがあるはずが……お小娘！

「ひや、ひやい！？」

声が裏返りながらも、なんとか返事をする。

それを聞いた声の主が動搖する気配が伝わってきた。

どうしたことだ……いや待て。かなり細いが、小娘との間に糸^{パス}が繋がっている。一体いつの間に……

謎の声の主は何かを考え込んでいたが、刹那としては気が気がしない。

この前木乃香と一緒にホラー映画を見てから、そういうオカルト的な存在が非常に苦手になつたのだ。

布団を被つて泣き叫ぶ刹那とは対照に、木乃香は平然と笑っていたが。

（で、でも、たとえオバケが相手でも、このちゃんには手出しさせへん！）

刹那は恐怖を振り払い、木乃香を守る決意を新たにする。

その間も、声の主は考え方をしていた。

まさか、この三年間に毎晩氣を込められる」といって、擬似的な仮契約のようなものが成立したのか？

「お、お前は誰や！ 正体を表せ！」

刹那は気丈にも叫ぶ。

ただし、足は震えていたが。

ああ？

「！」のちやんこには指一本触れさせへんー。」

「コイツ何言って……ああ成程。そういうことか。

そう言って、声の主は呆れたようにため息を吐く。

(一 体 何 处 に い る ん や ． ． ． ま つ た く わ か ら へ ん)

レーハだ。お前の正面だよ。

心の中の声に返事され、刹那は戸惑う。

しかも、正面に目を凝らしても滝以外は存在しない。

こつちだつての。お前がしつかり握り締めているだろつが。

「へ？」

刹那は自分の両手を見る。

その手はしつかりと、詠春から託された刀、『大和』を握り締めていた。

「……」

やつと氣づいたか。まったく、相変わらず鈍いヤツだな。

刹那の思考が停止する。

そして頭に過ぎるのは、かつて一本の刀により神鳴流が滅ぼされかけたことがあった、ということ。

この刀は、それと同じ

۱۶۰

ん？

え？ オ、オニ！ オ前何言ひて、

「こやああああああああああ… 乗つ取られやがれやがれやがれ
う…！」

ナヨ、ナ

謎の声の静止を無視し、刹那は泣きながら思いつきつ刀をぶん投げる。

刀は綺麗な放物線を描き、長い長い滞空時間を経て、滝壺に着水した。

「の滝に沈むのは一回目か……結構ここつて浅いんだよな……

謎の声の主 大和は、沈みゆく中で、現実逃避気味にそんなことを考えていた。

第一話（後書き）

作者はオツツダルヴァアが好きです。

第一話（前書き）

一話同時投稿です。

第一話

『全く、湖に投げ込まれたエクスカリバーもこんな心境だったのかね……』

「ほ、本当に『めんなさい』。まさか貴方が前の持ち主の人やつたなんて……」

『……別に、もう氣にしていない。それよりも柄の中までちゃんと拭けよ。目釘の抜き方はわかるな?』

「は、はいっ」

現在、刹那は『大和』をバラバラに分解して河原に並べていた。

刹那は刀を滝壺にぶん投げた後に正氣に戻り、詠春から託された大切な刀を捨ててしまつたことに気がついた。

すぐに取りに行こうかと思ったがしかし、やはり怖いものは怖い。

結局、回収する決心をするまで十分程の時間を要した。

もちろんその間、大和は滝壺に沈んだままだった。

そして回収した後も問題発生。

大和に散々怒鳴られて、刀に頭を下げ続ける人間という珍しい構図を経た後、刀のあちこちに浸水していることが判明したのだ。

とはいっても、水の中に沈んでいたのだから当然とも言えるが。

このままでは錆び付いてしまうとのことで、刹那は刀のメンテナンスをすることを命じられたのだった。

「えっと、その、大和さん？」

『なんだ小娘』

「どうして刀になつてているのか、聞いてもいいですか？」

『断る』

一刀両断。

即座に断られ、刹那は涙目になる。

それを見てさすがに哀れに感じたのか、仕方ないといった風に説明を始めた。

『……昔、俺が生きていた頃だが、その時に少しばかり無茶をした。その代償として体を全て持つていかれた』

「か、体全部？」

『ああ。だが、魂は代償の対象外だつたらしく、それだけが残つたんだ』

「そ、想像もつかへん……」

「一体どれほどの事をすれば、体を全て失うなどという代償を払わねばならないのだろう。

刹那はそれを聞いてみたくもあったが、何故か話してくれないだろうという確信があった。

『本来、魂だけ残つたところでそのまま消えるか、悪霊化するかのどちらかしかない。だが俺の場合、運のいいことに、すぐ近くにとり憑く対象があった』

「それがこの刀やつたん?』

『そういうことだ』

「それって、やっぱり妖刀……』

『ああ?』

「はうひ、『』、『めんなさい』

完全に立場が逆転しているが、それを突っ込む人間はこの場にいな

かつた。

「これでよし、と」

『刀の手入れの方法はちゃんと覚えておけよ。お前のは色々と順序が間違っていたからな』

「すみません……」

『……まあ、毎日欠かさず手入れしていたことは褒めてやつてもいい』

「え？」

人に褒められることに耐性の無い刹那は、それが自分に向けられた言葉だと気付くのに数瞬の時間を要した。

そして、気付くと同時に真っ赤になつて照れる。

「あ、あ、あ、」

『……調子に乗るな。言つとくが、普段のお前の刀に対する扱いは結構雑だからな』

「あ、やつぱりそりですよね……」

『ああもうこちこち落ち込むんじゃねえ！』

「あつひ、す、すみません……」

しょんぼりする刹那を見て、大和はため息をつく。

もし体があれば、頭をがりがりと搔いていただき。」

そして刹那がふと、考える。

(あれ、普段のことを見つめてることは……ひょっとして)

あることに思い当たり、刹那の顔が青ざめる。

「あ、ああの、大和さん」

《何だよ》

「ひょ、ひょっとして、私の普段の行動も、その、見てたんですか

……？」

刹那は修行の時を除けば、常に『大和』を持っていた。

それこそ、肌身離さずと言つてこいほどだ。

もしも最初から全て見られていたとしたら

『見てたぞ。この間、お前が詠春さんの器を落として割つたこととかもな』

大和がじくあつさりと白状したことにより、刹那の呼吸が止まる。

『俺の刀を受け継いだ日に、はしゃいで振り回した拳句に『ざんがんけん!』とか叫んで岩に斬りかかつたことも忘れてねえぞ。オマケに斬れずに刃毀れしたもんだから泣き出すし』

『そういや一昨日もホラー映画見て泣き喚いていたな、お前。詠春さん娘は笑つて見ていたのに情けない』

「ニヤキの匂いがする。おまえの匂いだよ。」

これまでの人生における黒歴史を全て見られていたと知り、刹那は顔を真っ赤にして叫ぶ。

『ああそっだ。寝るときに俺を抱くのも勘弁してくれ。夏場は蒸し暑い』

『それともう一つ。いくらなんでも風呂場に俺を持ち込むのはやめてくれねえか。湿気で錆び付きそうになる』

ମୁଦ୍ରଣ

羞恥心が限界突破し、刹那は倒れた。

『本当に、こんなのが主でいいのかね……』

少し早まつたかもしけない！

そう思つた大和は一度田のため息を吐くのだった。

『腕の振りだけに頼るな。もっと膝を使え』

「えつと、こうですか？」

『肘じゃなくて膝だ！ ちゃんと聞いてんのかお前はー』

「あうひひ」

数分後、氣絶から目が覚めた刹那は河原で素振りをしていた。

何故こんな状況になつているのかと言つと、田覚めた刹那に対し、大和がこう言い放ったからだ。

お前の剣術、俺が指導してやつてもいい。

『また握りが甘くなっているぞ。正しい握り方は教えただろうが』

「は、はい！」

『たとえ今は窮屈で振りにくかううと、しばらく振り続けていると慣れる。それまでその型を維持しておけ』

「わかりました！」

大和の指導を受けて、かれこれ数時間。

刹那の剣術は劇的に、とまではいかずとも、かなり改善されていた。

鳥族とのハーフであるが故に身体能力に優れ、剣術のセンスもあつたのだろう。

幼い刹那は大和の教えをスポンジのように吸収していくた。

『力を籠ることと力むことは別だ。基本は脱力、それを一気に爆発させるイメージを持つて』

「……」

《どうした?》

「……あの、一つ聞いてもいいですか?」

《何だ、言ってみる》

何か剣術でわからないことでもあるのか、と大和は考える。
しかし、刹那からの質問は予想外のものだった。

「……………どうして、ウチにここまでしてくれるんですか?」

《……ああ? いきなり何を》

「だって、ウチは弱くて、刀の握り方すらよくわかつてなかつたし」

『おい小娘、お前』

「それに」

大和の言葉を遮つて、続ける。

「今までの私を見てきたんなら、大和さんも知つてるでしょ？」

ウチが、化け物つてこと。

その呟きは、やけに大きく響いた。

二〇〇〇

「だから、別に無理をして私に付き合ってくれなくても、長に言え
ばもつと強い人のところに……」

『馬鹿かお前は』

「……え？」

『ああ、そういやお前は馬鹿だつたな。忘れていた俺のミスだ』

「ちょ、ちょっと、大和さん？」

刹那からすれば、かなりの覚悟を必要とした言葉だった。

それがあつたじと獏鹿呼ばはわつされ、口惑つてしまひ。

『ホラー映画すらまともに見れないヤツが化け物だと? ふざけてんのか』

「え、あ、その」

『第一、その映画を見た晚にお前、少し漏ら』

思いつめり叫び、ハアハアと肩で息をする刹那。

『そんなヤツをじりじりて怖がればいいんだよ。黙つておぐが、生前の俺は山一つぐらい簡単に消し飛ばせるや』

「や、山つい……」

自分の刀の前の持ち主が規格外の人だったと知り、刹那が驚愕する。

そして同時に気づいた。

ひょっとして、自分は今、慰められているのだろつか？

『そんなんへっぽこのくせに、自分が化け物だなんて生意気言いやがつて。せめて神鳴流の技の一つくらい覚えてから』

「……」

『……おい、小娘?』

「あ……」

咄嗟に我慢しようとしたが、ダメだった。

表情は変わらぬまま涙が溢れ出し、握りしめた『大和』の柄に落ちていく。

『お、おー、急ごじうした』

「ち、違つ……ひつく」

『なぜ急に泣く…?』

一度自覚してしまえば、もう手遅れだった。

今まで、誰にも知られずにいた秘密。

それを初めて受け入れられた感動と、喜びと、様々な思いが胸の中で混ざり合つ。

そして、それらの感情は涙となつて溢れ出した。

『ああもう俺が言ひすぎた！ 悪かったよ！ だから泣くな！』

「ちや、ちやうんです、ぐすり、その、知られてから、受け入れられたの、初めてやつたから」

慌てる大和の声が耳に響く。

彼に感謝を示したいのに、自分の中で上手く言葉にならない。

色々な感情が混じり合って、もうどちらもどちらだった。

刹那は泣き続ける。

両手で刀を握り締めながら。

決してその手を離さぬように。

外伝四（前書き）

大和視点です。

一人称は初めて書くので、どうか寛大な目で見てやって下さい。

ならば、私はこの刀の名前を『大和』にしたいと思います！

私が一生懸命修行します！

そしてこの刀に相応しい剣士になつて、お嬢様をお守りしてみせます！

それが、俺と桜咲刹那の出会いだった。

この身が刀となつて、
幾年が過ぎただろ？

最早時間の感覚など消えていた。

時折詠春さんが現れて、刀の手入れをして去っていく。それだけだつた。

だとうのに。

「ざんがんけん！」

『ちょ、待て！ 今のお前にそんな技を出せるわけが

俺の静止も聞かず、小娘は硬そうな岩に刀を叩きつける。

「ハサキナツ」一

「た、大変や。長に貰つた大事な刀なのに……」

『だつたら少しさ大事に扱えや！』

幼い娘一人に翻弄されていた。

「へ、へつやー。」うつ時は研いで直せば……

『ああその通り！だから今すぐ詠春さんを呼んでこい！』

「ちよつと待つといてな。今すぐに直すから」

そう言って小娘は俺を茂みに隠し、駆け出していく。

数分後、戻ってきた小娘はどこから持ってきたのか、砥石を脇に抱えていた。

周りに詠春さんの姿は見えない。

(おい、まさか……)

俺の本能が警鐘を鳴らす。

この類の直感は外れたことがない。

すると案の定、小娘は俺の横に座り込むと、砥石を地面に設置して

「うう、ごめんな。ウチが未熟なせい……」

泣きながら、自らの手で俺を研ぎ始めた。

だが、こんな小娘に研ぎの技術があるはずもなく。

『ぐああああああああああ！……ちよ、お前、それ側面を削つて
るだけがががががががががが……』

……こんな記憶はさつさと消去したい。

桜咲刹那はハーフである。

俺がそのことを知ったのは、小娘に引き取られて直ぐのことだった。
どうして俺がそんなことに気がついたのかと言つて

「ふん、ふふん」

『……普通、刀を風呂場に持ち込むか?』

今現在、こんな状況だからだ。

小娘は風呂の中だからか、緩みきつた顔で翼を洗っていた。

いへりなんでも油断しそぎだら、と思わなくもない。

(ロリコンだつたら喜ぶ光景のかもな……)

だが生憎と俺はノーマルだつた。

小娘の裸体如きに欲情するわけもなく、むじろ湿氣による不快感に
顔を歪めていた。

……顔など無いが。

その時、体を洗っていた小娘がシャワーのバルブを一気に開いた。

水が勢い良く溢れ、小娘の手から跳ねて飛ぶ。

「あ」

! ! ? ?

……どうして詠春さんは、こんな子供に俺の刀を託したんだ？

「せりせりせりひちやん。今ええと」いやでー

「いややー。怖いの見たなー。」

《へえ、最近の映画はよくできてるな》

詠春さんの娘、名を木乃香と書つたか。

今はその娘と一緒にホラー映画を見ているのだが、中々の胆力だ。

この映画はかなりリアリティがあり、大人でも少し怖がるであろう場面ですら笑顔を絶やさない。

だが、

「うう…… もうこやか……」

俺の主は、半泣きで必死に画面から田を逸らしていくのだが。

俺は小娘と木乃香と共にいる所をあまり見ない。

いや、木乃香の方はなんだかんだと理由をつけて小娘と一緒に遊ぼうとする。

しかし、小娘が適当な言い訳を出して断つてしまつのだ。明らかに用事がなくとも。

小娘の寝言や、影で飛び交う噂話から判断するに、どうやら以前木乃香が川で溺れた時に、小娘が助けることができなかつたらしく。その体験から、普通に接することに戸惑感を抱いていた、といったところか。

(馬鹿かお前は……)

気がつかないのか？

お前が誘いを断る度に、木乃香が悲しそうな顔をしてくることに。

最近では、お前に話しかけることにすら勇気を振り絞つてこられることが多い。

お前のその態度が、何よりも木乃香の心を傷つけているらしい。

「あ、またあの幽霊が出てきた」

今日こうして一緒に映画を見ることも、木乃香が強引に約束を取り付けたからだ。

周りの大人们の話を盗み聞くに、どうやら木乃香は転校を控えてい
るらしい。

その前にできるだけ、たくさん思い出を作りたいという考え方の現れなのだろう。

「うふふ、怯えるせつちゃんもかわえーなー」

……多少、趣味が歪んでいるかもしないが。

「すう…………すう…………」

『…………暑い』

現在、俺は寝ている小娘に抱き枕のようにしがみつかれていた。

別に、寝ている時に何かに抱きつく癖があつても俺は気にしないが、その対象が刀とあつては流石に呆れざるをえない。

といふか、そんな所を誰かに見られたらどうするつもりだ、この小娘は。

『つたぐ、布団を蹴飛ばすな。腹を冷やすぞ』

「つたぐ…………」

俺の忠告を右から左に聞き流し、小娘は寝返りをつつ。

俺の声は、誰にも届かない。

禁術とされる鬼道をしたことにより、体の全てが消失。

魂だけギリギリ残つたものの、意識があるだけで何もできやしない。

刀を自分で動かすことなどできないし、ましてや声すら出せない。

今の俺は、正しく抜け殻だ。

力は無いし、理想も叶えてしまつた。

もう俺には人を救う力など残つてはいらないのに、どうして意識だけ残つてしまつたのかと、考えることもあつた。

「ぐり……むにゅ……」

そんな考えが変わってきたのは、つい最近のこと。

（もへ、この小娘が刀を託されてから三年か……）

どちらかといつと、短かったと思える。

この小娘の起こす行動にはハラハラせられっぱなしだった。

神鳴流の修行は苦しい。

基礎訓練をしている風景を眺めでは、いつ諦めるのかとボンヤリ考えていた。

しかし、コイツは耐えた。

大の大人ですから音を上げるような苦行にもついていった。

その光景を見て、頑張れ、と思つよくなつたのはいつ頃だつただろうか。

過去に思いを馳せていると、急に小娘が苦しそうな声を上げた。

「いの、ちやん……」

《…》

きっと、木乃香を助けられなかつた時のことを見ているのだろう。

寝息は乱れ、顔は苦渋に染まつていく。

見ている方が苦しくなるような表情だった。

だが、

「次は……絶対守るから……」

『……』

思わずため息をつく。

もしも俺に口が残っていたならば、きっと苦笑が浮かんでいただろう。

『まったくコイツは……』

『うひっひーいひー、放つておけないのかね。』

俺の意識が残った理由。

それはまだ分からぬ。

しかしその鍵は、ひょっとしたらこの小娘が握っているのかも知れない、俺は思った。

外伝四（後書き）

文がグダグダ……

少し更新に間が開くかもしれません。

第三話（前書き）

戦闘シーンですが……すみません、それまでいくつか話を挟みそう
です。

第二話

『君臨者よ！ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ…』

大和の詠唱が、糸を通じて刹那の頭に響いた。

刹那は緊張を深呼吸で誤魔化す。

これから行う行為はタイミングが命だ。その一瞬を逃す訳にはいかない。

『焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ…』

今だ、小娘！

手に持つた刀、『大和』から意思が流れ込む。

刹那は自身の出せる最大限の気を刀に叩き込み、叫んだ。

「破道の三十一 赤火砲！」

緋色に染まつた刀身から、勢い良く氣弾が飛び出す。

凄まじい速度で射出されたそれは、赤い残光の尾を引いて滝に直撃。

一瞬で大量の水を蒸発させた。

「できた……」

『まあこんなもんか』

「す、凄いです大和さん！ ウチが三十番台の鬼道を使えるなんて、感動しました！」

大和と刹那が初めて会話した日から二日。

現在、二人はいつもの修行場所で『大和』の能力を検証していた。

『使えたって言つても、俺が詠唱やらなんやらを全て肩代わりして
でだろ。お前は気を消費しただけだらうが』

「それでもです！」

『……まあいいが、最終的にはお前だけで鬼道を使えるよ！になつ
てもううまい』

「ええ！？ そ、そんな！」

『確かに俺が詠唱を引き受けることは可能だが、常に俺がお前の側
にいるとは限らない。それにお前自身が鬼道を理解すれば、威力を
上げたり気の消費を減らすことにも繋がる』

「うう……詠唱がややこしくて覚えられません……」

『十分で覚える』

「そんなあ……」

この三日間、大和は刹那の剣の指導をする傍ら、自分にどいまでの
力があるか調べていた。

刀と化し、戦闘力は激減してしまったが、敵がそれを考慮してくれ
るはずがない。

そして今の刹那では木乃香を守るビームが、足手纏いになるのは明白だ。

今の自分にはどれだけの手札があるか、それを確かめることは最優先事項である。

（鬼道は小娘の気を流用すれば使える。だが今の小娘の気の量じゃ心もとない。クソッ、俺が自分で気を生成できたら……）

現在の大和は自らで気を生み出すことができない。

生命力の源たる身体が存在しないのだから当然だった。

しかし、大和の戦闘方法のほとんどが気に依存している。

事実上、今の大和が単独で戦うのは不可能だった。

（だが、このままの小娘で通用するほど甘くはない。残る可能性と言えば斬魄刀だけだが……）

「あ、あの、大和さん。一応覚えられたと思つんですけど」

《ん、ああ。ならやつてみせろ》

「あんなのやれと言われても……」

《こきなつさつきほどの威力は求めていない。まずは照明に使える

ほどの球体をイメージしろ》

「は、はーっ」

刹那は口を閉じ、大きく深呼吸する。

そして息を吸い込んだ瞬間、口を開けて叫んだ。

「君臨者よー 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒートの名を冠しゆ者よー！」

《……》

「あ、あれ？」

《……まづは、滑舌の訓練が必要か》

『この場所は、何年経っても変わらないんだな』

「え？」

休憩のために、河原の石に座り込む刹那に大和の声が届く。

「ひょっとして、大和さんもこの場所で修行したことがあるんですね
か？」

『ん……まあな』

滝と川、河原と森。

記憶の中にある景色とほとんど変わらない。

仲間達と共に修行し、共に遊んだ場所のままだった。

刀子と初めて出会った場所もあるこの地を、感慨深く眺める。

『もつ十数年も昔の話だ。お前が気にするじじじゃない』

「……」

『どうした?』

「あ、あのっ」

刹那は何かを決意するよつた顔をすると、大和に向かって声を張り上げた。

「大和さんの昔のことを、聞かせてはもらひませんか!?」

『……急に何だよ』

「ウチはもつと貴方のことを知りたいんです! だってウチは大和さんのこと何も知らんし、精々知つてることといつたら長の友達だったことぐりいしか……」

どんどん声が小さくなつていく刹那。

「そ、それに大和さんがウチのことなんでも知つてゐるのに、不公平やないですか!」

『それが本音か』

「え？ あ、いや、その」

『それに、テンパると京都弁になるのも相変わらずだな』

「ええ！？ ウチ、またやつてもうたん！？」

『ほり見ろ』

「あ……」

刹那は恥ずかしそうに顔を下に向ける。

それを見た大和はため息を一つ。

『別に隠すつもりもない。何が聞きたいんだ』

「え……聞いてもええんですか？」

『構わないと言つていろ』

「なら、えつと……あれ、ウチ何を聞こうとしてたんやっけ」

『……』

視線は感じずとも、大和の雰囲気を察することはできるよつて、刹
那は焦る。

「す、すみません今思い出しました！」と
りあえず大和さんの苗字
が知りたいです！」

五木

「え？」

『だから、五木だつての』

五木、という苗字が理解できるにつれ、刹那の頭は回転を始める。

五木大和

この総本山に於いて、高い地位を誇る五木家の嫡男。

十数年前に、
関西をたった一人で西洋魔術師から守り抜いた英雄の
名前。

一人で百人の魔法使いを打倒したという話は余りにも有名で、知らぬ者はいない。

その戦いの際に行方不明とされた彼は、関西にとつて伝説の存在だつた。

『なんか、前にもこんなアクションあつたな』

『へえ……関西では俺はそんな扱いになつてんのか』

「ま、まさか憧れの英雄に会えるなんて……」

トリップしている刹那を横目に、大和は考えを巡らす。

(脱走した裏切り者とするより、英雄に祭り上げることによつて五

木家の地位向上を図つたが。あのジジイの企みそな手だ)

『それにしても小娘。五木元蔵が死去したといつ話は本当か?』

「あ、はい。確か十年ほど昔のことだったはずですけど」

『……そうか』

五木元蔵。

かつて大和を戦場へと送り出した張本人。

少なくとも好いてはいなかつた。

大和の生き方を決めつけ、刀子を人質にとり、人を殺すことを強いた。

だが……憎んでいるかと言われば、返答に迷う。

元蔵は家の五木家の地位を上げることにしか興味を示さなかつた。

幼い大和が折り紙の鶴を元蔵にあげた時も、結局は翌日の「ゴミ箱に入つていたのを見つけた。

大和が戦闘に類い稀な才能を見せると、元蔵は初めて笑顔を作つたが、恐らくはその笑顔の裏で大和の力をどう利用しようか考えていたのだろう。

何が元蔵をそこまで駆り立てたのか、大和は知らない。

理由を知つたところで過去の事実は消えないし、大和も許す気はない。

ただ、

(一度だけでも、本心で話し合いたかったな……)

奇妙な虚無感と共に、大和はそう思つた。

「大和さん？」

《ん、どうした》

「いえ……なんだか、その、悲しいという思いが伝わってきたよ
な……」

『……悲しい?』

「はい」

『そうか……悲しい、か』

そうか、と大和はもう一度呟く。

それから数分は、二人とも言葉を発しなかった。

沈黙を滝の音が流していく。

その日、大和は肉親を亡くしたことを知り、悲しみの感情を知
つた。

第四話（前書き）

超説明回。

独自設定山盛りです。

初めて予約投稿をしてみました。

第四話

「お願いします！ 私に斬魄刀を教えてください！」

『……はあ？』

大和の素性を知った刹那は、刀を相手に土下座するところ[宗教じみた行為をしていました。

まるで祭壇のように岩の上に置かれている大和としては戸惑うしかない。

『おい小娘、いきなりどうした』

「歴史の長い五木家の中で、最強と言われる大和さんに斬魄刀を教わることができるば、木乃香お嬢様をお守りすることも可能と思いました！」

不退転の覚悟を決めた瞳で大和を見上げる。

今の刹那の力では、精々野生の獣を相手にすることはできるぐらいだ。

木乃香を狙う暗殺者はおろか、そいつの見習いにすら勝てるか疑問である。

しかし、あの五木大和から直々に斬魄刀を学ぶことができれば、今
の自分でもある程度は通用するかもしれない。

刹那はそう考えた。

「斬魄刀戦術は五木家の秘伝であることを承知の上で、お願ひしま
す。私にはもう、これしか……」

そうつ言って、刹那はより一層深く頭を下げる。

『……とりあえず頭を上げる。そんな調子じや話もできん』

「は、はいっ」

刹那が正座の形になつたことを確認して、大和は話し出す。

『まず誤解の無いように言つておくが……斬魄刀はお前が思つてい
るほど使い勝手のいいものじゃない』

「え？」

『斬魄刀を使用するには、まず精神世界で本体を屈服させる必要が
ある。それだけでも並の人間では一苦労だ。しかも、戦闘時の能力
は斬魄刀の機嫌によつて左右される』

「斬魄刀の機嫌……ですか？」

『ああ。斬魄刀には意思があり、機嫌もある。ヤツらが使い手に同調しなければ戦闘能力は大きく落ちるんだよ』

刹那は初めて聞く斬魄刀の秘密に驚いた。

関西の人間が抱く斬魄刀のイメージといえば、その多様性と攻撃力だ。

直接的に攻撃する斬魄刀もあれば、火や水といった自然現象を操るものも存在する。

そしてそれらの殆どが一般的な術者達よりも高い戦闘力を持つているのだ。

斬魄刀こそが関西において最強の戦闘方法だ、といつ意見も少なくない。

しかし、現実的にはそんなことはなかつたりする。

斬魄刀は持ち主を選ぶ。

たとえ斬魄刀を屈服させるほどの実力があるつと、本体に気に入られでなければ力は半減する。

無論、気に入られていれば限界以上に力を引き出すことも可能だが、そんな人間は滅多にいない。

基本的に斬魄刀の精神は捻くれており、歪んだ人間を好むという性質があるのだ。

反対に、神鳴流ほど安定して戦える戦術はない。

これが斬魄刀の使い手が少なく、そして神鳴流が広く伝わっている理由だ。

大和はそれらの理由を刹那に説明する。

『確かに斬魄刀は強いが、それ以上に不安定だ。今のお前には神鳴流の方が相応しいはず』

「そうですか……」

『逆に、適合率が高ければ限界以上に力を貸してくれることもあるんだけどな。そんなヤツは見たことがない』

大和の言葉を聞き、刹那は顔を俯ける。

木乃香を守るためには力が必要だが、自分の力を制御できない護衛など百害あって一利なしだ。

大和のように完璧に斬魄刀を操るようになるまで、どのぐらいの時

間を費やさなければならないのだらうか。

それを考慮すると、確かに神鳴流の方が自分には合っている気がした。

しかし、

『付け加えるなら、俺はほとんどの斬魄刀に嫌われている』

「え……？」

大和の眩きに、刹那は固まつた。

「え、そんな、あの大和さんが斬魄刀が嫌われるなんて、嘘です
よね？」

『事実だ。俺は斬魄刀の力を完全には引き出せていない』

「ええええええ！？」

五木大和と言えば、歴代で最も優れた斬魄刀の使い手として有名だ。その大和が斬魄刀に嫌われているという情報は刹那に大きい衝撃を与えた。

『あいつらは基本的に快楽主義者だからな。人助けのために力を振るう俺は、面白みに欠けるんだとよ』

「でも、大和さんは自由自在に斬魄刀を使っていた、つて……」

『それは俺が斬魄刀を屈服させて、無理やり力を引き出していただけだ。本当に適合率が高ければ身に付けている装束が変化したりする。一回も経験したことはないが』

「ウチの英雄に対するイメージが崩れていきます……」

『真実なんてそんなもんだ』

憧れの英雄の思わず真実を知り、刹那はへこんだ。

『符を使うという手もあるが……近衛家のよつな魔力も能力も無いお前では、補助に使うのが関の山か』

「近衛家の能力、ですか？ このちゃ……お嬢様に凄まじい魔力があるのは知っていますが、それ以外にも何かあるのですか？」

『ああ。近衛家は先天的に魔力が多い家系だが、それだけじゃない。

近衛の血は『招喚』に特化している』

「『招喚』……？」

『式神に使う、いわゆる鬼などの異形を呼び寄せやすい体質だということだ。近衛家の血を使えば、それこそ『リョウメンスクナ』でも呼び出すことができるだろ？』

近衛家の血には豊富な魔力の他に、異形をこの世につなぎ止める力を持つている。

一般的な術者が鬼を呼び出すのに必要な魔力を百とする時、近衛の者であれば一の魔力で済む。

勿論、呼び出すことだけで、使役するとなればまた別の話なのだが。

しかし、その血族にのみ伝わる力は青山家とも五木家とも一線を画する。

神鳴流は、本当は近衛家を守護するために生まれたという説があるほどに。

「あの、質問があります」

『何だ』

「『リョウメンスクナ』って、なんですか？」

『……とても強い鬼、とでも覚えておけ』

脱線した話を戻すために、大和は一つ咳払い。

『そんなわけで、地力を上げるには神鳴流が最適なんだが……俺は神鳴流を会得していない』

「え、そなんですか？」

数多い大和の逸話の中で、その圧倒的なまでの戦闘センスが挙げられる。

剣術にせよ鬼道にせよ、初歩ならば見るだけで習得してしまう、といふものだ。

そしてそれは事実であり、大和も斬岩剣くらいなら余裕で使える。

しかし、それはあくまでも我流。洗練された型ではない。

大和の力を知った青山家はその才能を恐れ、神鳴流を習うことを禁じたのだ。

『あとは自分達の土俵である神鳴流で抜かされるのを恐れたとか、そんなんだろ。メンツの問題つてやつだ』

「なるほど」

『で、お前に神鳴流を教えるには、他の誰かに頼む必要があるわけだが……今のお前の立場じゃ、それもままならんか』

「うへ……すみません」

『責めてないっての。誰かお前に神鳴流を教えてくれそうな人に心当たりは無いのか?』

大和の問いに、刹那は必死に考える。

「長……はやつぱりダメですよね」

『そりや、あの人も忙しいだろ?しな』

「あ、そういえば」

『心当たりがあるのか?』

「長がこの前言っていたのを思い出しました。つい最近になつて、長期の出張から帰ってきた神鳴流の人にお嬢様の護衛をしてもらつている、と」

『へえ……強いのか?』

「自分がかなりの信用を置いている、とも話していました」

『それなら試してみる価値はあるな。そいつの名前は?』

「確かに、葛葉刀子っていう人だつたはずです」

第四話（後書き）

次こそ刀子さんのターンのはず。

第五話（前書き）

シリアルスガ難しい……

あの人気が消えてから、どれ程の時が過ぎただろうか。

私は未だに彼を待ち続けている。

鶴子も素子ちゃんも、あの場所には集まらなくなってしまった。

あの日々を思い出すのが辛いのだ。私だってそうだ。

でも私は今でもあの場所に通っている。

そして待ち続けるのだ。

彼が滝の上から声をかけてくるのを。

『こんな所でびひしたの?』と、いつもの声で呼びかけてくるのを。

でも、彼は帰つてこなかつた。

代わりに帰つてきたのは、一本の刀だけ。

その刀を見た瞬間、彼にあの場所で言われたことを思い出した。

僕が英雄になつたら、刀子ちゃんも守つてみせるよ。

……嘘つき。

刹那と大和は、現在刀子が留まっているといつ近衛の屋敷まで来て
いた。

護衛という任務の関係上、木乃香の近くに控えているのだろう。

埃一つ無い廊下を歩きながら、刹那は大和に問いかける。

「大和さん、さつきから何も喋つてないんですけど……どうかしましたか？」

『……いや、何でもない』

「……」

『……』

あの場所で葛葉刀子の名前を出してから、大和はずつとこの調子である。

幼い刹那にも、大和の様子がおかしいところとは察せられた。

刹那は何故こうなったのか、自分なりの推論を組み立てていく。

（葛葉刀子っていう人の話になつてから大和さんの様子がおかしくなつたから……やっぱり知り合いなんやろうな……）

葛葉刀子という人物は長からの信頼も厚いらしい。

ということは、長の友人である大和さんとも知り合いであってもおかしくない。

そこまでは刹那にもわかつたが、問題はどういった知り合いであるか、ということだ。

(……恋人、とかやつたりするんやろか)

刹那にはその推測が一番的を得て『いる』ように思えた。

というより、それ以外思いつかない。

無意識に腰に差した『大和』を強く握る。

結局一人とも終始無言のまま、刀子がいるという部屋の前にたどり着いた。

刹那は大きく深呼吸を一つ。

「失礼します」

「…………」

短いやり取りの後、刹那はゆっくりと襖を開ける。

その部屋の中で、葛葉刀子は正座をして瞑目していた。

「お入りなさい」

「は、はいっ」

部屋の中に入り、襖を閉める。

部屋の中に私物はほとんどなく、生活感が感じられなかつた。

刀子の物とわかるものは、正座している本人の横に置いてある一本の刀だけ。

刹那が部屋に満ちた雰囲気に呑まれていると、刀子がゆっくりと皿を見開いた。

「桜咲刹那、ですね」

「あ、はい」

「長から話は聞いています。そこへお座りなさい」

刀子は刹那を対面の座布団に促す。

刹那は緊張でカチコチになりながらも、刀子の前に座つた。

「は、初めまして、桜咲刹那と申します。えっと、この度は葛葉さ

んにお願いがあつて参りました

刹那は拙い敬語を使って必死に話す。

刀子はそれを身動き一つすることなく聞いていた。

「……なるほど、私に神鳴流を教わりたいと、そういうことですね？」

「はい、お願いします！」

刀子は再び口を開じる。

しばらく一人の間に沈黙が下りた。

「……基礎訓練は終えているのですか？」

「え、あ、はい」

「ならば、お嬢様の護衛に差支えの無い範囲で二つの条件で、指導しましょ♪」

「本当ですか！？」

刹那にその条件に対しても不満はない。

といつより、自分から頼もうとしていたぐらいだ。

修行をつけてもらえるのはありがたいが、それで木乃香の護衛がおろそかになつては本末転倒である。

「ありがとうございます！」

「いえ」

頭を深く下げる刹那と、あまり興味の無さそうな刀子の姿は対照的だった。

修行の同意を得たことに喜ぶ刹那だったが、ここでさつきの疑問が再び浮かび上がる。

それは、目の前の麗人と大和との関係性。

立ち居振る舞いや（立つていないう）、雰囲気からでも刀子が強いといふことはわかる。

さらばに言えば、刀子は刹那が今まで見た中でも指折りの美しさだ。とても長と同年代とは思えない。

そのような人物とどういった関係なのか、刹那の中に強い興味が湧いた。

しかし、こぞ聞ひつとしひふと氣付く。

聞いて、答えてもらひたとして、そこからどうする？

もし恋人だつたと答えられたならば、それは大和を傷つけるだけではないのか？

刹那の頭の中でグルグルと疑問が渦巻く。

聞くべきか、聞かざるべきか、一つの間をせ迷う。

そして、気が付けば刹那は

「あの」

口を開き、

「Iの刀の前の持ち主と、どういった関係なのですか？」

目の前の女性に聞いていた。

「……」

『……』

刀子は答えない。

大和もまた、何も語らない。

ただ、刀子の返事を待っていることは察せられた。

しばらくの間、沈黙が場を支配する。

そして、刀子はおもむろに口を開き

「 そんな刀、知りません」

その表情を見て、刹那は理解する。

ああ、やはり、この人と大和さんは親しい間柄だつたのだと。

なぜならば、問い合わせる時の刀子の表情が、鳥族の里を追放された時の刹那の表情とまったく一緒だったから。

絶望に打ちのめされ、救いなどどこにも無いと告げられた表情。

全てを諦めた表情。

救いを諦めた表情。

それなのに、心のどこかで希望を捨てきれない表情。

その全ての表情に、刹那は覚えがあった。

『小娘……もういい……』

大和の絞り出すような声。

それを聞いて刹那はハツとした。

「 申し訳、ありません」

失礼しましたと言つて、刹那は刀子の私室を後にする。

部屋の襖を閉める際に見えた、刀子の顔。

まるで、泣き出しそうな子供の顔。

それが、深く頭にこびりついて離れなかつた。

廊下を引き返しながら、刹那は謝り続けた。

「大和さん……すみません、私……」

『いいんだ、気にするな』

悪いのは俺だから、という言葉を言いかけてやめる。

刀子があれほど苦しんでいたことに気が付けなかつた自分が言つていい台詞ではない。

自分がこの場所を去つてから、もう一十年近く時が流れている。

（やがて、とうとう連れられていふと思つていた……）

別れすら皆さうに済めた男のことなど。

一本の刀だけを残して、帰つてこなかつた男のことなど。

もう既に、忘れ去っているものとばかり思っていた。

自分の過去に後悔があるわけではない。

全てを失うことを見悟して、あの鬼道を使つたのだ。

もしもあの時に戻れるとしても、また同じ選択をするだろう。

自らの夢を叶えるために。

でも、部屋を出る際の刀子の表情が、大和の脳裏に焼き付いて消え
なかつた

「まったく、戦力を整えるのに、これほどの時間がかかるとはな……」
「そのせいで葛葉刀子が帰還してしまったではないか」

「まあまあ、いじじゃないですか狩谷さん。彼女の相手は僕がする
んですから」

「勝てる勝てないの問題ではない。できる限り不確定要素を増やし
たくないのだ」

「まったく……わざこう所はシジアですよね、狩谷さんって。強い

くせに「

「お前が大雑把なだけだろ、う」

「（）もつとも」

京都には多数の派閥がある。

それらの派閥は主に、関東との関係をどうするか、という方針の違いから反発しあっている。

現在は詠春の属する『稳健派』が主流であるが、もちろんその反対も存在する。

それがいわゆる『强硬派』と呼ばれる者達だ。

そして、その『强硬派』の一派が使用している集会所にて、二人の男が向かい合っている。

一人は三、四十代の厳めしい顔をした男。

そしてもう一人は二十代半ばの優男である。

狩谷と呼ばれた厳めしい顔をした男は、優男に向かつて告げる。

「本当に信じていいいのだろうな？　お前がどれだけ葛葉刀子を引き

つけられるかが、今回の謀反の肝なのだが、「

「酷いなあ。僕は負ける」ことが前提なんですか？」

優男は少年のよつに笑う。

そのルックスと相まって、非常に様になる笑顔だった。

だが、

「 大丈夫ですよ。僕はあの女を斬り殺すために、今回の謀反に参加するんですから」

優男の雰囲気が一変する。

女性を虜をするよつな笑顔は、獲物をどうやって狩るか、という残酷な笑顔に。

「 あんなカスみたいな家の出のくせして斬魄刀を使う、あの女は許せないんですよ。だから僕の心配は無用。手出しも無用です」

「……そりゃ」

「狩谷さんこそ失敗しないでくださいよ？ 貴方が長の娘を手に入れなければ全ては水の泡です。彼女さえ拉致してしまえば、あの甘い長はこちらの言つがままでしょうし」

「言われるまでもない」

狩谷と呼ばれた男は踵を返し、集会所の外へと向かつ。

優男もそれに追従した。

「今回の謀反、必ず成功させるぞ。『五木葉一』」

「ははは、相変わらず狩谷さんは硬いなあ。そんなに心配しなくても大丈夫ですって」

五木の名を冠する男は笑う。

笑顔の端に、狂氣を乗せて。

第五話（後書き）

そろそろ戦闘の予感。

「へー、ここのがせつちゃんの修行してる場所なんやー。スゴイ滝やなー」

「ここのちや……お嬢様、あんまり水辺には近づかないでください。昔のようなことがあれば、私は……」

「大丈夫やえ、ここから眺めるだけやから」

その日、いつもの修行場所には近衛木乃香の姿があった。

現在、木乃香は大きめの岩の上に座り、周囲の風景を物珍しげに見ている。

刹那はそんな木乃香をハラハラしながら見守っていた。

どうしてこんな状況になっているかと言つと、それは今朝の朝食後にまで遡る。

いつものように修行に向かおうとした刹那の前に、木乃香が現れた。

話を聞けば、刹那の修行風景が見たいと言つ。

刹那は修行は遊びではない、と言つて断つとするのだが、木乃香も譲らなかった。

木乃香は一週間後、麻帆良の小学校に転校する。

日本でも有数の靈地であり、関東魔法協会の本拠地でもある場所だ。祖父である近衛近右衛門に預けることで木乃香の身の安全を守るという目的もあるが、どちらかというと人質としての意味合いの方が強い。

かつて大和が西洋魔法使いを打ち破ったとはいえ、その大和も今は存在せず、そもそも本国からいくらでも兵士の補給は可能だ。

まともに戦えば、関西が負けるのは目に見えている。

人質として麻帆良へと行ってしまえば、そう簡単には京都に帰れなくなってしまう。

それを木乃香は周りの雰囲気から察したようで、最近は刹那に特に構うようになった。

麻帆良に行く前に、刹那との思い出を作つておきたいのだろう。断りうとすれば涙目になる始末だ。

そして刹那に逃げ道はなく、結局同行を許してしまった。

(すぐ近くに刀子も隠れているし、問題はないか……一人はまつた
く気づいていないようだが)

「それじゃあ今から素振りをしますけど、その間は危ないので近寄
らないで下さいね」

「うふ、わかつとるよ」

岩の上に座る木乃香は、初めて見る刹那の修行風景に田を輝かせて
いる。

その期待の視線を受けている刹那は居心地が悪そうだが。

『小娘、木乃香を意識しすぎだ。体に力が入りすぎている』

「は、はい」

「どうしたん、せつちゃん？」

「え？ あー、えっと、なんでもないです！」

『……忘れていたが、人のいるところに俺に話しかけたら痛い子にな
るぞ』

(先に言つてください)

これは念話も習得させる必要があるな、と大和は思った。

「周囲に異常は無し……と。桜咲も剣の才はあるようですが、私にまつたく気づかないというのは少し問題ですね」

葛葉刀子は滝の上から刹那と木乃香を見下ろしていた。

それはもちろん木乃香の護衛のためだ。

あまり縛られるのを好まない木乃香は護衛の人間を撒くことが度々あり、こつして隠れるように見守っているのである。

とはいって、友達と遊ぶ時に大人が近くにいたら、誰でも嫌だらうが。

「……それにもしても、この場所で修行していたとは……」

刀子は滝の下にいる一人に目を向ける。

一生懸命に剣を振る刹那と、それを見守る木乃香。

その一人の姿は、かつての自分達に重なつて

刀子はそこで思考を打ち切る。

自分に襲いかかる様々な負の感情を、我慢するのではなく、考えないようにする。

それこそが刀子が過去を乗り切るための、唯一の方法だった。

(この場所には、あまり来たくない……)

刀子は近くの木に背をもたれさせ、ため息をついた。

ここに来ると、自分が何を失ったのかをはつきりと突きつけられる。

だから大和が…………ことを知つてからは、一度もここには来なくなつた。

(もうやめよ……彼のことを考えるのは……)

刀子は思考を切り替えて、一人を見張る作業に戻った。

刹那は拙いながらも、一通りの型を木乃香に披露しようとしているようだつた。

もちろん刀子から見ればまだまだ隙だらけではあるものの、刹那の年齢を考えれば十分だろう。

詠春に『少しでいいから気にかけてやってくれないか』と言われたので、取り敢えず稽古を見るつもりではいたのだが、これは想像以上に教えがいがありそうだ。

（ふむ……強いていうならば、少し重心が高いのが気になりますね……）

刹那の修行をつけることになれば、そこを注意しようと考へる。

だが、ここで刀子の予想を裏切る光景が目に入った。

（重心が下がつた……？）

眼下にいる刹那の剣を振る様子が、急に改善されたのだ。

偶然かと思い、しばらく刹那を見ていたのだが、刹那は明らかに身

体の重心を意識して剣を振つてゐる。

まるで、誰かの忠告を聞いたかのように。

疑問に思う刀子だったが、それよりも優先すべき事項が出現した。

誰かがこの場所に近づいている。

気を使って移動しているのか、一般人に出せるスピードではない。

自らに与えられた役割を鑑みて、即座に刀子は戦闘体勢に入った。

出現した気配は真っ直ぐに刀子に向かつてきている。

気を隠す様子がないことから木乃香を狙う暗殺者の線は薄いが、それでも油断はできない。

数分後、木々の奥から一人分の人影が現れた。

刀子は身構えるが、その人影は両手をひらひらさせながら歩いてくる。

敵対心の無いことを示す仕草だが、刀子は油断をしない。不意打ち

をしてくる可能性もある。

だが、気軽に挨拶をしてきたのは流石に予想外だった。

「やあどうも、葛葉刀子さんですよ？」

その男を見て、刀子は訝しげに眉を潜めた。

「貴方は……五木、葉一さん？」

刀子の前に現れた優男の名前は、五木葉一。

大和の従兄弟に当たり、斬魄刀操る術に長け、将来を期待されている男だ。

人当たりも良いので、人望も厚い。

まさに好青年を絵に書いたような男だった。

ただ、常に浮かべている微笑が不吉なものに思え、刀子はこれまで関わらないようにしていたのだが。

「なぜこんな場所にいるのですか。ここは立ち入り禁止区域ですよ」

「ははは、それを言つたら葛葉さんもじやないです」

「私は木乃香お嬢様の護衛としてここにいます。それよりも質問に答えて下さい」

「うーん、つれないなあ……僕何か葛葉さん嫌われるようなことしました?」

「いいから、質問に答えなさい」

詰問する刀子に対し、葉一は余裕の態度を崩さない。

「本題に入りますが、僕は長からの伝言を預かつてきましたよ」

「長からの伝言……?」

「ええ、これからは僕が木乃香お嬢様の護衛を務めます。貴方は至急本殿にまで戻るよう、と」

その言葉を聞いて、刀子は耳を疑つた。

「そのような話、私は一言も聞いておりませんが

「僕にそう言われても困るんですけどね。緊急事態のようでしたしことにかくこには僕に任せて、早く戻ったほうがいいですよ~。」

そう言られて、刀子は少しだけ考える。

しかし、すぐに結論は出た。

「 いえ、私はここに残ります」

「……へえ、長の命令に背くのですか？」

「なにか緊急事態が起きているのであれば、尚更お嬢様の側を離れるわけにいきません」

以前、刀子が長期の出張任務から帰ってきた時、詠春は言つたのだ。

刀子君がいる間は、一番信頼できる君に木乃香を任せたい、と。

その詠春が、木乃香を別の人間に任せた帰還せよ、などと云つのは
考えにくい。

詠春の言葉との得体のしれない男の言葉、どうひき信じるかと聞
かれれば、言つまでもなく前者だ。

その刀子の様子を見た葉一は苦笑する。

「僕の言葉は信じられませんか？」

「僕の言葉と比べれば」

「ひどいなあ」

葉一はせして気にした風でもなく笑う。

そして、おもむろに懐から一通の封書を取り出した。

「やう言わるると思い、僕は長から直筆の手紙を預かってきていま
す」

「手紙？」

「ええ。これなら貴方も納得して下さると思いますが

葉一は封書を刀子に差し出す。

「とつあえず、これを読んでから判断してもいいのでは？」

葉一の言ひ事にも一利ある。

訝しみながらもそれを受け取り、刀子は開封した。

中には一枚の紙が入つており、刀子はそれを取り出して読もうとする。

しかし、紙を取り出した瞬間、絶句した。

中に入つていた紙に書かれていたのは詠春の文字ではなく、五芒星と奇怪な文字の羅列。

それは刀子も何度か見たことがある代物。

転移魔法符！

咄嗟に手放そうとするが、もう既に手遅れ。

封書から符を出した時から、発光を始めている。

自分の迂闊さを恨むと同時に、刀子はその場から飛ばされた。

「今頃、木乃香は刹那君と遊んでいるのだろうか……」

近衛詠春は自室で書類にサインをしながら、そうぼやいた。

正座している詠春の前にある机には、既にサインが書かれた書類が山のように積み上がっている。

仕事が一段落し、気が緩んだ詠春は愛娘のことを考えた。

詠春は、木乃香のことを目に入れても痛くないほどに溺愛している。
だから、それ故に迷う。

木乃香に魔法の存在を教えるか否かを。

関西呪術協会の長の一人娘である木乃香の立場は、いつまでも表の世界で暮らすことを許さないだろう。

それ以前に、木乃香は生まれ持った魔力が膨大すぎる。

近衛家の血に籠められた性質もまた、木乃香が狙われる要素となる。

本当は、今すぐにでも魔法のことを教えるべきなのだ。

いずれこの世界のことを知るとしても、早くから修行をしていれば、

その分かなりのアドバンテージになる。

場当たり的に魔法を知ることは非常に危険だ。

理性は早く魔法を教えるべきだ、と告げている。

しかし、親としての詠春は、木乃香に血生臭い世界など知つてほしくない。

幾度となく繰り返した自問自答。

そして、その問い合わせに結論が出る前に、詠春が気付く。

「静かすぎる……？」

屋敷から音が消えていた。

詠春の部屋は近衛の屋敷の中でも奥まった場所にあるのだが、それでも気配をまったく感じないと、こののは普段からしてありえない。

「！」の時間帯ならば、誰かが掃除でもしているはずだが……

詠春は数秒考え、立ち上がる。

その際に、背中でボキボキと小意味い音がして苦笑した。

自分の部屋を出て、少し歩く。

やはり誰とも会わなかつた。

人の気配を探しながら歩き続けている内に、ヒツヒツ縁側にまたがり着いた。

散歩がてら誰かを探してみるか、と考えて、詠春は外に出るためのスリッパを履く。

そして、上空からの殺氣を感じてその場を飛び退くと同時に、

今までいた縁側が破壊された。

「つ、誰だッ！」

「お、これを避けるとは、やつぱり関西の長なだけあるやないか」

詠春は転がって体勢を立て直し、そして縁側を破壊したものを見て息を呑む。

そこにいたのは人としての姿を大きく逸脱した者。

いわゆる、鬼と呼ばれる者の姿だった。

「式神か！？」

「そうこうひっちゃ。依頼主との契約につき、アンタを痛めつけさせてもうひで」

「誰の差し金だ！」

「そりゃや蝶の」とはできんわ。ワイらもただ雇われただけやしなあ

鬼はそう囁くが、式神が使われている時点で十中八九、関西呪術協会の誰かだろ？

それならば総本山の結界に反応しなかつたのも頷ける。

そう、これは協会内の人間による謀反なのだ。

詠春は懐から一枚の符を取り出し、破いた。

直ぐ側に空間の歪みが生じ、そこに手を突っ込んで斬月を抜き取る。

あまりに巨大すぎる斬月を持ち運ぶための術だ。

斬月を鬼に向けて構える。

「貴様のよつたな鬼一体で私を討ち取らうとは、舐められたものだ」

「いや、アンタが強いこと知ってるで？ サムライマスター言つたら有名やし」

「はは、まさか鬼に評価される時が来よつとは」

十数年も書類仕事を続け、詠春の腕は鈍りきつている。

しかし、鬼一匹を倒すことぐらい造作もない。

詠春は斬月で鬼を両断しそうとして一歩を踏み出し、そこで踏みとどまつた。

「この鬼の余裕はなんだ？」

「ヤニヤと笑う鬼。」

それを見て、詠春は冷静になる。

そして思い出すのは先程の会話。

「イーもただ雇われただけやしなあ。

「まさか……」

「察しのええ人間やな」

詠春は鬼から視線をずらし、屋敷の屋根を見る。

そこにいたのは、鬼の群れ、いや、軍勢と呼べるほどの鬼の集団だった。

「本当は一対多ってのは氣に食わんけどな。依頼主からの命令やら勘弁してくれや」

視界を埋めつくれるとあるほどいの鬼達を見て、詠春は思つ。

無事でいてくれ、木乃香……！

「せつちやんす」こー ゃつきのビュホオヒヤツ、モツ一回やつてー！」

「は、はいっ！」

『……はあ』

一通り型を終えた刹那を待っていたのは、木乃香からの溢れんばかりの賞賛だった。

三年前、川で溺れる事故があつてから木乃香を避けてきたものの、大好きであることには変わりがない。

木乃香に褒められて、刹那の顔は緩みっぱなしだった。

木和はそんな刹那を見てため息をつく。

『おい小娘、木乃香は一般人だぞ。お前の動きが凄く見えるのは当然だ。それで気を良くしてどうする。第一、お前はさつきも重つたとおり重心の位置が……』

「えへへへ」

『……聞いため息』

再びため息。

『……ま、落ち込んでるよりかはいいからマシか』

刀子と会話をしながらといつもの、刹那は大和によそよそしくなった。

話しかけても上の空で、夜に込める気の通りも悪い。

本人は特に異常はないと言っているが、側で見ていれば様子がおかしいのは明白だ。

(刀子と俺のこと、踏み込みすぎたと感じているのだらつな……)

刹那の持つ白い翼。

それが原因で、刹那が鳥族の里でひどい迫害を受けてきたことは、大和も知っている。

そのトラウマから、今でも夜につなされることもある。

だが最近はマシになった方だ。

三年前、『大和』を手に入れたばかりの刹那はひどかった。

川で溺れた木乃香を助けられなかつたという罪悪感からか、毎晩の

よつに悪夢に苛まれる日々。

見ているだけの大和ですら辛くなるほど苦しみよつ。

大和はうなされる刹那の頭を、撫でてやることもできなかつた。

(あの時ほど、身体の無いこの身を呪つた時はない)

刹那は対人関係にひどく敏感で、臆病だ。

それも過去を考えれば当然ではあるだろうが、自分と刀子の関係で刹那が苦しむ理由などどこにもない。

(今回はいい気分転換になつたか……木乃香には感謝だな)

笑い合う二人を見て、大和はそう思つ。

そして、この笑顔が疊ることの無によつこと、祈つた。

しかし、その願いは容易く覆される。

大和がふと感じた違和感。

(刀子の気配が……消えた?)

立ち去った、といつわけではない。

その場から唐突に消えてしまった、と大和の感覚は告げていた。

疑問に思つた大和は自分の感覚を最大限に研ぎ澄ます。

大和が索敵範囲をどんどん広げていくが、刀子の気配は無い。

少なくともこの付近にはいないようだった。

その代わりに、自分達のすぐ近くで一つの氣配が索敵に引っかかった。

その感覚を捉えた大和は息を呑む。

刹那の直後から、氣配を殺した鬼が近づいている。

『小娘つ！！ 後ろだッ！！』

大和の声は悲鳴じみていた。

自分に察知されずにここまで接近した鬼は只者ではない。

そこらの式神とは一線を画す、明らかに戦闘慣れしている鬼だ。

そんな鬼が、刹那のすぐ後にまで忍び寄っている。

「え？」

だが、大和の忠告は遅すぎた。

次の瞬間に大和が見た光景、それは。

鬼の豪腕に跳ね飛ばされ、まるでオモチャのよひに宙を舞つ刹
那の姿だった。

第七話（前書き）

更新が遅くなつて申し訳ありません（――）

とんでもなく難産だつた……

木乃香はその光景を信じられなかつた。

自分の目の前には、まるで空想の世界から飛び出してきたかのような赤鬼が立つてゐる。

その身から溢れ出る威圧感は木乃香の体を竦ませ、その場から動くことを許さなかつた。

身の丈は一メートルを優に越え、その両腕はそぞらの女性のウエストよりも太い。

「まったく、狩谷の坊主め……こんな童達を襲ふなどと、胸糞の悪くなるような命令をしようとして」

その腕により、自らの大切な親友を跳ね飛ばしたもの含め、木乃香はこれを見た実だと考へることができなかつた

「う、やつてくれる！」

葛葉刀子は森の中で悪態をついた。

あの転移魔法符により飛ばされた場所は、木乃香達の居た場所から遙かに離れた森の中。

ここから全力で戻ったとしても十数分はかかるだろ？

刀子はあんな単純な手にひつかつた自分を殴りたかった。

「とにかく、急いで戻らねば……！」

木乃香達のいる方角へと走り出そうとする刀子。

だが、つこさつき見るはめになつた転移魔法の光が、刀子の前方に突き刺さる。

「今更言つのもなんですけど、僕の言つことを最初から信じて本殿に戻つてしまつたらどうしようとか考えていました」

光が消えた跡に残つていた人物。

それはもちろん、刀子をこの場所に飛ばした張本人。

「 そうなつてしまえば、僕自身の手で貴方を切り刻めなくなつてしましますから」

「五木、葉一っ……！」

刀子の前に現れた葉一は嗜虐的な笑みを見せる。

それは、普段浮かべている笑顔とはまるで正反対。

まさしく悪魔が乗り移つたような笑顔だつた。

「ふ、ふふふ、あはあはははああははああー！ やつとこの時が
来た！ この女を断罪できる日が！ 僕がこの日をどれほど待ち焦
がれたことか！」

葉一は心底嬉しそうに声を上げる。

その様子を見て、刀子は逆に冷静になつた。

(落ち着け……相手のペースに乗せられてはいけない)

刀子は自分で優先順位をはつきりさせる。

無論、一番は木乃香の身の安全だ。

目の前の男との戦闘を避けることができればベストなのだが、ここ
は既に相手のフィールド。

刀子を先行させないための仕込みがあつてもおかしくないし、まだ
転移魔法符を持っている可能性もある。

つまり、ここで刀子の取るべき選択肢は。

(最短時間でこの男を撃破。その後にお嬢様達の下へ……。)

「うん、貴方の考えていることはなんとなく理解できるけど、そうはさせないよ?」

葉一は刀を抜き、刀子へと瞬動で迫る。

刀子も抜刀し、これを受け止めて鎧迫り合いに持ち込む。

双方の刀が擦れ合って、耳障りな音が周囲に拡散した。

「別に私が貴方にどう思われようと構いませんが、お嬢様に危害を加えるのであれば話は別。たとえ宗家の五木家でも手加減はいたしません!」

「……そういう上からの態度が……ひどく気に障るんだよなあ……」

葉一は刀に力を込め、その反作用で後ろに下がる。

「斬魄刀は五木家だけのものだ! お前のよつな下賤の者が使うべきではない!」

「……それが貴方の本性ですか」

「ああそつた。斬魄刀は選ばれた一族、五木家だけの物。それを図

々じくも使つお前をビリヤッて殺そつかといつも考えていた！

葉一の笑みが一層深くなる。

「色々考えたが やっぱり跪かせて殺すのがいちばんだな

刀を構え、葉一は解号を口にした。

「 面を上げろ！ 侘助エ！」

その叫びと共に、葉一の刀が変化。

その刀身は中央部分から鉤状に折れ、とても人を斬るには適していない形狀だった。

だが、それを見て刀子は警戒する。

斬魄刀の能力は直接攻撃型と鬼道型に大きく分けられる。

前者であれば攻撃手段を見抜くことも容易だが、後者であれば一見しても能力までは判明しない。

あの斬魄刀、侘助は明らかに後者に属するであろう。

(どのような能力かは知りませんが、出す前に終わらせればよいだけの話!)

時間がない現状も含め、刀子は押し切ることを決意。

先程とは逆に、今度は刀子から距離を詰める。

「くつ、お前らは大人しく神鳴流に縋つていればいいものをッ！」

刀子の剣は神鳴流の中でも特に速い。

打ち下ろし、袈裟斬り、斬り上げ、左薙ぎ、逆袈裟、刺突などあらゆる技を持つて、葉一に迫る。

その一連の動きは暴風のようでありながら、流れる水のようにも滑りかでもあった。

現に葉一は反撃どころか、体勢を立て直すこともすらおぼつかない。

その刀の特殊な形状を利用して、受け流すのが精一杯だった。

「ええい、ちょこまかと鬱陶しい！」

「神鳴流奥義 斬岩剣！」

体勢を崩した葉一に、刀子は斬岩剣で追い打ちをかける。

葉一は咄嗟に侘助を体との間に滑り込ませるが、そんな不十分な防御では斬岩剣の勢いを殺しきれない。

自然、葉一は吹き飛び、数メートル滑空して木に叩きつけられた。

「がつ……はあ……！」

肺の中の空氣を全て吐き出し、葉一は呻き声をあげる。

力、速度、技量、経験。

それら全ての含めた戦闘能力の差は歴然だった。

そもそも刀子は第一線で戦っている、いわば叩き上げの剣士だ。

命の危機を何度もぐぐり抜けてきた経験は刀子の大きな力である。

それに比べて、葉一は剣技こそ洗練されているが、実戦経験はほとんどない。

両者の違いは、剣の腕として如実に現れていた。

「命までは取りませんが……」「三ヶ用は動けないことを覚悟しない」

刀子は刃を返し、地面で蹲る葉一を峰打ちで氣絶させようと近づいていく。

しかし、葉一から返ってきたのは嘲笑。

「……へへへへ

「……何が可笑しい?」

「あははははははは！－ まだ気づかないのか！－ お前の負け
だよ葛葉刀子！－！」

葉一がそう叫んだ瞬間、刀子の刀に異変が起る。

（刀が、急に重く……！？）

取り落としそうになつた刀を咄嗟に持ち直す。

刀子の持つ刀は一般に野太刀と呼ばれるもので、その大きい形状に見合つた重量を兼ね備えている。

しかし、それでも精々が一キロ前後であり、こんな異常な重さではない。

刀子の手にかかる感触からして、少なくとも百キロを超えている。

（となると、これがあの斬魄刀の能力か！）

「やつと気がついたようだね？ これが僕の斬魄刀、侘助の能力！

『斬りつけた物の重さを倍にする』だ！」

葉一は立ち上がり、刀を下段に構えている刀子を見て笑う。

「相手が重さに耐えかね、詫びるより自らの頭を差し出す。故に

『侘助』

「……貴方の性格に似合つた、卑屈な能力ですね」

「ハツ、何とでも言いなよ。僕は侘助で貴方の刀を七回斬りつけた。貴方の野太刀の本来の重さが一キロだとすると、既に百二十八キロにまで達している！ そんな刀を振り回せるものか！」

「……」

黙り込んだ刀子を見て氣をよくしたのか、葉一の口は止まらない。

まるで演説するかのような口調で語りだす。

「実にいい眺めだ！ 気に入らないヤツを這い躰らせるのは向よりも素晴らしい！」

「……」

「この素晴らしい力は五木家にだけ許されている！ 分家のお前が使つべきではないんだよ！」

11

「そうだ、分家のくせに僕のことを無視しやがって！ 僕は五木家の中でも特別なんだ！ あの五木大和にだつて引けをとらな……」

「少し、黙れ」

刀子はその刀を『片手で』持ち上げる。

「たたた.....た？」

「」Jの程度の能力で封じられるほど、神鳴流は甘くない

葉一の勝ち誇った顔が固まつた。

彼は目の前の光景が信じられない。

今まで自分の斬魄刀と戦つた相手は、例外なく地を這いつぶばつていたのに

「馬鹿な！ そんな重さの刀を片手で持てるはずがない！」

「そうですね。あと五、六回斬りつけられたら少し危なかつたでしょうか」

葉一は口を開けたまま呆然とする。

刀子の言つこと信じるなりば、彼女は数トンの重量にも耐えられる事になる。

そんな人間が存在するのか？

「それと、重量が増すといふことは、一撃の威力が上がるといふこ

「とでもあるのですよ？」

刀子は葉一の方へ歩き出す。

百キロを優に超す重量の刀を、苦もなく持つて

「あ、あはは……嘘だろ」

葉一の背中に硬い感触。

振り返れば、先程叩きつけられた木があつた。無意識の内に後ずさりしていたらしい。

しかし、葉一のすぐ目の前には既に刀を振りかぶった刀子の姿が。

「ま、待て！　来るな！　僕を誰だと思つて……」

「時間がないので、これ以上貴方の戯言を聞く気はありません」

刀子は無造作に刀を振り下ろす。

葉一は反射的に侘助を構えるが、凄まじい重量となつた刀子の野太刀はそれをまつたく意に介さない。

一瞬の抵抗の後、あっさりと侘助は叩き折られた。

そしてそのまま葉一の肩に峰打ちが入り、凄まじい轟音が周囲に響きわたる。

舞い上がつた砂煙が晴れると、そこには野太刀を振り下ろした刀子と、地面に倒れ伏す葉一の姿。

刀子が刀を振り下ろした先は小規模のクレーターのようになつており、葉一はからうじて生きているといった具合だった。

「……」

刀子は葉一が完全に気を失つていることを確認すると、残心を解き、刀を鞘に收める。

(彼の名前を聞くだけでこれほど取り乱してしまうとは……情けない)

刀子は頭を振つて思考を切り替える。

今は反省よりも木乃香達の下へ向かうことが先決。

反省なればその後にすればいい。

自分に護衛を任せてくれた詠春の期待に報いるためにも、今は走るべき。

「お嬢様……どうかご無事で……」

今は亡き想い人のことを胸の中に隠し、刀子は再び戦場へと向かう。

しかし、彼女はまだ知らない。

彼女の人生を大きく変えた場所。

そこで、彼と再会することを。

第七話（後書き）

侘助が好きな人、すんませんでした。

第八話（前書き）

刹那達の分も詰める予定でしたが、纏めきれませんでした…… m (- -) m

最近、異常に文が思いつかない……

第八話

「月牙、天衝ッ！」

人のいない、そして鬼で溢れかえる屋敷で詠春の叫びが響きわたる。

詠春の持つ巨大な刀、斬月から三日月状の氣の刃が射出され、十数体の鬼をまとめて薙ぎ払った。

「はあ、はあっ……くそっ、何体いるんだ！」

詠春は中庭で膝をつく。

専門の庭師により美しく整備されていた庭は、今や見る影もないほどに荒れ果てていた。

屋敷に関しても同様で、屋根や柱などの様々な場所に戦闘の爪痕が残されている。

今の近衛家の屋敷はまさしく、戦場であった。

この場所で詠春が戦い始めてから、かなりの時間が過ぎている。

十数年もの間、戦闘から遠ざかっていた詠春の一番の弱点は体力だ。

そこらの鬼を難ぎ払う」とぐらじ現在の詠春でも容易だが、いつまでも戦い続けることができるほど詠春は若くない。

敵の鬼達もそれを理解しているようで、大人数で一気に襲いかかるよつな真似はせず、詠春を休ませないように波状攻撃を繰り返す。

その結果、詠春は鬼の数を三分の一ほど削ったところで体力が尽きかけていた。

「たつた一人でここまでやるとはなあ……さすが大戦の英雄。残りはざつと二五つひとつひやな。元々は千ぐらじおつたのに」

「まだ……それだけ残っているのかッ……！」

軍勢の中で一回り大きい鬼が詠春の前に出る。

先程から周りの鬼達に指示を出してることから考えて、この鬼は軍勢のトップなのだろう。

「ワイらも別にアンタの命までとれとは言われどらんし、時間稼ぎに専念しどってんけどな。それでもここまで被害が出るとは予想外やわ」

この鬼の言つとおり、詠春に襲い来る攻撃には殺意があまりなかつ

た。

しかし、それは詠春にとって喜ばしいことではない。

時間稼ぎをされるところ「」とは敵の目的は詠春ではなく、別にあるところ「」こと。

そして、その目的は考えるまでもなく

（木乃香……！）

「まあそういうわけやから、悪いけどもう少しワイヤーと遊んでいて
もういいで」

「ヤバ」をどけえッ！—！」

詠春は斬月を握り直し、鬼の一団に向けて駆け出す。

鬼達は詠春の修羅の如き形相に思わず一歩退くが、彼らにも決して
破れぬ契約の鎖がある。

彼らは『近衛詠春の足止め』という強制力の下、行動を開始した。

「う、おおおおおおおおおおおおおお—！」

視界を埋め尽くす鬼達に対し、斬月を我武者羅に振り回す。

一步進むにつれ詠春の体には傷が刻まれていき、そしてそれ以上の数の鬼を屠つていった。

体中がボロボロになつても詠春は止まらない。

今この瞬間に木乃香が敵に捕まつてゐるかもしれないと考えると、止まれなかつた。

斬撃だけでなく、空いた手でぶん殴り、蹴り上げ、頭突き、ありとあらゆる手段で田の前の鬼を排除していく。

そして、先程のリーダー格の鬼に斬りかかつたところで 詠春は前のめりに倒れた。

「血を流しそぎたか……それだけボロボロやつたら無理もないな

「く……そ……」

詠春は無様に倒れた体を必死に起こそうとする。

しかし、彼の手足は動かない。動いてくれない。

既に詠春の身体には一欠片の氣も残つてはいなかつた。

「……アンタみたいな男は嫌いやないけど、ワイらは契約には逆らえん。悪いな」

そう言つて、鬼は右腕を振り上げる。

殺されることはいかもしれないが、あの腕で両足を潰されてしまえばそれで終わり。

木乃香を助けに行くことができなくなる。

(すまない、木乃香……)

詠春は絶望に目を閉じ、その時が来るのを待つた。

しかし、予想された衝撃は一向に来ない。

詠春は目を開け、そして驚愕した。

鬼の胸から刀が生えている。

「まったく、大和はんと修行してた頃からちつとも変わつとりまへんな。そのすぐに熱くなる癖」

訳が分からぬ、という表情をしている鬼を串刺しにしたまま、刀は横に振り払われる。

鬼はなすがままに飛ばされ、保てなくなつた体が崩壊していった。

そして、その鬼の後ろにいたのは

「鶴子！？ お、お前、田那と一緒に旅行に行つてたんじや……」

かつて、刀子と共に最前線で戦つてきた女性。

詠春を除いて神鳴流最強とまで呼ばれ、斬魄刀を使う刀子と唯一互角に戦える人物でもある女傑 青山鶴子。

結婚を期に引退し、婿と共に旅行に行つていたはずの鶴子が現れ、詠春は混乱した。

「どうしても何も、いきなり詠春はんの部下から連絡が来たんよ？」

『強硬派が謀反を起こして、長が危ない』って。だから田那との旅行は中止して、長距離転移魔法符で帰ってきたんだす

鶴子は軽い口調で言つが、長距離転移魔法符は異常に高く、おいでと使えるものではない。

安いものでも確實に数百万は飛ぶ。

しかし鶴子はそれを惜しみなく使つた。

「こりが使い時だと感じたが故に。

「ま、後で代金は請求しますけどな」

そう言つて、鶴子は倒れた詠春の前に立つ。

前線を退いてなお、鶴子は武人だった。

その背中の頬もしさに、詠春は自分の不甲斐なさを情けなく思つて苦笑いした。

「はは……そんなもの、いくらでも経費で落とすぞ……」

「それで、木乃香ちゃんは今どこにいるんや？ もうかわいそらへん片付けて迎えに行かなあきまへん」

鶴子は周囲の鬼達を視線で威嚇する。

ただ見られただけだというのにも関わらず、鬼達は喉元に刀の切っ先を当てられているかのような錯覚を感じた。

「それが、最近は遊び場所をしおりかねて變えるから見当がつかない。刀子君が護衛でついているはずだが……」

「そこらへんは敵さんも織り込み済みのはずや。何かしらの対策を打たれとるやう」

「くそつ、親でありながら情けない」

「反省は後どす。今はそれよりも木乃香ひやんの場所を」

見つけるのが先、と続けようとして固まつた。

鶴子だけではない。詠春も、周囲の鬼達も同様に凍りつく。

山全体を覆い尽くすような殺気が、突如として出現したからだ。

戦闘中であるにも関わらず、いや、彼らの頭からは既に戦闘のことなど頭から抜け落ちていた。

皆、我を忘れたかのように屋敷の裏手にある立ち入り禁止の山を見る。

そこに、巨大なナニカがいると、全員の本能が訴えていた。

そして次の瞬間、その場所から爆発したかのように氣の奔流が溢れ出す。

「馬鹿な…………！」

「これ……！ そんな、嘘やろー！？」

詠春と鶴子は、この巨大な気の持ち主を知っている。

これほどまでに研ぎ澄まされた気を忘れるところが難しい。

すぐに誰の気か理解できた。

しかし、それは絶対に有り得ない。

なぜならば、この気の持ち主は既に

亡くなっている。

そう、思い出の地より流れ出る気は、確かに五木大和のものだ
つた。

再会の時は、
近い。

第九話（前書き）

この小説がpickup小説に載っているのを見て、ジユース吹いた。

第九話

『……い……起き……！』

どこからか、大和の声が刹那の頭に響きわたる。

刹那は自分の意識がゆっくりと戻っていくのを自覚した。

ただし意識が戻ったと言つても、それはまるでテレビの中の出来事のような感覚で、『ああ、自分は気を失っていたのだな』ぐらいにしか思えなかつたのだが。

『……すめ……おい、起きろ小娘つ！…』

「ハ……ハハ」

現実感がひどく欠如しており、前後の記憶もあやふやだ。

体の感覚もほとんど機能しておらず、自分が立っているのか寝ているのかもわからない。

ただ、とても眠く、抗い難い睡魔が自分に襲いかかっていることはわかつた。

『なにを悠長に寝ている！ さつさと田を覚ませ！ 殺されるぞ！』

「や、まと……さん？」

『……クソッ、頭を強く打ったのか。肋骨も数本いかれてやがる』

必死な様子で自分に呼びかける大和の声を聞き、この人でも慌てることがあるのかと驚いた。

それほどまでに自分はひどい怪我なのだろうか。

……怪我？

ウチはどうして怪我なんか……

ようやくそこまで思考が追いついた時、刹那は思い出した。

今日、自分はいつもの場所で修行をしていたこと。

その場所に木乃香がついてきたこと。

自分が突如現れた鬼により、吹き飛ばされたことも。

刹那は全てを思い出し、そして思い出すと同時に体の感覚が戻ってきた。

一番最初に戻ってきた感覚は苦痛。

体を無理やり引きちぎるような痛みが襲う。

刹那は耐え切れずに胃の中のものを全て吐き戻した。

半分以上が血で構成された血らの吐瀉物を見て、刹那は再び気が遠くなる。

だが皮肉にも、刹那の意識を繋ぎ止めたのは鬼の放った言葉だった。

「まったく、狩谷の坊主め……」こんな童達を襲えなどと、胸糞の悪くなるような命令をしようとして

童『達』といふことは、あの鬼の標的は自分だけではない。

いや、むしろ長の娘である木乃香の方が本命に違いない。

自分を狙う理由など、決してないのだから。

「IJの……ちやん」

「む、まだ意識があつたのか？……やはり童を相手にして、無意識に手加減してしまつたようじゃな」

刹那は『大和』を杖にして、ゆづくつと立ち上がる。

頭を強く打つたせいか、視界は霞み、足は産まれたての仔鹿のように頼りない。

しかしそれでも刹那は立ち上がり、しつかと地面を踏みしめる。

「ふむ……その傷で立ち上がる氣概は褒めてやるが、お主のそれは蛮勇といつものじやぞ」

『小娘、もういい立つな！　あの鬼にお前の止めを刺す氣はない！』

刹那は霞む視界で鬼の姿を捉える。

鬼は川を跨いだ向こう岸に立つており、そこで自分は鬼の一撃によつて川を飛び越えたことを理解した。

鬼にひとつは軽く腕を振るつた程度なのだろう。

しかしその軽い攻撃により、自分は川の向こう岸まで飛ばされ、頭

から木に叩きつけられた。

恐ろしいほどの腕力である。

それに対し、刹那は鳥族とのハーフと言つてもまだ子供だ。

身体能力で勝るとこりなど一つもないだらう。

剣術や鬼道にしても、大和から習つてまだ一週間ほど

とても実戦で使えるレベルではない。

身体能力、技量、経験、戦いにおける全ての要素において、刹那に一枚片の勝機も存在しなかつた。

『今のお前じや、あの鬼には勝てねえ！　このままだと犬死にするぞ！』

大和も、必死な様子で刹那を止める。

三年間自分を見守り続けてくれた彼の言つことは、きっと正しい。

本当に自分に勝ち田などないのだらう。

でも、刹那は立ち上がる。

『おい、何をやっている…?』

「……刀を持って立ち上がるからには、童といえども戦士。ワシもお主のことを敵と見なすぞ?」

大和の驚いた声が聞こえる。

いつも通りの乱暴な口調ではあったが、確かに自分の身を案じてくれていることがわかった。

……心配してくれて、ありがとうございます。

……心配かけて、『めんなさい。

でも、ウチは引けません。

刹那は見てしまったから。

鬼の小脇に抱えられた木乃香を。

今まさに鬼に連れていかれようとしている、自分にとって始めての
親友を。

その親友が、自分に心配をかけまいと、必死に口を抑えて悲鳴を押し殺しているのを。

だから、

「だから、ウチは戦います」

刹那はふりつく足で一歩を踏み出す。

倒れそうな体を『大和』で支えながら。

親友を助けるために、鬼に向かつて歩き出す。

『……今のお前じゃ、勝てないぞ』

「それでも、ウチは戦います」

『そんなボロボロの体でか?』

「それでもです」

『たとえ、それで自分が死んだとしてもか?』

大和は問う。

三年前、『大和』を受け取った時の誓い。

それを死ぬまで守り抜く覚悟はあるのか、と

そして刹那は

「 はい。それで死んでも、この道に後悔はありません」

『……くそつ、そんな所だけ俺に似やがつて』

「え？」

大和のため息が刹那の頭に響く。

なぜだかわからないが、大和が頭を搔きむしっている光景が想像で
きた。

『ええい、毒を喰らわば皿までだ！ 僕も付き合つてやるー』

「え、あの、大和さん？」

『俺が、あの鬼をふつ倒す手助けをしてやると言つてやるんだよ！
返事はどうした！』

「は、はいっ！ よろしくお願ひします！」

大和に怒鳴られた瞬間、条件反射で返事をする刹那。

『……絶対に死なせない』

「え？」

『これから斬魄刀戦術を使う！ お前は俺に気を集中させろー』

「で、でもウチはまだ斬魄刀を屈服させて……」「

『俺が変換器の役割をする！ いいから、お前は馬鹿のよつに氣を流し込め！』

大和はそう言つが、実際の所、この作戦が成功する可能性は低かつた。

確かに、斬魄刀を屈服させている大和であれば、本体と繋ぎを取ることはそう難しいことではない。

しかし、できるのはあくまで斬魄刀を交渉の座につかせることだけ。

そこから先に、大和の介入できる余地はない。

（俺が知る中で、最もまともな精神の斬魄刀は……）

呼び出す斬魄刀を決め、大和は叫ぶ。

『今から解説を唱える！ 俺の後に復唱をしろ！』

「はいっ！」

『行くぞ、？刹那？！』

「……はい！」

この瞬間、刹那は理解する。

今、始めてこの人に、主として認められたのだと。

『舞
え
』

袖白雪
そでゆきしらゆき
！
！

「長生きはしてみるものじゃな……おれかあの年頃で斬魄刀を扱う者を曰くするとは……」

刹那達を襲撃した鬼は、元々この作戦には乗り気でなかつた。

子供に手を上げることとは彼の流儀に反するものであつたし、もとより強者との戦い以外に興味はない。

だからこそ、今回は大戦の英雄である近衛詠春と死合つことができると期待していたのだが、実際に命じられたのは子供を拉致せよといふ任務。

正直、うんざりする内容だつた。

(つまらん仕事はそつそつ終わらせて帰還しようと思つておつたが
……思わぬ収穫じやな)

心中でさう呟き、鬼は脇に抱えていた木乃香を地面に降ろす。

「すまぬが、離れていてもらひや。流石に子供を抱えながら手合わせをするのは無礼であろうしな」

「む、せつねやんに何する気なんー!?.」

「あの童は幼いながらも戦士の田をしておつた。ならば、それ相応の対応をするのが礼儀であるわ」

そう言つて、鬼は刹那のいる方向へと歩いていく。

刹那が解弓を唱えた瞬間、この周囲一帯に冷気が包まれた。

白い霧のような冷氣は刹那を覆い、その姿を完全に隠している。

鬼は川沿いに立ち、向こうの岸にいる刹那を待ち構える体勢をとつた。

戦いを愛する鬼に不意打ちをする気など毛頭ない。

立ち向かってくるものには、誰であろうと最大の敬意を。

それこそがこの鬼の流儀である。

そして刹那を覆う霧が晴れ　鬼は感嘆のため息をついた。

「ほう……白の剣士とは、中々に優雅であるな」

現れた刹那の姿は大きく変わっていた。

ただの胴着だつた服は、不淨を一切寄せ付けぬ純白の死霸装へと変化。

その手に握る刀も大きく様相を変え、刀身も鐔も柄も全て純白となり、柄頭に長い帯が尾を引く美しい刀となっていた。

だが、鬼がなによりも美しいと思ったのは、刹那の髪。

鳥族と人間のハーフである刹那の特徴である、アルビノ体质。

背中の羽と同様に忌み嫌われ、今まで染料で隠していた本来の髪

色が現れた。

まるで魂を凍らせる雪女の如き白銀の髪に、鬼は目を奪われる。

そこで刹那はゆっくりと目を開き その紅の瞳で鬼を見据えた。

最早言葉は不要。

川を隔てて向かい合つ二人の間で、それぞれの気がぶつかり合つ。

そして、先に動いたのは刹那だった。

先程までのふらつていた足取りとは違い、かなりの強者である鬼を感じさせるほど速度で走り出す。

だが、鬼の驚きはここからだった。

飛びなどして避けると思われた川を そのまま水面を走ってこちらに迫ってきたのだ。

「なんと…？」

鬼は思わぬ現象に目を剥くが、刹那の走った跡を見て得心がいく。

その身から溢れる冷氣によつて形作られた、氷の道。

水の流れが穏やかである下流ならともかく、滝が直上にある急流での神業を見て、鬼は獸のように笑う。

そうではなくては、と。

川を渡りきつて走つてくる刹那に対し、鬼は無造作に腕を振るつた。

殺す気の攻撃ではないにしろ、特に手加減をしているわけでもない。

常人が直撃したならば、間違いなく即死の威力だ。

速度も十分にあり、こちらに向かつて全力疾走している刹那では左右に方向転換もできず、避けきれないはずだった。

ここで、鬼は二度目の驚愕を味わうことになる。

刹那は勢いをまったく緩めず、いや、むしろ加速した。

そしてそのままスライディングで鬼の腕を掻い潜る。

さらにその際、相手と自分の速度を利用して、鬼の腕を撫でるように切り裂いていった。

予想外の避け方、そして自分の自慢である皮膚が傷つけられたことに鬼は呆然とする。

右腕から鮮血が吹き出し、そこによつやく鬼は我を取り戻した。

（斬魄刀といい今の動きといい、あの童は何者じゃー…？）

鬼は刹那に対して向き直る。

刹那は既に体勢を整えており、刀の切っ先を鬼に向けていた。

その真っ直ぐな瞳を見て、鬼は自分の浅はかさを思い知る。

（何が戦士として認める、じゃ……さつきまでの自分を殴り倒した
いわい）

そう、今自分の前に存在するのは、紛れもない敵だ。

僅か十にも満たないであろう少女としても、それは変わらない。

殺し殺される立場である相手を、上から田線で『認める』とは何様のつもりだ？

鬼は緩みきつた自分の性根に燭を入れる。

授業料は既に十分貰った。

余分な血も流れ、頭も冷えた。

鬼はもう慢心しない。

心は熱く、されど頭は冷静に。

再び、死闘が始まる。

刹那は鬼と戦いながら、言い知れぬ全能感に酔いしれていた。

(すゞい……次にどう動けばいいのか、手に取るようになる！)

先程から鬼と互角以上に戦えている刹那だつたが、それはもちろん彼女だけの力ではない。

これらの剣技は全て、大和の戦闘経験から汲み取ったものである。

元々、大和と刹那との間には細い糸バスがあった。

三年間ずっと氣を籠められたことにより発生したこの糸は、刹那が斬魄刀『大和』を開放したことで、この瞬間に一気に拡張した。

そこから大和の意思が、刹那に流れ込んでくる。

『右の蹴り上げ、そしてそこから踵落としが来る！ 軸足側に回り込み、アキレス腱を狙え！』

『はいっ！』

常時開放型である、斬魄刀『大和』の能力。

その本質は、鬼道を肩代わりすることや斬魄刀と交渉することではない。

『常に意識を表に出すこと』ができる

これこそが、斬魄刀である『大和』唯一無二の特性だった。

『右ストレートはフェイント！』

『本命は、踏み込みながらの左ショートアッパー！』

本来、斬魄刀の意識というものは、使用者が屈服させようと挑む時
ぐらいしか表に出ない。

だといふのに戦闘中どこか、普段の生活の中でまで刹那と意思疎
通できる『大和』は、はつきり言つて異常だった。

『刀の腹で相手の攻撃を逸らしつつ』

『 身長差を利用して、相手の足元へ潜り込む!』

しかし、それこそが『大和』の本来の使用法。

単純な戦闘だけではなく、知恵や経験、気配の察知まで大和が担当することができる。

使用者を訓練で強化してくれる斬魄刀など、『大和』以外には有利得ない。

「くそッ、足元をうろちょろと!」

『今だ、刹那!』

『はい!』

つまり、『世界最強の英雄が味方になる』ということ。

鬼道や斬魄刀は、その副産物でしかない。

焦れて動きが雑になつてきた鬼に対し、刹那は大きく距離をとる。

足元にいた刹那に向けて腕を振り回していた鬼は、咄嗟に刹那を追撃することができない。

その一瞬の隙をついて、刹那は袖白雪を地面に突き立てる。

一回、二回、三回、四回。

袖白雪を地面に突き立てる度に、柄頭の帯が白い軌跡を描く。

その一連の動作は戦闘中にありながらも美しく、まるで舞つてゐるかのよひ。

鬼は思わず魅入られた。

そして鬼の意識の空白を突き、刹那と大和の舞が完成する。

次の舞、
白漣

はくれん

「つ、しまつ　！？」

刹那の足元から出現した凍氣の濁流。

雪崩の如き広範囲攻撃に、正気に返ったばかりの鬼は成す術もなく
呑み込まれていく。

さらにそれだけには留まらず、木々や地面、川すらも凍てつかせ、前方五十メートルの空間を全て呑み込んでよつやく止まる。

使用者と斬魄刀の心が一つになれば、それはかつての英雄が再び現代に蘇ると同義。

「や、やりましたよ大和さん！」

『全力でフラグ建ててんじゃねえ！』

ただし心が一つにならなければ、ただの喋る刀に成り下がるの

だが。

「でも流石に今のを直撃すれば、いくら鬼と言つても……」

『ダメージぐらいは通つただろうがな……白漣に呑み込まれる寸前、氣を体に纏わせて防御していた』

大和は鬼を倒しきれていないと判断。

そして、その判断は正しかつたとすぐに証明される。

氷の塊に無数の鱗割れが走つたと思えば、その中心から鬼の腕が突き出されたのだ。

「まつたく、年寄りにこの寒さは堪えるわい」

「そ、そんな……ほとんど無傷やなんて……」

氷漬けになつていた筈の鬼は、平然とした様子で内から氷を砕いて脱出する。

かなりの気を籠めた一撃だつたにも関わらず、大した怪我を負つてゐるわけでもない鬼を見て、刹那は戸惑つた。

大和はとくに、鬼の様子を見て一つの推測にたどり着く。

『白漣を防いだる方法……コイツ、まさか』

大和がその推測を刹那に伝える前に、鬼が口を開く。

「悪いのう嬢ちゃん。ワシはその斬魄刀の能力をほとんど把握しておるんじや」

「なつ……」

『……やはりな』

「あの技は白漣じやつたな？　あれは見た目こそ派手じゃが、その分威力が分散してある故、一対一^{サシ}の勝負には向いとらん。体を氣で覆えば致命傷は避けられる」

鬼の言つとおり、白漣は一対多でその本領を發揮する。

とは言つても威力が弱いわけでもないし、攻撃範囲も広い。

相手が回避を選択して巻き込まれれば、十分にダメージを取えられる筈だった。

だが、あの鬼は真っ先に防御を選択した。

「以前、五木家の者と共に闘した際にその刀を見る機会があつてな…美しい使い手と刀であつたのを覚えておる」

鬼は懐かしそうな目で袖白雲を見る。

昔のことを思い出しているのだろうか、その顔には微かに歎しそのようなものが浮かんでいた。

だが、鬼は刹那に視線を戻すとニヤリと笑う。

「ただし、今代の使い手は色氣がちいと足りんようじやがの」

「ほ、ほつといてください!」

『……んな挑発に乗つてる暇があるんなら、ちよつとは』の場を乗り切る策を考える』

「うう……すみません」

実際の所、刹那達はかなり不利な状況だつた。

袖白雲のことを知られているといつことは、事実上切り札の全てが封じられているのと等しい。

知っている技をむざむざ受けのぼり、あの鬼が甘くないといつゝとは刹那にも理解できていた。

(しかし、これ以上の速度の接近戦に刹那の体は耐えられない……
あの鬼の目も慣れ始めている)

たとえ大和の戦闘経験を使えるからといって、それを扱っているのは九歳の刹那だ。

まだ体も出来上がっていらない子供の身に、長時間の大和の戦い方は毒にしかならない。

既に刹那の体中は悲鳴をあげているはずだ。

今まで身長差や交差法などを利用して刹那の負担を減らしていたが、鬼がその動きに慣れつつある現状、これ以上の高速戦闘は不可能に近かつた。

そして、今刹那達が持っている手札の中で、唯一あの鬼を打倒できる手段。

袖白雪を相手の体に突き立て、内側から凍らせて碎く技。

しかし、当然鬼もこの技を警戒しているだろ？

命中してくれるとは到底思えなかつた。

決め手は存在せず、そして持久戦で刹那に勝ち目はない。

八方塞がりだつた。

『くそつ、他に何か手段は……』

「 大和さん。私に考えがあります」

『ああ？』

先程とは逆に、刹那の意思が大和の中に入つてくる。

刹那の考えた作戦を理解した大和は数秒考え込み、そして刹那に尋ねた。

『確かにこれなら通用するだろ？が……お前にできるのか？』

「 できます。ウチと、大和さんと、袖白雪なら」

『……そうか』

大和は決断する。

主が無い頭使って必死に考えた作戦だ。

成功させてやる「ひじや」ないか、と

『場所は俺が指定する。それで、お前は自分のやるべれい」と理解できているな?』

「はい!」

『いい返事だ』

刹那は改めて鬼に向き直る。

その威圧感は一向に衰える気配を見せない。

一步間違えば、間違いなく自分は死ぬ。

それを理解していながらも、刹那はまったく恐怖を感じなかつた。

恐怖が麻痺しているのだろうか?

いや、違う。

掌から伝わってくる信頼。

それのおかげで刹那は、まだ戦える。

『準備はいいか、刹那！』

「はいっ！」

戦いは、佳境へと移っていく

第九話（後書き）

大和の真の能力発動。

……色々と批判が怖い。

ちなみに、鶴子と詠春が感じた気はこれではありません。

第十話（前書き）

スランプか……

多分ものすごく読みこくっています。

第十話

刹那は悠然と立ち構えている鬼に向け、走り出す。

鬼の目と鼻の先にまで迫った瞬間、大和が合図を出した。

『今だ！ やれ、刹那！』

「縛道の一十一 赤煙遁！」
せきえんとん

刹那の両手から赤い煙幕が吹き出し、鬼の視界を遮る。

煙幕により刹那は覆い尽くされ、鬼は攻撃目標を完全に見失った。

「くつ、まさか鬼道も操るとは……！」

鬼は即座に視覚を遮断。

その代わりに他の感覚をフル動員させて、刹那の動きを感じする。

刹那が鬼を倒せる唯一の手段である、参の舞 白刀。

いくら鬼でもあの技を喰らえばただでは済まない。

よつて、鬼は研ぎ澄まされた感覚を使い、刹那の迎撃にその全神経を傾ける。

(『じ』から来る……右か、左か……上の可能性もあつじゃな……)

時間が引き伸ばされていく感覚。

刹那が今の鬼に不注意に仕掛ければ、即座に反撃を貰つてあらう。

この鬼はやはり、幾戦もの戦いをぐぐり抜けてきた猛者であった。

一秒、一秒と時間が流れる。

そのまま数秒が過ぎ、鬼はよつやく『気』いた。

(あの娘の『気配』がしない……?)

鬼は目を開ける。

流れてきた風によつ煙幕が晴れ、そして鬼は自らの失態を呪つた。

「やられたの!」

煙が晴れた先に刹那の姿はなく、そして木乃香の姿もまた消えていた。

木乃香は刹那に横抱きにされ、森の険しい道を移動していた。

大の大人でさえ登るには難しい山道を、刹那は人一人を抱えたまま走つて登る。

「せっちゃん……その髪の色……」

「……」

木乃香は混乱の極みに達していた。

ついでつきまで一人楽しく遊んでいたところに、そこに絵本から飛び出てきたような鬼が現れ、そして自分の親友がその鬼と戦うという異常事態。

いくら木乃香がおおらかであるといつても限界がある。

既に木乃香の頭はパンク寸前だった。

「そ、そりや！　せっちゃんはあの鬼に吹き飛ばされて、怪我を…
…急いで治療せな！」

「！」のちやん、聞いてください

親友の落ち着いた声。

その透き通った声色は、木乃香のパニックを一時停止させるには十分だった。

「今、ウチらはあの鬼に狙われてます」

「う、うん」

「鬼のこととか、ウチのこととか色々聞きたい」とはあると思つけど……お願いします。今はウチのことを信じて、何も聞かないでください」

「……」

「絶対にこのちゃんはウチが守るから……！」

刹那の決意に満ちた表情を見て、木乃香は何も言えなくなる。

ただ、木乃香の中でこれだけははつきりしていた。

自分を守るために、親友が傷つくのはいやだ、と。

『そろそろ追いつかれる。急げよ、刹那』

「はい！」

獣道すら無い山の中、刹那は『仕込み』を始めていた。

刹那の最終目標は木乃香を無事に連れて帰ること。

そのためには戦闘を避けて逃げ切れば最善なのが、それは不可能だった。

いくら氣で強化している肉体といえど、人を抱えていれば逃げる速度も落ちる。

いざとなれば羽を出して逃げるという手もあるが、幼い刹那の翼では木乃香を抱えて飛ぶことは無理だ。

つまり、木乃香の安全を確保するには鬼を倒すしかない。

この『仕込み』もそのためのもの。

準備を終えた刹那に、大和は語りかける。

『戦いの前にこんなことを言つのは本意ではないが……木乃香への説明はどうする気だ?』

「……それは」

『田の前でこれだけドンパチやらかしたんだ。いくらなんでもCGで言い訳できる範囲を超えてる。……まあ、そんな言い訳する奴もないに違ひないだろうが』

大和は、刹那の迷いを見抜いていた。

木乃香に対し、今回の件をどう説明するのかという迷い。

正直に全てを打ち明けるのが、それとも記憶を消すなどして先延ばしにするのか。

迷いを抱えたまま刹那に戦つてほしくなかつた。

『俺としては木乃香に説明すべきだと思つてゐる。関西呪術協会の長である詠春さんの一人娘だ。先延ばしにするのも限界がある』

「それは……」

刹那は即答することができなかつた。

無論、刹那もしたくて隠し事をしてゐるわけではない。

洗こぎらご血ぬいて、樂になりたいといつ思にもある。

事実、裏の世界に関することだけであれば木乃香に教えた方がいいと考へてゐる。

それでもやはり、刹那に自らの出血を話す勇氣はなかつた。

「……すみません。今はまだ、決められそうにはないです」

《別に、お前が謝るようなことじやない。これは詠春さん達も含めた問題だしな》

「こんなことを言こ出してすまなかつた、と大和は言つ。

《俺が言つたことは忘れて、今は戦いに集中しん。ここで木乃香が連れ去られたら元も子もない》

「はー……」

刹那は結局、迷いを振り払つことはできなかつた。

鬼は道なき道を登りながら、刹那達を探していた。

子供の足ではそう遠くまでは逃げれない。

鬼は刹那の足跡を辿りながら、もつゞじで追いつけることを確信していた。

「さて、どんな策を用意しておるのか……」

戦いをすっぽかされたことに関して、鬼は刹那を恨んではない。

油断した自分が悪いのであるし、それに逃げ切れないことは刹那も重々承知のはずだ。

つまり刹那は逃げたのではなく、自らを打倒するために策を張り巡らしているのだろう。

その策を鬼は正面から打ち破りたかった。

(ワシの悪い癖じゃが……もう直しようもないからのう。恨むなよ、
狩谷)

鬼はさらに歩き続ける。

そしてある程度森が開けた場所まで来て、鬼はよつやく見つけた。

木の陰から僅かにはみ出でている着物。

それは確かに木乃香の着ていたものだった。

「……」

鬼は無言で近づいていき、陰から見える着物に手を伸ばす。

そして手が着物に触れる瞬間、刹那の声が響きわたった

「縛道の一 塞一」

伸ばしていた右手が不可視の力により引き戻され、両腕が腰の後ろに強制的に回される。

さうに追い打ちをかけるかのよつた声が鬼の耳に届く。

「縛道の四 這縄！」

鬼の頭上より氣で編まれた縄が現れ、鬼の体を拘束していく。

数瞬の内に鬼の体は這縄で雁字搦めにされて、その自由を失った。

鬼は頭上を見上げる。

そこには左手に這縄の先を持ち、右手に袖白雪を構えた刹那の姿。木の枝から飛び降りた刹那は逆手に構えた袖白雪で、今まさに鬼を貫かんとしていた。

木乃香を囮にして、その隙に鬼道で拘束。

そして袖白雪で止めを刺すつもりなのだ。

完全に動きを封じられた鬼は、刹那の奇襲を目の当たりにして、つまらなそうに呟いた。

「 所詮、子供の浅知恵じやの」

鬼は一重にかけられた縛道を、いつも簡単に引きちぎる。

刹那の年齢で鬼道を扱えるのは驚嘆に値するが、それだけだ。

構成が甘く、鬼道衆のそれと比べてひどく脆い。

鬼の腕力を塞き止めるほどの力はなかった。

そして、空中にいる刹那は完全に無防備。

刹那の攻撃はいつも簡単に避けられ、代わりに鬼の右腕が刹那に叩き込まれた。

「つ、べー。」

短い悲鳴と共に刹那は吹き飛び、一転三転と地面を転がつてよつや

く止まる。

手応えは完璧。

カウンター気味に入った右拳は、刹那の体内に全ての衝撃を与えた。一番最初のダメージも含めると、最早刹那に立ち上がるだけの力は残っていないだろう。

倒れ伏した刹那を見て、鬼は僅かに落胆の表情を見せる。

(どんな策かと思えば、ただの奇襲であつたか……少し買いかぶりすぎたようじやな)

鬼は刹那の下へと歩きだす。

たとえ子供といえど、戦士の目を宿していた者を見逃す『気はない』。

刹那に止めを刺すべく、一步一歩近づいていく。

しかし、鬼と刹那の間に人影が割り込んだ。

「や、やめて！ せつちゃんに手え出したらゆるやくん！」

木の陰に隠れていた木乃香が両腕を開いて鬼を止めよつとす。

目に涙を溜め、必死に恐怖を誤魔化している姿を見て、鬼はため息をついた。

「嬢ちゃん。悪いことは言わん……下がつてろ」

最後の台詞は殺氣と共に発せられた。

大人ですら氣絶しそうな程の、物理的圧力すら伴つてゐる言葉。

木乃香は氣を失うことは無かつたものの、足の震えにより立つていることすらままならなくなつた。

地面にへたり込んだ木乃香を悠々と跨いでいく鬼。

そして地面に倒れる刹那の前まで来て、鬼は口を開いた。

「何か言い残すことはあるかの？」

「う……」

地面に倒れ伏す刹那の目は、まだ死んでいなかつた。

刹那は必死に立ち上がろうともがく。

しかし、右手に掴んだ『大和』を杖にする力すら残つておらず、虚しく地面に転がつたままだつた。

その刹那の姿を見た鬼は数秒瞑目する。

そして、心の中の躊躇いを消すと同時に右手を振り上げた。

一瞬の後に、刹那の命の灯火は消える。

それは、変えようのない運命だ。

ピンチの際に都合良くヒーローが現れるのはお伽噺の中だけ。

刀子は全力でこの場所に向かっているが、到着には十分はかかる。

どう転んでも間に合わない。

しかし、運命は覆される。

奇跡などではなく、他ならぬ刹那と大和の力によって。

「 ウチらの、勝ちやーー！」

鬼の腕が降り下ろされる寸前に、刹那のボロボロの腕が持ち上げられる。

そして刹那は渾身の力を籠めて、袖白雪を地面に突き立てた。

その瞬間、鬼を中心とした円が浮かび上がる。

落ち葉で巧妙に隠されていたその円は、青白い光を放ちながら鬼を包囲した。

「これは……まさかっ！？」

鬼にはこの現象に心当たりがあった。

自分の予測が正しいのならば、この場所にいてはただでは済まない。

鬼は咄嗟に脱出を試みる。

しかし、完全に油断していたがために初動が致命的に遅れてしまつた。

そして、鬼は巨大な氷柱に囚われる。

(やはり円白… まさか、遅延発動するとは……！)

初の舞 月白(つきしゆ)

刀で地面に円を描き、その内部の天地全てを凍らせる技。

攻撃範囲がかなり特殊であり、使い所が難しい技もある。

刹那はこの技を罠として使うことを考えついた。

あらかじめ刀で円を刻んでおき、範囲内に入った瞬間に発動。

口にするのは簡単だが、可能かといふとそうでもない。

まず、鬼が円の範囲内に入らなければ意味がない。

大和の類い稀な戦術眼がなければ、ここまで正確に鬼を誘い込むことはできなかつただろう。

その上、ただ罠として設置しても反射的に避けられる可能性も高い。
だからこそ刹那は鬼の攻撃を甘んじて受けた。

相手が完全に勝負がついたと考えて、油断するのを待つために。

しかし、それでも鬼にとつて致命傷には成り得ない。

並の相手ならば簡単に凍てつかせ、粉々に碎く技だ。

だが、この鬼にとつては数秒間拘束されるだけに過ぎない。

すぐに鬼は内部から氷柱を破壊し、自由の身となるだろ？

目の前で立ち上がり、再び刀を構える存在さえなければ。

刹那はボロボロの体を無理やり起しす。

たつた一度のチャンスを活かすために。

親友を、守り抜くために。

（見事じゃ……今度は味方として戦場に立ちたいものじやのひ……）

鬼の腹部に、袖白雪が突き立てられる。

体の内部が凍ついていく感覚を味わいながら、鬼はそう思った。

鬼の輪郭が薄れ、消えていく光景を見て木乃香はよつやく我を取り戻した。

「せつちゃん！　返事をしてえな、せつちゃん！」

木乃香は泣きながら、倒れている刹那にすがりつく。

刹那の髪は元の色に戻つており、直ぐ側に落ちている刀も以前の色彩を取り戻していた。

だが、その身に刻まれた怪我まで元通りになつたわけではない。

鬼の油断を誘うために受けた傷は、深く刹那の体に刻まれていた。

「いへこう時はどうすれば……そ、そいや、まずは血を止めんと…」

木乃香はつら覚えの知識を使い、必死に応急処置を施す。

自らの質の良い着物を惜しげもなく破り、刹那の傷口に巻きつけていた。

溢れ出る血によつて、着物は即座に赤く染まつていく。

それを見た木乃香はパニックの悪循環に陥つていった。

(どひすねば……どひすねば……ー)

だから、氣づけなかつたのだひつ。

「おいおい、慙愧の旦那がやられたってのはホントやつたんかいな

自分達を取り囲む、鬼の群れに。

「え……？」

木乃香が気づいた時にはもう遅い。

見渡す限り完全に包囲されており、逃げ道などどこにもなかった。

「恥愧の旦那をヤツたんは倒れとる方みたいやけど……未恐ろしい子供やで」

「まだ十歳ぐらいやん。ホンマにこの子の仕業かいな」

「その刀に旦那の氣が残つとる。間違いないやん」

木乃香には、鬼達の会話をどこか別世界の会話のように感じていた。ついさっきまで刹那と一緒に笑いあっていたといふのに、あの鬼が現れてから全てが狂いだした。

まるでタチの悪い夢を見ているかのよつ。

これが誰かの脚本だとしたら、書いた人はどれだけ意地が悪いのだらうつか。

「 旦那を倒したやつを始末しろっていう契約やしな。こんな子供を手にかけるんは氣い引けるけど、それもしゃあないか」

そう言って、巨大な刀を持った一体の鬼が近づいてくる。

木乃香は咄嗟に刹那と鬼の間に割り込んだ。

鬼的眼光を直視するのは一回目だが、たつた二回で慣れるわけもない。

木乃香の足はすくみ、意思の力だけで立っているような状態だった。

そんな木乃香の姿を見て、鬼はため息をつく。

「嬢ちゃん、アンタを傷つけるのは依頼外やけど……別に、無傷で連れてこいつて言われてるわけじゃうねんで？」

遠回しに、邪魔をするなら無理やり排除する、と告げる鬼。

刹那と戦っていた鬼ほどの威圧感ではないが、それでも九歳の子供に耐えられるものではない。

この鬼もまた、直ぐに道を譲るか、氣を失うかのどちらかだらついた力をくくつていた。

「いややー、絶対にせひやんには手を出せやんーー！」

しかし、木乃香は刹那を庇う体勢のまま、一歩も動かなかつた。

木乃香は雰囲気を察するのが上手い。

それ故に、今回の件で刹那が怪我をしたのは、自分を助けるためだと正しく理解した。

正直な所、鬼だの魔法だとファンタジーなことはよくわからない。
自分の親友が超常の力を操っていたことに、多少のショックもある。

ただ、木乃香の中で一つだけはっきりしていること。

刹那は自分を助けるために、巨大な鬼に立ち向かった。

ならば、自分もその思いに応えるべきだと。

木乃香はそう思い、刹那の側に落ちていた刀を拾う。

初めて持つた真剣は想像以上に重く、プルプルと震える腕で持ち上げるのが限界であった。

その様子を見た鬼達から失笑が漏れる。

木乃香の頭に声が響いたのは、そんな時だった。

聞こえるか、近衛木乃香。

「え……？」

木乃香は周囲に田を配るが、周りにいるのは鬼ばかり。

今日は理解できない出来事がたくさんあつたが、とうとう幻聴でも聞こえるようになつたのだろうか。

時間がないので单刀直入に聞く。その小娘を守りたいか？

しかし、その内容は聞き逃せるものではなかつた。

たとえ幻聴であつたとしても、刹那を救う方法があるのならば何でも構わない。

必要とあらば、悪魔と契約するのも辞さない覚悟だつた。

その思いを声の主に届けるように、必死に念じる。

（お願い！ 誰でもいいから、せつちゃんを……）

果たして木乃香の願いは聞こえたのだろうか、小さく笑つたような声が木乃香の耳に届いた。

この場所に気の感受性が強い者がいれば、『大和』から氣の糸が伸びてゐることに気がついただろう。

それは『大和』に残つた最後の氣で紡がれた鬼道。

縛道の七十七 天艇空羅。

俺の名前は『』。

(最後が聞こえへん……?)

彼（もしくは彼女）の声は、何故か最後の部分だけかすれでいて聞こえなかつた。

まるでテレビの砂嵐のようだ、と木乃香は思った。

クソッ、糸の無い状態で真名を教えるのは難しいか……相変わらず不便な体だ。

どうやら声の主に不都合が生じてゐるらしい。

それが刹那の救出に影響しないか、木乃香は生きた心地がしなかつた。

悪いが、お前にも多少の代償は払つてもうつ。お前の持つている刀に、自分の血を付ける。

それを聞いた木乃香は、まったく迷う素振りも見せず、素手で刀身を強く握りしめる。

鋭い痛みと共に、木乃香の小さな手から血液が流れだして『大和』を紅く濡らした。

傍目からは何をやっているのかわからず、近づいてきた鬼も首を傾げる。

イメージしろ。お前の、近衛家の血には特殊な力がある。それを強く認識するんだ。

近衛家の血に宿る力。

この世ならざるものを見き止める、『招喚』の能力。

本来招喚に必要とされる百の魔力を、一の魔力で済ませてしまう異能。

『リヨウメンスクナ』すら単独で喚ぶことすら可能とするこの力は、生まれ持った莫大な魔力と合わせれば、まさに反則級である。

ドクン、と。

心臓の鼓動のよつな音が周囲に鳴り響いた。

「なんや、今のは……」

「ヒヤい悪寒を感じたぞ」

鬼達も不審気な様子で田を合わせる。

その間も、鼓動の音は響き続けていく。

「ツ、嬢ちゃんの仕業かい！」

刹那達に近づいてきていた、巨大な刀を持つた鬼が異変に気づく。

木乃香の持っている『大和』は薄く発光し、周囲に氣をまき散らし始めていた。

「何企んでんのか知らんが、させへんぞ！」

巨大な刀を持った鬼は木乃香に向かつて駆け出す。

彼の本能が、アレを放つておいてはいけないと警告していた。

十数メートルあつた距離を瞬時に縮め、刀を振り上げる。

長の娘を殺してはいけない契約だったので、刀を返した峰打ちの体勢だ。

しかし、鬼の力でマトモに喰らえれば、それだけでも致命傷になりかねない。

彼はそれほどまで焦っていた。

なんの変哲もない刀が放つ、恐ろしい威圧感によつて。

耳を澄ませろ！　今のお前には聞こえるはずだ！

木乃香は目を閉じる。

手に持つた刀がとんでもない熱を持つていた。

刀から鳴り響く鼓動は早まり、痛いほどの圧力をぶつけてくる。

血液によって結ばれた簡易的の糸バスを通つて、木乃香の魔力が吸い上げられていく。

目を閉じた木乃香に、鬼の刀が振り下ろされた。

叫べ！俺の名は……！

木乃香は叫ぶ。

喉がちぎれんばかりの大声で。

彼の名を喚んだ。

「『大和』！！」

薄く目を開けた木乃香は、自分がまだ生きていることを確認する。
自分は鬼の刀の直撃を喰らっているはず。

それなのに、何故？

木乃香はゆっくりと顔を上げる。

そして眼前の光景を見て 驚愕した。

先程まで自分の手に持っていた刀が宙に浮き、鬼の剣を防いでいた。

木乃香は現在、『大和』にまったく触れていない。

刀は完全に独力で宙に浮いて、鬼の刀から木乃香を守っていた。

「マジかいな……」

木乃香に向けて刀を振り下ろした鬼もまた、同様に驚いていた。

彼の刀は鬼専用のとんでもなく巨大なものだ。

大きさに見合つた重量もあり、鬼の腕力で振りおろせば岩など粉々に砕く。

だというのに、木の枝のように細い刀一本により、彼の刀は完全に受け止められていた。

いくら力を籠めてもまったく動かない。

まるで地球に斬りつけているような感触だった。

木乃香はその光景を呆然と見つめ 気づいた。

自分を守る刀の柄に、誰かの右手が浮かび上がっていることに。

いや、右手だけではない。

右腕、右肩、背中、左腕、腰、両足、首、そして頭が順々に浮かび
上がっていく。

全身が浮かび上がったその少年は、黒い着物を着ていた。

その服装は、先程刹那が纏っていた純白の装束の正反対である。

「ッ、なんやお前は！」

鬼は突如現れた少年に対し、再び刀を振り上げる。

それを眼前の少年に叩きつけようとして、いつの間にか少年の左腕が自分の脇腹に刺さつていてことに気がついた。

「あ……？」

次の瞬間、鬼の体の穴という穴から蒼い波動が吹き出す。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアア！」

鬼の苦痛に満ちた断末魔が響いた。

完全無詠唱によって放たれた鬼道　　蒼火墮により、体の内側から焼かれたのだ。

思わず目を逸らしたくなるような光景である。

全身を炭化させた鬼は、その死骸を残さずに消えていった。

眼前的鬼を排除した少年は振り向き、そしてそのまま木乃香達に近づいてきた。

木乃香は田の前の惨劇により、腰を抜かしていて動けない。

そして少年が自分の顔に掌をかざした時、ああ、ここで自分が死ぬのだなどボンヤリ思った。

だが、

すまない。怖い思いをさせたな。

(「の声……やつらの」)

薄れていいく意識の中、最後に聞こえたのは確かに

大和は木乃香を『白伏』で眠らせて、木にもたれさせる。

そして、倒れている刹那に近づいて治療系の鬼道を発動させた。

大和に治療系鬼道の適正はほとんど存在しなかつたが、血反吐を吐くような修練により、一流のそれと遜色ないレベルで使用できる。

光に包まれた刹那の怪我はどんどん消えていき、完治とまではいかないが、命に関わるような傷はなくなつた。

穏やかな寝息を立てる刹那をそつと抱え上げ、木乃香の隣にもたれさせる。

そこままでして、ようやく鬼の内の一人が我に帰った。

「おい坊主！ テメエ一体どこから湧いてでやがつた！」

「……」

「なんとか言えや」「うー..」

「……最近の式神は高性能なんだな」

「ああー..?」

大和は喚き散らす鬼に向き直る。

そして、感情の籠つていないう田で、こう告げた。

「首が無いのに、喋れるなんてよ」

「はあ？ ロイツ、一体何を…………言つ…………て…………」

「アロリ、と

喚いていた鬼の首が落ちる。

それを見て、鬼達はようやく戦闘体勢に移る。

今まであの少年を注視していたにも関わらず、いつ鬼の首を切り落としたのかまったく解らなかつた。

「俺は今、ひどくイラついている。自分でも驚くぐらいに

森の中、大和の声が響きわたる。

「お前らにハツ当たりすんのは筋違いつてわかつてるんだけどな。
悪いけど、止まれそうにない」

大和は俯きながら、震えていた。

それは恐怖ではなく、むしろその逆

「 テメエら、ハつ裂きにしてやる」

限界まで抑えられていた殺氣が、総本山全てを覆い尽くすほどに拡散する。

鬼よりも鬼のような形相を浮かべて、主を傷つけられた五木大和は怒りの咆吼を上げた。

第十話（後書き）

大和さんがログインしました。

大学が始まるので、更新のペースがかなり落ちます。

一週間に一回ぐらいだと思ってください。

第十一話（前書き）

二つ名メーカーという、名前を入力すればライトノベル風の二つ名がでてくるサイトを知り、試しに『五木大和』と入力してみた。

結果、『^{トリブルバインド}亡骸』

……合ってる！？

第十一話

「くわッ、何がどうなつてやがる！」

「なんだよ、あの化け物は！」

「いいから散らばらんか！　一箇所にいれば終わりじゃぞ！」

現在、刹那達を襲おうとしていた鬼達は森の中を逃げ惑っていた。

その姿はまさに恐慌状態といった様相で、三メートル級の身長と相まって非常に滑稽だった。

「ハツ、ハアッ、ちくしょー！　あんな化け物がいるだなんて聞いた
とらへんぞ！」

彼らはそこいらの術者が操る式神とは一線を画した存在であり、それが書物に名を残すほどの力を持つている。

現在近衛家を襲撃している鬼と比べれば、一体で十数体に匹敵するほどだ。

それほどの力を持つた鬼が多数集結したことで、確かに油断もあつただろう。

相手が子供だといふことも、それに拍車をかけたのかもしれない。

だがそれでも、自分たちがここまで追い詰められるとは、彼らは夢にも思わなかつた。

森の中を走る鬼は、先程起ひつた悪夢を思い出す。

大和達を取り囲んでいる鬼達の心は一つだつた。

先程のような巨大な殺氣を放つ相手に、まともに戦つて勝てるわけがない。

自分達の有利な点と言えば、田の前の少年には守らねばならない存在がいること。

そして、自分達はこの少年を完全に包囲しているところである。

つまり少年が動くと同時に、反対側の鬼が一人の少女を人質にとる。

少年に狙われなければ倒れている刹那達に向かい、狙われた鬼は運が無かつたと諦める。

作戦とも呼べない代物だったが、これが生き残る可能性が一番高いことも事実。

鬼達はアイコンタクトだけでこの作戦を理解した。

「夕闇に誘え　弥勒丸」

少年が解号を唱えると同時に、小さな旋風が『大和』を覆う。

風が晴れた時にはその姿を大きく変え、先端に刃の付いた錫杖が現れた。

五木家の代名詞ともいえる斬魄刀が登場したことにより、鬼達の緊張感が一気に増す。

(直接攻撃系か？いや、外見だけでは判断できへん。何かしらの能力を持つとする可能性もある)

鬼達はいつでも飛び出せるよつて身構える。

仲間の内、誰かが犠牲になるのは確定だが、これほどの殺氣を放つ相手に一体の犠牲で済めば御の字だ。

慚愧がいれば許さないであろう行為だが、鬼達もなりふり構っていられない状況だった。

しかし、その企みは一瞬で破壊される。

少年が錫杖を構えた次の瞬間、三人を中心とした巨大な竜巻が放出された。

「な、なんやと…？」

「ちよ、これは流石にデタラメすぎねつちよつて…。」

これが少年の持つ斬魂刀

弥勒丸の特性。

その錫杖は風を自由自在に操り、全てを呑み込む暴風を発生させる。弥勒丸の生み出した竜巻は全ての鬼を巻き込み、上空へと舞いあげた。

「ぬおおッ！」「これは予想外じゃー！」

「あ、アカン、木が一いつ方に飛んでき……ぐああああ！」

鬼達は竜巻に翻弄され、共に舞いあげられた樹木や岩などに潰される者もいる。

が、それでも過半数の鬼達は、自分達に向かって飛んできた物体を破壊して、なんとかやり過ごしていた。

少年が自ら、嵐の中に追いかけてくるまでの話だったが。

「……はー？」

間抜けな声を出した鬼は弥勒丸によって胴を両断され、淡い光を放

ちながら還つていった。

だが、そこで殺戮は終わらない。

鬼達を叩き潰している樹木や岩を、むしろ足場として用いて、少年は三次元的な動きを見せる。

全てを吹き飛ばす嵐の中、少年にだけ風の精靈が味方につけたかのような幻想的な光景だった。

錫杖の刃によつて首を刎ねられ、柄によつて頭を潰され、石突きによつて心臓を貫かれる。

そこに一切の慈悲はない。

少年に狙われた者は例外なく還されていった。

鬼達は必死に抵抗を試みるが、少年の動きを田で捉える」とすらかなわない。

彼らの目には微かな黒い残像が映るのみ。

刃で体を斬られた瞬間に捨て身で少年を捕まえようとした鬼もいたが、その者の腕は食材のようにみじん切りにされた。

(「なん相手にしどう、命がいくつあっても足りへんぞ！」)

生き残っていた鬼達は、即座に撤退を決意する。

空中の足場を使って、死にもの狂いで竜巻の外へと飛び出した。

これまでの攻防で、竜巻の外へ脱出できた鬼は六体。

完敗だった。

少年の虐殺から逃げ延びた六体の内、一体が木にもたれかかって休んでいた。

「……ここまで来れば、流石に追いつかんやろ……」

そう呟いた瞬間、『あれ、これってフラグってやつやつたっけ?』
と自分で思ったが、少年の気はある場所から動いておらず、既に数キロの距離が開いていた。

少なくとも瞬時に移動できる訳ではない。

ひとまず助かった安堵から、大きく息を吐く。

（一時撤退するつづけことで契約を誤魔化したけど、後でまたあの場所に行かなかんしな……正直割に合わんで）

鬼という存在は、基本的に契約を破ることはできない。

この鬼が命じられたのは、慙愧を倒した者の抹殺と近衛木乃香の拉致。

今は『命令達成が困難なので、とりあえず一時撤退している』といふ名目で少年から逃げているのだが、いつまでもこうしていきはできない。

（他の逃げたヤツらと合流するか……大して変わらんやうつけど、何か工工作戦が思い浮かぶかもしれんし）

そう考へ、鬼はもたれていた木から体を起こす。

だが、完全に起き上がる前に背中の木ごと、体を刀に貫かれた。

「がッ、はあッ……！？」

何が起きたのか、鬼はすぐに理解することができなかつた。

あの少年の気は、相変わらずさつきの場所から動いていない。

だといふのになぜ、自分の心臓は刀に貫かれているのだろうか？

（一体、何が……っ！？）

振り向いた鬼は田を見開く。

彼の視界に映つたもの、それは異常な長さを持つ刀の姿。

その刀は数キロの距離を一瞬でゼロにして、隠れていた樹木ごと鬼を貫いたのだ。

（まさか、刀で射殺されるとは思わんかった……）

鬼から刀がゆっくりと引き抜かれていく。

そう、それはまさしく『狙撃』だつた。

靈核である心臓を完全に破壊され、鬼は地面上に崩れ落ちる。

(狩谷はん……こいつは、アンタの手に負える相手としか思ってこまつせ
……)

「馬鹿な……私の式神達が、消えていく……ー?」

深い森の中、強硬派のトップである狩谷総一郎は驚愕に口を開いていた。

普段から冷静な彼をここまで動搖させている事柄、それは近衛木乃香に差し向けた式神達のことじごとくが擊破されていることである。

狩谷は術者としては超一流と言つても過言ではなく、それに比例して操る式神達の力量もまた高い。

彼が最も信頼の置いている式神である慙愧が還された時も驚いたが、それは情報にあつた桜咲とかいう護衛が相打ちにでも持ち込んだのだろうと考えた。

少なくとも慙愧と戦つて無事でいるはずがないし、保険として用意していた鬼達を向かわせればいい。

どちらにせよ、大勢には影響はないと判断。

彼の計画は、問題なく進んでいると思われた。

だといつのに、彼の放つた式神達は消えていく。

(五木葉一がしづくつた？　いや、確かに葛葉刀子が転移されるのを確認している……となると、他にも護衛がつけられていたのか？)

狩谷は状況を整理しながら、撤退の準備を始めていた。

仮に葛葉刀子とは別に護衛がつけられていた場合、こちらに向かって来る可能性がある。

屈辱はあるが、今はそれよりもこの場を逃れ、機を改めるのが優先だ。

幸い、まだ鬼は数体残っている。

その全てに足止めを命じれば、自分が逃げる時間ぐらいは稼げるだらう。

鬼を招喚する際に使った触媒を手早く回収すると、狩谷は下山すべく走り出した。

縛道の六十六 六杖光牢

「なつ……一?」

だが、数歩も進まぬ内に、六つの光の帯が狩谷の胴を拘束する。

(もう追いつかれたのか…？ いくらなんでも早すぎる……っ！)

あまりに早いタイミングでの奇襲に、狩谷はパニックに陥りかけた。

しかし、すぐに気付く。

つこせつときまで残っていた式神の反応が、今はもう消えていることに。

(おのれッ、こんなところで捕まるわけには……！)

狩谷は必死に脱出を試みる。

しかし、狩谷ほどの術者をしても、ここまで美しく構成された術式はお目にかかることがなかった。

この一欠片の隙もない術式を崩すのは不可能と判断する。

そして、狩谷の取った行動は

「破道の三十三 赤火砲！」

完全な力技。

自らを縛る六杖光牢に、思い切り赤火砲を叩き込む。

「ぬ、ぐッ……！」

無論、それだけの至近距離で赤火砲を放てば自分もただでは済まない。

狩谷の体は爆風により傷ついていく。

だが、狩谷の捨て身の覚悟は確かに実を結び、その身を縛る鬼道は碎かれた。

自由の身となつた狩谷は、潜んでいる襲撃者を見つけるために周囲の警戒をする。

そして、森の奥から声が響いてきた。

「どうして、そこまでくる？」

「どうして、だと？」

狩谷は声の出処を探るが、どうやら鬼道で声が散らされているらしく、場所はわからなかつた。

舌打ちしそうな内心を抑えて、この状況を開拓する策を考えるために会話で時間稼ぎをする。

「どうせ、貴様らは我々のことをただの危険分子としか見ていないのだろうな。我々の思想こそが、関西の生き残る唯一の道だというのに」

長の娘を拉致するつてのも、その第一歩か？

「ああ。木乃香嬢を使って長を脅し、関西の新しい方針を表明させるつもりだった。それが貴様のせいだ、全て水の泡になりそうだがな」

狩谷の腕からは血がとめどなく流れだし、赤い水溜まりを作つていた。

出血のせいだ意識が朦朧とし、打開策が思いつかない。

だが、狩谷の口は止まらなかつた。

「関西の勢力は、関東に比べれば非常に小さな組織なのだ。長年日本トップでいたせいで野心は薄れているし、魔法世界に後ろ盾があるわけでもない。これほどの力の差があつてなお、健全な関係を結べると思つか？」

否、と狩谷は断言する。

「かつて関西が不当に攻め込まれたにも関わらず、ろくな謝罪もよこさなかつたのがいい証拠だ！ 我々は舐められているんだよ！ どうせその気になればいつでも滅ぼせるのだから、今はどいつもい、とな！」

狩谷の言葉に熱が籠る。

時間稼ぎのための会話は、いつの間にか本来の目的を外れていた。

「稳健派などと謳っているが、その実態は関東に媚を売つているだけに過ぎん！ 戦うのが嫌だという理由だけで、武力を持たないと、いつ危険性が理解できていないのだ！ このままだと関西は自然消滅するぞ！」

(……正論だ)

大和は森の中に身を潜めながら、狩谷の言葉を聞いていた。

既に頭も冴え、狩谷の言葉を分析できるぐらいの余裕は回復している。

つまり狩谷の言いたいことは、関西には力が必要だということ。

別に戦争したいがために力をつけるというわけではない。

対等でない者達が、対等な関係を結ぼうとしても、必ずどこかで綻びが生まれるのだ。

そしてその綻びこそが、二十年前の総本山襲撃事件である。

大和が襲撃者を葬つたことで難を逃れたが、その大和も事件の後に関西を抜け、関東に対抗できる術を失った。

(責任の一端は俺にもあるってことか……クソッタレめ)

思わず拳を強く握りしめる。

大和が狩谷と戦っている理由は、刹那が傷つけられたからだ。

関西の将来などを考えて戦っていたわけではない。

しかし、じつして狩谷の目的を知った以上、彼の思想に少なからず賛同してしまう自分がいた。

(詠春さんは、後で話し合ひが必要があるな……)

大和はそう決意すると、鞄から刀を抜き放つ。

確かに狩谷の言いたいこともわかるが、木乃香を拉致し、刹那を傷つける方法まで認めるとはできない。

故に、大和は狩谷を無力化する道を選ぶ。

鳴け

清虫。
すずむし。

解号と唱えると同時に大和の刀が変化、鐔に小さなリングが現る。

そのリングを中心として、指向性を持った超音波が狩谷に放たれた。

「つッ……！」

三半規管を直接搖さぶられ、狩谷の体が傾いでいく。

大量に出血したことに加えて、体のバランスを司る器官を攻撃されればひとたまりもない。

狩谷は執念だけで踏ん張り、倒れる寸前にこう言った。

「貴様ら穩健派のせいで、大和さんが犠牲になつたのだ……！」

薄れゆく意識の中、狩谷は昔の記憶を思い起します。

まだ幼い頃、鬼道の才能が無いことに悩み、誰も頼れなかつた自分に話しかけてくれた人のことを。

鬼道にはコツがぁってね、まず黒い穴がぽつかりと空いているのを想像するんだ。そして、その穴の中に飛び込むイメージを持つてじりん。

そうやつ、そんな感じだよ。呑み込みが早いね。

きっと君は一流の術者になれる。その力を誰かのために使ってくれたら、僕も嬉しいかな。

あの人からしたら、落ち込んでいる少年に気まぐれでアドバイスをしただけなのだろう。

きっとすぐに自分のことなど忘れてしまったに違いない。

でも、彼の言葉は全て、自分の中に残っている。

だから、彼に全てを押し付けて、のうのうと暮らしている穩健派を憎んだ。

(結局私は、あの人の仇を討ちたかっただけか……)

今の自分を、大和さんが見たら何と言つだらうなと自嘲し、狩谷の意識は闇に落ちた。

狩谷が完全に気を失っていることを確認すると、大和は自らの姿を隠す鬼道である曲光を解除した。

「あの時の、子供だったのか……？」

まだ京都にいた頃、大和が修行をしようと見た時に見かけた子供。落ち込んでいる様子だったので話しかけてみれば、鬼道の才能が無いことを苦しがっていた。

だからちょっととしたコツを教えてあげたのだが

「そうか……もう一十年も経っているんだもんな……」

あの時の子供は大人になり、決して曲げぬ信念を宿していた。

よく見れば、確かにあの頃の面影がある。

「……鬼道、ちゃんと練習してたんだな」

狩谷に田を覚ます様子はない。

鬼を招喚するのに大量の魔力を消費していたことに加え、かなりの量の血を流していた。

少なくとも、丸一日は起きないだらう。

そして目が覚めた時には、既に捕らえられているはずだ。

「事情は話しておくれよ。お前はお前なりに、関西を守りつつしていたんだ、って」

処罰は免れないだろうが、詠春の性格からいつて極刑もないはずだ。

それと、と続ける。

「……」めんな。俺はお前が思つてこぬせび強くない

自分はあの時、色々なものから背を向けてた

詠春や鶴子、素子達から。

夢や理想、そして何より、守ると誓つた少女からも。

その裏切りは大和の胸にトゲとして突き刺さり、今だに消えない

大和は自分の右手を見る。

手の輪郭は薄れており、その奥の地面が透けて見えた。

木乃香から魔力供給を受けて実体化したといつても、所詮は仮初の肉体。

大和が死人だという事実は変わらない。

タイムリミットが近づいていた。

「……こんな俺でも、あの小娘一人救えたのなら上出来か」

大和は索敵範囲を広げ、刹那と木乃香の場所を探る。

二人の位置は変わっておらず、穏やかな気の様子から無事でいることが窺えた。

そして、その一人に凄まじい速度で迫る気の反応が一つ。

「つ、まだ残党がいたのか！？」

大和はあの一人から迂闊に離れたことを後悔した。

この移動速度から推測するに、相手はかなりの実力者。

急いで刹那達の下へ走り出すが、消えかけたこの体で自分に何ができるだろう。

「くそッ！！」

走る、走る。

消えかけた足で、大和は必死に走り続けた。

（頼む、間に合ってくれっ……！）

早めに気づけたのが幸運だったのだろう。

大和は気の持ち主よりも先に、あの思い出の修行場所までやつてくれることができた。

しかし、相手もすぐにここまでやつてくるだろう。

（左腕が消えた。右足もほとんど消えてる……守りきれるか……？）

刀を右手に握り締め、相手を待ち構える。

正直、達人を相手に戦える状態ではない。

それでも、せめて相打ちには持ち込む覚悟だった。

そして、川の向こう側に現れた人物を見て、大和は目を見開く。

「え……？」

その声は、どちらのものだったか。

相手もまた、信じられないといった表情でこちらを見ていた。

「刀、子」

「大和……君……？」

そこにいたのは、かつてこの場所で自分が守ると誓い、そして裏切ってしまった少女だった。

第十一話（後書き）

この小説では詠春さんも色々頑張っていますので、そいりへんは後でちゃんと説明します。

第十一話（前書き）

更新が遅れて、本当に申し訳ありません。

大学、教習所、深夜バイトのコンボをくらつた……

狩谷というカリスマを失った強硬派が瓦解するのに、それほど時間はかからなかつた。

元々強硬派は少数だつたことに加え、そのほとんどが狩谷のかき集めた私兵だ。

リーダーの策が失敗したことを知ると、本山で詠春の足止めをしていた術者達も降伏した。

「ここに、狩谷総一郎の起こした謀反は終結する。

しかし、何よりも大変なのは事後処理だつた。

狩谷は関西の事務処理のほぼ全てに何らかの形で関わつてゐる。

そのような人物が起こした反乱は、関西に大きな波紋を発生させた。後釜を決めるだけでも一苦労だ。

詠春は一週間、ほとんど徹夜で各地を駆け巡ることになる。

そして肝心の大和は「

『ひ、久しぶりだな……刀子』

「……………」

修羅場に突入していた。

『……そんな訳で、今まで剎那と共に過ごしていました』

剎那は大和から応急処置を施されたこともあり、既に目が覚めている。
なので詠春達に事情を説明するべく、近衛家の屋敷の一室まで来たのだが

木乃香はまだ意識が戻ってはいないが、外傷はほとんどなく、単に精神的な疲労と診断された。

あの事件の後、剎那達は本山まで搬送され、そこで専門の治癒術者による治療を受けた。

室内には詠春と鶴子、そして刀子がいる。

刹那に持つてこられた大和は、今までのことを全て話した。

オスティアで体を失つたが、意識は残つていたこと。

刹那の氣を貰^うつことで糸が繫^{バズ}がり、意思疎通ができるよつになつたこと。

そして、今回の戦いに参加したことなど、全て話した。

戦つている最中に大和の氣を感じていたのか、詠春達は予想よりも早く、この事実を受け入れた。

「……本当に貴方なのですね、大和君」

『ええ。精神だけの話ですが、未だに生き恥を晒してあります』

「そうですか……良かつた、本当に……」

詠春は思わず目頭が熱くなるのを感じた。

彼からすれば、良かったなどといつも葉で片付けられるものではない。

京都で起きた西洋魔法使いとの戦い。

そしてオステイアの崩落。

大切な友人に一度も重荷を背負わせてしまったことを、詠春は深く悔やんでいた。

たとえ精神だけの存在としても、大和が生きていてくれたことは詠春にとっての救いである。

『ひ、久しぶりだな……刀子』

「……そうですね」

『……』

「……」

会話が途切れれる。

刀子は最初からずっとこの調子だった。

大和の方を見ようともせず、話しかけても生返事しかよこさない。

その様子を見かねたのか、鶴子が大和に話しかける。

「まさか妖刀になつとつたとは、大和はんは相変わらずウチの予想を超える人やなあ」

『……だからな鶴子。俺は妖刀じやないつつの』

「やつぱり恋愛対象は刀なん？ ウチが『ひな』とお見合いさせたろか？」

『無機物に惚れる性癖はねえよ…』

鶴子もまた、旧友との思わぬ再会に心躍らせていた。

魔法世界で大和に何が起きたのか、鶴子も既に詠春から説明を受けている。

もう会えないとばかり思つていたので、再会の感動も大きかつた。

『まつたく……お前のその性格は相変わらずだな』

「大和はんかて、口調こそ変わつとるけど中身は全然変化しておまへん。お人好しなどこりとか、あの頃のまんまや」

『……』

過去の話を持ち出され、大和は黙り込む。

二十年前、大和は彼らに一言の別れも告げずに逃げ出した。

その負い田は今でも消えずには残っている。

『鶴子……俺は……』

「大和はんが京都を飛び出してまつから、ウチと大和はんとの婚約も全部パーなつてもうて、エラい騒ぎになつたんやで？」

『え……？』

「は……？」

「……ほへ？」

大和、詠春、刹那の順番で、妙な声を上げる。

刀子はこの話を知っていたのか、俯いたまま大した反応を見せなかった。

とは言つても、この話題が出た瞬間に肩がぴくりと震えたのが。

「お、おい鶴子！ そんな話、私は一言も聞いていないぞー！」

いち早く正氣に返った詠春が叫ぶ。

大和は驚きのあまりに声が出なかつたが、完全に同意見だった。

ちなみに刹那は口を開けて放心している。

話についてこれなかつたようだ。

「まあ婚約言つても口約束レベルやつたし、正式なもんどうやうか
つたけどな」

鶴子は何でもないよう言つが、詠春と大和は呆気に取られていた。

二人にとつては寝耳に水もいとこである。

刹那は相変わらず放心していた。

そして鶴子は再び爆弾を投下する。

「それに、婚約の話を持ちかけてきたのは、そっちの方やで？」

『はあああああああああッ！…？？』

「ちよ、どうこう」とだ大和君！ 鶴子に求婚したのか！？

『俺だつて初耳ですよ、そんな話！』

大和と詠春が言い争い、刹那は放心し、鶴子はその光景を見て笑う。

その場はどんどんカオスになつていった。

「鶴子、からかうのもその辺にしておきなさい。青山家と五木家との間に、そういう話が持ち上がつただけでしょ!」

そんな状況を収めたのは刀子だった。

不機嫌を隠そつともしない声音と共に鶴子を睨む。

「家同士の……話?」

「ええ。青山家と五木家の当主達が『お互いの子供を結婚させよ!』などと酒の席で言つただけです。この話に大和……さんは一切関与していません」

刀子は大和達に簡潔に説明する。

確かに一人の間に婚約話が持ち上がつたことはあつたが、酒の勢いに任せた戯言であり、正式なものではない、と。

『酔つぱらい達の戯言かよ……驚かせやがつて』

「まつたくだ……」

大和達は事情を聞いて、一気に脱力する。

ここから先は鶴子も知らないことだが、実のところ、当主達はこの婚約にかなり乗り気だった。

五木家当主の元蔵からすれば、この話は権力を得るのに最適であつたし、青山からしても実力、人間性、家柄の三拍子が揃つた大和はかなりの好物件だったのだ。

さらに言えば、大和と鶴子は共に修行していた仲。

顔も知らない相手と結婚させるよりかは……という親心もあつた。

大和が脱走さえしていなければ、間違いなく後戻りできないところまで話が進められていただろう。

そんなことは露知らず、大和は安堵の息を吐く。

「この話を聞かせた時の刀子の反応が、これまた傑作やつたんよ。
『たとえ鶴子ちゃんが相手でも、大和君は譲らな……』」

「な、何を言い出すのですか、鶴子！？」

「ニヤニヤと話す鶴子を、顔を真っ赤にして羽交い締めにする刀子。

この部屋の人間は、完全に鶴子のペースに巻き込まれていた。

「あ、言つとくけど、今のウチは旦那一筋やで？」

『……お前に言つたことは色々あるが、とりあえず疲れたよ……』

「同感だ……」

大和と詠春は大きくため息をつく。

そんな一人を見て、鶴子は小さく声でいついつついた。

「 だつて、こんな話題でもせんと、ウチらはギクシャクしつぱなしゃんか」

ポツリと呟かれたその言葉に、三人の動きが止まる。

「今」に素子はおらんけど、それでも二十年振りに大和はんと会

えたんや。さつきみたいな妙な遠慮は抜きで、またあの頃みたいに笑いあいたいんよ』

『……』

大和は皆で修行していた時代を思い出す。

眞面目だった他の四人と比べて、鶴子はよく悪戯などを企んでいた。でもそれは自分のためではなく、他の四人を笑わせようとするためのこと。

青山鶴子という人間は、誰よりも他の人間の笑顔を大切にしていた。

『本当に、お前は変わらないな……』

『昔よりも美人になつた自信はあるで？』

『はは……確かに』

晴れやかに笑う鶴子に対し、大和と詠春は苦笑するしかなかつた。

(またあの頃みたいに、か……)

思えば、あの修行場所では五人の間に壁など存在しなかつた。

身分も年齢も忘れて、ただ一人の人間として接することができた。

だというのに、大和は誰にも相談せずにその場所を去り、結果として全員が疎遠となってしまった。

その咎は間違いなく、大和にある。

(責任なんて取れるはずもない……でもせめて、けじめだけは……)

大和は決意すると、黙り込んでいた刀子に話しかける。

『なあ、刀子』

「……なんですか」

刀子は大和から視線を外しながら返事をする。

その反応が大和の心を僅かに抉つた。

だが、大和はその痛みを噛み締める。

自分の犯した過ちから、田を背けないために。

『お前と、腹を割つて話したい』

その言葉を出した瞬間、刀子が弾かれたように顔を上げた。

「今更……今更、貴方がそれを言うのですかっ！　二十年前、私達に何も言わずに去ったくせに！　今更腹を割つて話したいなどと…」

『…………そうだ』

大和の冷静な声に、刀子の我慢が限界を迎えた。

二十年の間、ずっと大和に言いたかつたことが口からあふれ出す。

「ふざけないでください！　大和さんに置いていかれた私達の……私の気持ちが、分かるものか！」

刀子は叫ぶ。

感情の赴くままに。

「あの頃の私はずっと不安だった！ 大和さんがいつか、弱い私を置いていくんじゃないかなって！ どうせそのことにも気づいていたかったのでしょうかー？」

最早、刀子自身も自分が何を言っているのか理解していない。

「大和さんに置いていかれたくない一心で、私はそれまで修行をしていたというのに！」

それでも、言葉だけは流れ出る。

「なのに、貴方はあっさりと消えてしまつたー。何の未練もないとでもいうやつだー。」

今まで自分すら理解していなかつた思いまで、大和に叩きつけてゆく。

「ついこの間、桜咲が修行を依頼しに来た時だつてそうだ！ 大和さんは私に気づいていながら、何の反応も見せなかつた！ やはり私のことなんてどうでもいいと……！」

『違う……』

大和が初めて言葉を挟んだ。

「じゃあ、どうして私に語りかけてくれなかつたのですか！」

『お前が、俺のことを忘れたがつていると思つたんだ』

あの時、刀子は大和のことを『知らない』と言つた。

だからこそ大和は何も言わなかつた。

刹那にも、何も語らせなかつた。

自分が消えたことを忘れてくれるならば、それもいいと思ったが故に。

忘れでもしなければ耐えられなかつた、刀子の思いに気づくことなく。

『……すまなかつた。いくら謝つても、許してもらえたとは思つて
いない』

ただ、と続ける。

『お前の存在が、俺の中ではどうでもいいこと。これだけは
否定させてくれ』

刀子がハツと顔を上げる。

黒い瞳に微かに浮かぶ涙。

大和は成長した幼馴染の顔を見て、本当に美人になつたな、と思つ
た。

『俺はオステイアで犠牲鬼道を使い、この体になつた』

大和はその時のこと思い出す。

アリカの苦惱。

『紅き翼』達の怒り。

体が消えていく恐怖。

そして

『体が消えていく中、俺が最後に考えたのはお前のことだよ
子』

刀

約束を守ることができた、喜び。

『俺は、お前のことを軽んじたことは一度もない。……頼む、信じてくれ』

「……」

刀子が黙り込む。

大和は自分の思いを全て語りきった。

これ以上言つべき言葉はない。

そしてしばしの沈黙を挟み、刀子が口を開く。

『…………わかりました。貴方の言葉を信じます』

心から安堵する。

大きな肩の荷が下りた気分だった。

二十年の間、ずっと大和を苦しめていた罪悪感。

それが、ようやく消えたのだ。

「ただし、許すのは」の前、私に語りかけなかつたことだけですが

『ありが……ん?』

『えつと……刀子さん?』

「大和『君』にも事情があつたことは理解しました。しかし、二十年前に頼られなかつたことは別問題です」

刀子は立ち上がり、ゆっくりと刀を引き抜く。

野太刀には既に刀子の氣が込められ、溢れ出た分がバチバチと発電現象を起こした。

刀子は大和に向けて満面の笑みを見せる。

大和はその笑顔を見て、背筋に氷を突っ込まれたような錯覚を覚えた。

「……というわけで、これから一十年間の恨みを思う存分、晴らさせていただきます」

(……あれ、さつきまで綺麗に終わりそつだつたのに、どうしてこうなつた)

『もっと速く走れ、小娘！ 追いつかれるぞー。』

「そ、そんなん言つても、ウチ関係無いやないですかああああああ！」

！

「待ちなさい！ 今すぐその刀身を叩き折つてあげますからー。」

『ヤバい、刀子の奴、完全に田がマジだー。』

(そ、そりや！ 狙われてるのは大和さんだけだから、大和さんを捨てていけばウチは助かるー。)

『言つておくれが、俺を捨てたら、ぶつ飛ばすぞー。』

「あんまつやああああああああああああああ…」

「神鳴流奥義！ 雷光剣！」

「『ひわああああああああああああああああ…』」

三人が部屋から去り、詠春と鶴子が残される。

「なあ鶴子……あれ、放つておいていいのか？」

「いいんじす。一十年振りに会えたんやから、ちよつとくらじ甘えさせればええんよ」

(あれで甘えているのか……?)

遠くから落雷のような轟音と、一人分の断末魔が響く。

とりあえず、屋敷が崩壊しない範囲で甘えて欲しいな、と思つ詠春
だった。

「やつにえば、もつ一つだけ聞いていいか?」

「なんどす?」

「鶴子はさつき『今では旦那一筋』と言つていたが……お前、ひよ
つとして昔は……」

「詠春はん」

鶴子は詠春の言葉を遮る。

そして、笑顔と共に言い放った。

「それ以上は、無料やで？」
「……そうだな。悪かった」

第十一話（後書き）

刀子回……ではなく鶴子回になつたよつな気がする……
詠春の政治のお話は次回になります。
纏めきれなかつた……

第十二話（前書き）

いいですか、この世界には年齢詐称薬といつものがありますね（
ry
え？ 乃子さんの年齢がヒロインに粗心しくなって？

第十二話

『バカファイールドの家が、此処に?』

「ええ、家というよりは別荘ですが。アイツは世界中を飛び回っていたので、よく立ち寄る京都に居を用意したのです」

刀子が暴走した日から数日。

現在、大和達は詠春に連れられて、アスファルトで整備された山道を登っていた。

鶴子は旦那を迎えて行つたために不在だが、刀子と、意識を取り戻した木乃香も一緒である。

あれから詠春と話し合つた結果、木乃香に魔法の存在を教えることが決まった。

木乃香の立場上、いつまでも教えないといふわけにはいかないし、今回の事件で鬼など色々見られている。

誤魔化しきるのは難しく、そして記憶を操作するのは親の心情的にも辛い。

そのような事情から、木乃香には裏の世界の存在を知った。

「といつことは、せつちゃんも魔法使いなん?」

「い、いえ、私はただの剣士で……」

「でも、この前ウチを守ってくれた時に変身してたえ? 真っ白い着物の格好に」

「あれはどちらかというと大和さんの能力というか、斬魄刀の特質といつか……」

木乃香には大和の存在も知らされた。

刀が喋るという事態に最初は驚いた木乃香だったが、その刀が以前に自分達を助けてくれたものだと判ると、あっさり受け入れる。

そのおおらかさには大和でさえも舌を巻いた。

「大和さん、それ本当?」

『……本当だ。刹那と袖白雪の相性が予想以上に良かつたんでな。話には聞いていたが、俺も直に見るのは初めての現象だつたよ』

「つまり、せつちゃんには才能があるってことやね?」

『む……』

「のよ'りこ、答えにいく質問をしてくる時もある。

油断ならないヤツだ、と大和は氣を引き締めた。

「……」

ふと刹那の顔を見てみると、キラキラした目でこちらを見ている。

その姿は「さ」となく忠犬を連想させた。

……褒めて欲しいのだろうか。

『確かに相性は良いが、それだけだ。まだ実戦に出れるレベルじゃない』

「あ'り……」

大和がやつ言つと、刹那は餌抜きを宣告された犬のようになだれる。

その頭には、伏せられた耳が幻視するほどの落ち込みようだった。

ふと木乃香の方を向くと、思惑が外れたのが悔しいのか、拗ねたよ

うに頬を膨らませている。

(確信犯か……)

やはりコイツは侮れないな、と大和は思った。

『それで詠春さん、狩谷のことですが……』

ナギの別荘が見えてきた辺りで、大和は狩谷の話題を切り出す。

彼は一体どのような処罰を受けるのか、と。

「……ええ、彼は彼なりに関西の未来を考えてくれていたことは理解しています」

詠春も真面目な顔つきに戻り、歩きながら大和の問いに答える。

狩谷の謀反は失敗に終わったが、それまでたしめでたし、という

わけにはいかない。

「しかし、彼にしかるべき処罰を与えなければ、それは後々大きな禍根となります。……無罪放免は不可能なんですよ」

『……でしょうね』

「今日の明け方に上層部と会議をした結果、狩谷君を京都から追放する」ことが決まりました」

『ツ……』

狩谷はそのカリスマをもつて、多数の術者を扇動し、京都の頂点たる近衛家を襲撃した。

さらばに、長の娘を拉致しかけるという罪状まである。

正直な話、極刑にならないのが不思議なぐらいだ。

「……すみません、私の口添えでは減刑がギリギリでした」

『いえ、命があるだけでも良かつたと思わなければ……』

大和はそう言つたが、その心中は穢やかでなかつた。

今回の謀反、元を辿れば自分にも責がある。

大和が京都に残り、関西の主戦力として振舞つていれば、メガロへの抑止力にも成りえたはずだ。

そうすれば関西が現在のように、メガロから圧力をかけられるような状況も無かつたに違いない。

(狩谷……)

遠い昔、一度だけ鬼道のコツを教えただけの相手。

それ以外の接点などない。

しかし、彼は一度会つただけの大和のために命をかけた。

誰よりも京都と、京都に住む人々を愛する彼が追放されるという事実は、大和の胸を抉つた。

(俺は……無力だ……)

「そして狩谷君には、上層部には極秘でヘラス帝国に向かってもうつもりです」

『え……？』

大和は詠春の言葉を、咄嗟に理解できなかつた。

しかし次の瞬間、大和はそれ以上の衝撃を受ける。

「我が関西呪術協会は、ヘラス帝国と同盟を結ぶことが決定しまし

た

『なつ……』

「こちらが差し出すものは陰陽道、そして鬼道の基本的な技術です。見返りは連合からの保護。正直、破格の条件でしょう」

関西呪術協会は日本の中では最大勢力だが、世界レベルで見れば、お世辞にも大きい勢力とは言えない。

しかもその性質は閉鎖的であり、外交にしても陰陽道などの技術面以外での利権もない。

ヘルス帝国にはほとんど得のない同盟である。

『どうしてそんなに好都合な同盟が……』

「貴方の御陰ですよ、大和君」

『え?』

「ここの前対談した時、テオドラ王女が言っていたのです。『妾がヤマトから受けた恩は、こんな形でしか返せない』と」

『……』

それは違う、と大和は言いたかった。

救われたのは自分の方だ。

拳闘士紛いに身を墮とし、何を為すべきか解らなかつた時代。

テオドラに拾われたことが全てのきっかけだった。

皇女なのに素行が悪く、そのくせ人一倍本国の民を愛する不器用な少女。

彼女に振り回される日々が、今でも鮮明に思い出せる。

「このひらはたつた一回知識を提供するだけ。そして向こうひまは長期間、連合からの防波堤となってくれる。この同盟は率直に言うとお情けです。しかし、私はそれに甘え続ける気はありません」

この日本には、既に開拓できる部分がない。

代わりに存在するものといえば、絡まつたしがらみだけだ。

そこで詠春が田をつけたのは魔法世界。

「狩谷君にはヘラス帝国を拠点として、魔法世界で独自に動いてもらつことになります。人脈作りに、西洋魔法の知識の収集、流通ルートの確保……いずれ関西が魔法世界に進出する時のために」

そして最終的に、ヘラス帝国に一方的に保護されるのではなく、相互に利益を生み出せる関係に。

これが詠春の選んだ道。

『……とんでもなく険しい道ですよ』

「覚悟しています」

『少なくとも数十年単位のプロジェクトになるでしょう』

「遣り甲斐があるではないですか」

詠春は屈託なく笑う。

「　　言つたでしょ？　貴方にだけ全てを背負わせないと」

大和はその笑顔を見て、この人はやはり、自分達の兄貴分なのだと
思った。

そして一行は、天文台が備え付けられた家に到着する。

『へえ……あのバカの家にしてはオシャレだな』

「モダンやなー」

ナギの家の内装を見て、大和と木乃香がそのような感想を漏らす。

多数の本で埋めつくされた家にはソファなどもあり、中々住み心地が良さそうだった。

「それでは大和君に説明しましょうか。あの後、私たち『紅き翼』がどのように行動したのかを」

詠春がここに大和を連れてきたのは、あの大戦で大和が消えてから何があつたのかを語るためだ。

オステイア難民の援助。

アリカに着せられた冤罪。

二年間に及ぶ、『立派な魔法使い（マギスティル・マギ）』としての活動。

そして、アリカの救出劇まで。

「そこでナギの奴、私達の前でプロポーズまでしたのです」

『はは……アイツも約束を守りましたか』

彼らの物語を聞いて、大和は安心する。

自責の念に駆られるアリカを救える人間、それはやはりナギしかいなかつた。

自分が消える際に託した願い。

その一方的な約束を、ナギは守り通したのだ。

(よくやつた……バカファイールド)

大和と詠春は、その後も『紅き翼』の話題で盛り上がる。

その内容はとりとめのないものであり、ラカンを氷漬けにした時の話や、アルビレオが女と間違えられた時の話などだ。

刀子も、自分が知らなかつた時代の大和のことを聞けて満足そうである。

そして木乃香と刹那は

「むー、お父様達ばかり盛り上がりがつとむ。ウチらのこと忘れとるんぢやうの?」

「お嬢様、そう言わずに……」

木乃香は話題について行けずに拗ねており、刹那はそんな木乃香を宥めていた。

古今東西を問わず、子供というのは親同士が頭上で会話をするのを嫌うものである。

手持ち無沙汰になつた木乃香は、家中で面白い物を探して回る。

そして、棚の上に写真立てを見つけた。

「これって……お父様の写真?」

その写真の中には、七人の男がいた。

若かりし詠春も写つており、他にも一メートルを超すほどの大男や、木乃香ほどの子供もいる興味深い写真だ。

しかし、それよりも木乃香の好奇心を刺激したものがある。

「ここの黒い着物の人つて……」

一番前に立つている一人の内の片割れ。

赤毛の少年が気に食わないのだろうか、顔を背けている黒髪黒目の中年。

この人物は見覚えがあつた。

木乃香は大和を見て、手に持つた写真に視線を移す。

「……」

もう一度大和を見て　今度は刹那を見る。

「……」

木乃香の頭にとある策が浮かび上がる。

それが成功した時を想像して 木乃香はニンマリと笑つた。

「といつ訳で、ナギは数年前から行方不明扱いになつています」

『なるほど……でも心配はないでしょ。あのバカのことですし、どうせどこかで王女さんとイチャついてますよ』

「はははは……」

談笑する大和と詠春の側で、刹那はやることもなく突つ立っていた。

暇ではあるが、『大和』を背負った状態で歩き回つたら会話の邪魔になる。

よつて、木乃香のように家の探索もできない。

(大和さん、楽しそう……)

旧友と会話しているからか、大和の声はいつになく弾んでいた。

刀子は会話に参加しないものの、一人の会話に相槌を打つ。

三人の間にはとても自然な雰囲気が流れていた。

刹那はその三人を見て、ある種の不安に駆られる。

(大和さん……本当にウチなんかが持つとつてええ人なんやろ？
……？)

木乃香が一階から降りてきたのは、そんなことを考へている時だつた。

「せっかやん！ 見て見てーー。」

「お嬢様？」

声の方向に振り向くと、木乃香が片手に写真を持って階段を降りてきていた。

木乃香は刹那のすぐ側まで来ると、口を耳に近づけて内緒話の体勢になる。

(せつぜん、しののめの家で写真を見つけたんよ)

(はあ……それがどうかしたんですか？)

「じつじつと口づき話をするのか疑問だったが、とりあえず言葉を返す刹那。

(まじめ見て、お父様も[笑つ]る)

(ずいぶんお若いですね。結構古いものみたいですね)

(それで聞きたいやけど、せっかやんはこの中では誰が一番かっ

「ええと思つ?」

(ええつ?)

木乃香の唐突な質問に、刹那は戸惑つ。

(や、そんなの急に言われてもつ……)

(ええやんええやん。教えてーなー)

刹那は再び写真を見る。

[写つている七人はタイプこそ違えど、全員美形だった。

これなら木乃香が好みを聞きたくなるのも仕方ないか、と思つて刹那は悩み始める。

(タイプの人か……今まで考えたこともなかつたけど)

ふと、一番前にいる少年に目がいく。

(黒髪黒目に着物……日本人?)

どちらかといえば冷たい印象の顔立ちなのに、赤毛の少年から顔を背けている様子は子供っぽく、それが不思議と可愛いと思えた。

(ちなみに、ウチのオススメはこの人やえ)

そう言って木乃香が指さしたのは黒い少年。

ならば木乃香と一緒にいかと思い、刹那もその少年にすることにした。

(じゃあ私もこの人で)

刹那がそう言つと、木乃香の笑みが一層深くなつた。

そのことを疑問に思う前に木乃香は行動を開始する。

「お父様ー、コレ見てー」

「おや……これはまた懐かしい写真ですね」

「お父様の若い頃の写真、ウチ初めて見たえ」

木乃香は写真を詠春に見せびらかす。

刹那はそれをぼーっと眺めていたのだが、次の瞬間　とんでもない爆弾が落とされた。

「せつちゃんはその中では、黒い着物の人人が好みらしいんよ」

『』

「」

「」

大和、詠春、刀子が黙り込む。

先程までの和やかな空気は一変し、ざわざわ妙な雰囲気になった。

「お、お嬢様！　何もこんな場所で言わずとも……」

「せつちゃんの好み、大和さんはどう思つ?」

木乃香のいきなりのカミングアウトに慌てる刹那だが、木乃香は無視して『大和』に近づいていく。

『お、おい、お前何を』

『えーっと、いつもやるんやつたかな　来れ、『大和』！』

『ちょ、待……』

大和の制止も聞かず、木乃香は『大和』に魔力を送り込む。

近衛家の魔力を送られた『大和』は強く発光し　黒髪黒目の中年が実体化した。

『……』

それを見て、今度は刹那が黙り込む。

木乃香の写真に写っている人物が自分の刀から現れ、刹那の頭は真っ白になった。

ふと、少年と目が合ひ。

少年は半笑いのような表情を作り、こいつ言った。

「やつこやお前って、俺の顔知らなかつたっけ……？」

刹那はその声に聞き覚えがあつた。

とこりょうり、毎日聞き続けている声だつた。

視線をズラすと、満面の笑みを浮かべた木乃香の姿。

そして、全ての事情を悟つた刹那は、

「 ッ！？」

声にならない悲鳴を上げて、逃げた。

顔を真っ赤にし、玄関から脱兎の如く逃走する。

取り残されるのは幼馴染三人と、ニコニコ笑顔の木乃香。

呆然と立ちすくむ大和に対し、刀子がボソッと一言。

「口リハ」

「違つ……誤解だ、刀子……」

どうしてこうなった、と大和は頭を抱えるのだった。

「はあっ……はあ……」

息を切らせた刹那は、近くの木に手を置く。

家を飛び出した勢いのまま走り続け、とうとういつもの修行場所まで来てしまった。

(これまでんまり意識せえへんかつたけど、大和さんは刀じゅな
くて人間……今までとんでもない恥ずかしい姿見られてたああああ
ああああああ！－？－？)

心の中で絶叫する。

大和が元々人間だったことは知っていたが、実のところ、刹那はそれほど気にしていなかつた。

知識はあっても、実際に大和が人だった頃を見たわけではない。

そのため、刹那に実感はあまり湧いていなかつた。

「へへッ！！」

感情がオーバーヒートした刹那は、近くの木を殴り始める。

たとえ子供の腕力といえど、氣で強化されている拳の威力は強い。

大人でも抱えきれないであろう太さの幹が震える様は、いつそ壯觀であつた。

「……いい加減にしろ。へし折る氣か」

本職のボクサーも真っ青なラッシュьюは、後ろから腕を掴まれたことによつて唐突に終わる。

「やや、大和さんっ！？」

「物体を激しく殴打する音がしたから来てみたが……何やってんだ、お前」

「！」、これはそのですねっ！ 別に動搖してるとかではなくつ！』

「……はあ

要領を得ない説明をする刹那を見て、大和は頭を搔く。

「木乃香の悪戯なんて、俺は気にしていない

「え……」

「せつせと戻るぞ。詠春さん達も総本山に帰ったしな

そう言つて、大和は刹那に背を向けて歩き出す。

「ま、待つてくださいー！」

「ん？」

去つていく大和に、刹那は反射的に声をかけてしまつ。

別に話したいことがあるわけでもないのに。

「どうした、刹那」

「えっと、その……」

どうすればいいか悩む刹那の頭に浮かんだのは、ナギの別荘で思ったこと。

刀子や詠春と親しげに話す大和を見て、思ったこと。

大和さんは、本当に自分の下に居ていい人なのだろうか……？

「大和さん」

気が付けば、口から言葉が出ていた。

「どうした、刹那」

「大和さんは、えっと、その」

「……何だ、はつきり言え」

刹那の体が微かに震える。

刹那の心を満たす感情、それは恐怖だ。

今から口にする言葉は、下手をすると大和と決別する言葉。

言わなければいい、ともう一人の自分が囁く。

言わなければ、この関係が少しでも長く続く筈だと。

でも

「大和さんは、ウチよりも刀子さんの側にいたいですか？」

聞かずにはいられなかつた。

「……は？」

その質問を受けた大和は目を丸くする。

心底意外な質問を受けた、とでもいつよつて。

「だ、だつて、刀子さんはウチより強いし、それに大和さんとは親しいじゃないですか。こんなウチよりもよっぽど……」

「……」

「刀子さんは美人やし……ウチはあの鬼に色気がないって言われた

し……」

「……はあ」

大和は大きくため息をつく。

刹那がどうしてこんなことを言に出したのか、ようやく察しがついた。

（刀子や詠春さん達と親しげに話しているのを見て、俺が取り上げられないか不安になつたわけか）

合点がいった大和は刹那の下へ歩いていく。

刹那は未だにブツブツと『私だって成長すれば……』とか呟いており、大和が近づいて来ていることに全く気づいていない。

そして刹那の直ぐ側まで寄つた大和は　　その無防備な頭に、思い切り拳骨を落とした。

「あやうんっー？」

「お、いい感触。これは体が戻つて良かつたと思えるな」

「へへッ！？」

ほとんど手加減なしの拳をまともに食らい、刹那は痛みに蹲る。

あまりの激痛に涙目になった。

「な、何すんの、大和さん！」

「お前がアホなこと言つからだろ？が。完全な自業自得だ」

顔を真っ赤にして怒る刹那に対し、大和はあくまでも冷静に答える。

そして刹那の鼻先に指を突きつけ、じつ問うた。

「一つ聞くが、なんで俺がこの世にダラダラ留まつてこないと思つ？」

「え……？」

予想外のことを聞かれ、刹那は言葉を失つた。

そんな刹那の様子を意に介さず、大和は続ける。

「もう俺には未練なんざこれっぽっちも残っちゃいない。自分の夢は叶えたし、唯一心残りだった刀子とも和解した」

「……」

「なのによ、どうして俺がこの世に留まっていると想つ?」

「……わからへん」

そう答えた刹那の頭に一発目の拳骨が突き刺さった。

地面で悶える刹那の頭上から怒声が届く。

「んなもん、テメエがいちいち放つておけないからだらうがッ！…」

その言葉を聞いて、刹那の動きが止まった。

次の瞬間、大和は刹那の襟を引っ掴み、無理やり自分と同じ目線まで持ち上げる。

顔が触れそうな程の至近距離で、大和の怒声はまだ続いた。

「もう二年もテメエと過じしてきたんだぞ！？　いい加減情も移るわッ！」

「辛いことがあれば、その場で泣かずに布団の中で俺を抱きながらメソメソ泣きやがって！ 錆びたせる氣か！」

「神鳴流の師範代が剣術を教えてくれなかつたら詠春さんに報告しろ！ 何の為の保護者だと思つてる！」

大和の腕に吊り下げる刹那は呆然とする。

自分と大和との関係について話していたのに、気が付けば過去のことで説教されている。

急展開すぎて、涙すら引っ込んでしまった。

だが、次の言葉はそれ以上の衝撃を刹那に『える。

「　忘れるな。俺はお前のために此処にいる。お前のためだけに
此処にいるんだ」

それは不器用な騎士の誓い。

かつて赤毛の少年の誓いを目にし、それを羨んだ少年が真似をした
だけのこと。

だが、朝焼けの中での誓いのように美しくはなかつた。

一人は泣き、一人は怒る、到底人には見せられない代物。

不細工で一方的な誓いを終え、大和は刹那の服を離す。

呆然としたままの刹那は地面に落ち、そのままペタンと座り込んだ。

「……」

「……」

双方共に、言葉はない。

大和は語るべき言葉を全て語つたし、刹那は大和の言葉を飲み込めていない。

氣まずい沈黙が場を支配し 雰囲気に耐えられなくなつた大和が立ち去りうつとする。

「あ……」

刹那は無意識に手を伸ばし、大和の袖を掴む。

その気になれば引きはがすことは簡単だつたが、大和はそうせずに立ち止まつた。

「……」

「……」

その体勢のまま、再び沈黙。

それが数分の間続き、そして大和が諦めたようにため息をつく。
果たして今日は何回ため息をついたどうか、などと考えながら振り向き、告げた。

「……帰るぞ」

大和は刹那の腕を強く引き、その体を自分の背中の上に落とす。

刹那の体は抵抗なくポジションに收まり、いわゆるおんぶの体勢になつた。

大和は刹那を背負つたまま、山の麓に向けて歩き出す。

相変わらず一人の間に言葉はない。

大和は微妙に早歩きでこの雰囲気から逃れようとするが、不意に背

中の服がわざと離された。

「…………がとう…………こまわ」

そんな声が耳に届くと同時に、背中にポツポツと暖かい感触。

「…………」

大和は無言で刹那を背負い直し、再び歩き始める。

背中の温もりを確かめるように、先程よりも、少しだけゆっくりの
ペースで

第十二話（後書き）

木「解せぬ」

主人公、デレるの回。

男のデレって誰得（ry

おかしいなあ……こんな話になる筈じゃなかつたのに。

外伝五（前書き）

更新遅れていますみません。

パソコンが御臨終なされてしまつて……

「はあっ、はつ……」

「なんじや、もうギブアップか？　だらしがないのう」

その空間には、二人の人間がいた。

一人は女。

鮮やかな薄紅色の着物を違和感なく着こなす、妙齡の美女だ

腰まで伸ばした黒髪は鴉の濡れ羽色の如き色彩であり、その色氣は男女の区別なく魅了するだろ？

それに加えて顔の作りも神懸かりのバランスで際立つており、まさに傾國の美女である。

そしてもう一人は男。

その男は薄紅色の着物の女の前で膝をつき、乱れた呼吸を元通りにしようと必死だった。

その目は非常に殺氣立つており、眼前の女を親の仇とばかりに睨めつけている。

余裕の態度で男を見下ろす女と、それを荒い呼吸で見上げる男。

誰の目にも異様な光景だった。

「まったく、五木家創始以来の天才だというから期待しておったのに、以前と変わらず「ゴリ押しか。そんなんじゃ、いつまで経つても妾は口説けぬぞ?」

「くつ……」

だが、男のことを知る人間からすれば、この光景は異様どころの話ではない。

それこそ、自分は夢でも見ているのか、といつ思いを抱かせるだろう。

何せ、その膝をつく男は名はあの五木大和なのだから。

「どうして……」

「ん？」

「どうして、僕に力を貸してくれないんだ……！」

大和が悲痛な声を上げる。

薄紅色の着物の女は、その叫びにまったく興味を惹かれないらしく、これみよがしに欠伸までしてみせた。

「どうしてと言われてもの？……正直な話、今のお主に力を貸す気が全然起こらんのじや」

「ふざけるなッ！ せめて納得のいく理由を話せよー！」

その女の態度に、大和は激昂する。

震える膝に喝を入れて立ち上がり、手に持った刀を女に突きつける。

「どうして僕を受け入れてくれないんだ！ 答える 鏡花水月！」

二人が対峙している空間、それは広大な草原だった。

ただし草原と言っても草だけではなく、ぽつぽつと背の高い木も存在し、サバンナを縁豊かにしたかのような場所だった。

ここは大和の精神世界。

五木家秘伝の斬魄刀戦術は、この精神世界で斬魄刀を屈伏させることがよって完成する。

大和は今までそうしてきた。

しかし

「ほれほれ、こつちぢゅぞー」

「舐めるなあツ！」

大和は鏡花水月と呼んだ女性に向かって走る。

音すらも置き去りにする歩法、瞬歩による接近は目視など不可能。

大和によつて独自に改良された瞬歩は、京都に伝わるそれより遙かに速く、鋭く、隙がない。

対して鏡花水月はまったく身構えず、一ニヤニヤと笑いながら自分に迫りくる大和を見ていた。

大和は刀を振り上げ、無手の鏡花水月に向けて最大加速をする。

そして、大和が刀の間合いに鏡花水月を捉えた瞬間　『突如として眼前に出現した』樹木に、大和は顔を思いきり打ち付けた。

「が、あつ……！」

「はつはつは、大当たりじゅ」

たまらず、大和は鼻を押さえて数歩下がる。

その手の隙間から赤黒い血がボタボタを垂れ落ちた。

「本当に学園せんやつじやのう。姿には勝てんと何度も言つてある
ではないか」

そんな大和の様子を見て、鏡花水月が呆れた表情を見せた。

だが、大和は鏡花水月を射殺さんばかりに睨みつける。

「つる、せえつ！」

「まつたく……頑固者め」

大和は再び鏡花水月に向けて走る。

今度は直線ではなく、カーブを描いて回り込む形だ。

さらに腕を前方で交差させ、障害物に備える。

そして鏡花水月の側面に回り込んだところで、姿を現した石に足
をとられて転倒した。

「無駄じゃと言つておられた。お主の五感と知覚能力は既に把握済みじや。見えず、聞こえず、匂わず、触れず、感じることすらできん状態で何ができる」

「ぐつ……」

先程からこの繰り返しだった。

大和が突っ込み、鏡花水月があしらつ。

そして、それを可能とする鏡花水月の能力　完全催眠。

対象者の感覚の全てを操るこの力に捕われれば、逃げる術はない。たとえ無類の戦闘能力を誇る大和であってもだ。

視覚を操られれば、存在していた樹木を避けることもできない。

触覚を操られれば、手に持っていたはずの刀をいつの間にか落としていた、などといふ事態もあり得る。

自分の感覚を信じられぬというのは戦闘者において致命的だ。

大和は鏡花水月を睨むが、いや、それ以前の問題として　『本当に鏡花水月はそこにいるのか？』

そんな疑念を抱いた瞬間、鏡花水月の姿が溶けるように消える。

「そろそろ気が済んだか？」

その声は、すぐ背後から聞こえた。

「……」

大和は振り向かない。

振り向いても無駄と分かっているから。

たとえ背後に鏡花水月の姿があったとしても、それすら本物とは限らない。

今の大和に抗う術は無かつた。

「なんでだよ……」

大和は俯いて呟く。

「それだけの力があるのに、どうして僕に力を貸してくれないんだよ……！」

手に持った刀を、間接が白くなるほど強く握りしめる。

「あの時にお前の力があれば、僕は……！」

誰も殺さずに済んだのに。

一か月前、大和は総本山へ攻め込んできた西洋魔術師の軍勢を、皆

殺しにした。

その後関西を脱走。

魔法世界に密航し、目的もないまま旅をしている。

現在はオステイアという都市の安宿に身を置いているが、これからのことは何も決めていなかつた。

「……」

一階にある自分の部屋のベッドに座りこみ、大和は思考の海に沈んでいく。

一階の酒場を兼ねた食道から、アリカ王女は美しい、聰明だなどと聞こえてくるが、まったく興味は惹かれなかつた。

あの時自分はどうするべきだったのか、大和はそのことしか考えられない。

(僕は、間違つていたのか……?)

「」の力で誰かを救おうなどと、傲慢でしかなかつたのか……?

膝の上に刀を置き、目を閉じて集中する。

壁に立てかけておいた刀を手に取り、再びベッドに戻つて座禅を組んだ。

大和はゆっくりと体を起こす。

「……あいつの、力があれば」

これをひたすらに振り続けた意味は

ただ頑丈であるという以外に特徴のない刀。

仰向けに倒れたまま首を捻り、立てかけている自分の刀を見る。

安宿のベッドに相応しいスプリングが耳障りな音を鳴らした。

大和は後ろのベッドに倒れる。

思い起こすのは、五木家に伝わる秘伝の書物。

『鏡花水月』と記された書物の中身。

唯一つ、大和が御しきれなかつた斬魄刀。

(あいつの力さえあれば、こんな結果には……)

思考力の低下した今の大和には、その一つしか考えられない。

そして、妄執と後悔に支配された大和は解説を紡ぐ。

屈伏させるためなく　　ただ、恨み事をぶつけるために。

「砕ける」

「この草原は、漠然と『世界が平和でありますように』と考えているお前の心象風景じや。この世界に外敵はなく、天災もない。何も変わらない優しい世界」

鏡花水月の声が大和に届く。

最早大和に抵抗の意思はない。

草原に膝をつき、力なく頭垂れていた。

「斬魄刀に好かれない典型じやな。あ奴らは一瞬の、煌く命に価値

を見出す。変わらぬお主に興味は抱くまい」

「……悪かつたな、面白味のない男で」

「ふふ、そう卑屈になるでない。少なくとも妾はお主の生き方も気に入っているぞ?」

「つ、じゃあつ！」

大和は弾かれたように立ち上がり、背後の鏡花水月に詰め寄りつつとした。

だが振り向いた瞬間、口元に人差し指を置かれ、慌てるなどいう合図を送られる。

「お主の生き方も氣に入つてあるが、それで力を貸すかは別問題。お主も知つてのとおり、妾の能力は他の斬魄刀と比べてもかなり危険じやからな」

「僕は人を傷つけるような使い方はしない！ 誰かを助けるためだけに使つー！」

「それは不可能じや」

必至に叫ぶ大和に対し、鏡花水月は断言する。

「感覚を支配する、認識を誤魔化すなどと云つが、妾の能力は結局のところ『その人間の全てを支配する』といつもの。下手な暴力よりも余程タチが悪い」

まるで、聞き分けのない子供に言い聞かずよつた口調だった。

そして今の大和は聞き分けのない子供そのもの。

鏡花水月の言い分を理解せず、理解しようとも思わなかつた。

「それが何だつてんだ！　お前の能力なら、西洋魔術師達を無傷で捕らえることだつて出来たはずだろ！」

「……ああ、その通りじゃ」

「ならどうして！」

「五木大和」

静かな、しかし重く響いた鏡花水月の声に、大和の動きが止まる。

「お主の周りの人間が、全て妾の作りだした幻想だと言われたら…
…どうする？」

「……え？」

鏡花水月の急な質問に、大和は反応することができない。

自分の身近な存在と言えば刀子に詠春、鶴子に素子だらう。

彼らが幻想であるなどと、今の鈍った頭では想像もできなかつた。

「……今のお主には、何を言つても無駄か」

鏡花水月はため息をつく。

直後、鏡花水月の体から尋常でない量の気が溢れ出した。

「なつ……」

本気の自分を遙かに凌駕するであるひつ氣を叩きつけられ、大和は思わず後ずさりした。

「どうした？　言つておくれ、これは催眠ではないぞ？」

「そんな……馬鹿な……」

呆然とする大和の前で、再び鏡花水月の姿が消える。

今回のは先程の催眠とは違う、ただの高速移動。

しかし、その雷すら凌ぐスピードに、大和の目はついていけず
「覚えておけ。妾は完全催眠の危険性を理解しない人間に、力を預
ける気はない」

腹部に強い衝撃を受け、大和の意識は闇に落ちていった。

「……和さん……大和さん！」

すぐ真後ろからの呼びかけに、大和は我に返る。

「ん……どうした刹那

「いえ、なんだかボーッとしていたから」

おんぶをしている刹那にそう言われ、自分が深く考え方をしていたことに気がついた。

過去を思い返していたのは十分か一十分、もしくはそれ以上だろう。

その間の山道は無意識に下りていたらしい。

自分らしくもない、と大和は心中で毒づいた。

「どうかしたんですか？」
「私を背負うのに疲れたとか……」

「お前如きの体重で俺が参るかよ……ちよつと、黒歴史を思い出していただけだ」

「黑歷史？」

刹那は言葉の意味がわからないのか、首を傾げる。

「ふー、やうだな……思こ出すと、わああああいつでござったくなる思
い出すの」とだ

少なくとも大まかな意味では合っているはずだ、と大和は思う。

「わあああ、ですか？」

「ああ。お前で例えると、ホラー映画を見た夜にちよつと漏り」

「やつ、そんな感じ」

背中がポコポコ殴られるのを感じながら、大和は鏡花水月の言葉を思い出す。

完全催眠の恐ろしさを理解しない人間に、力を預ける気はない。

あの時の自分ではまったく理解できなかつた。

人の感覚を支配するといつ恐ろしさを。

(一十年も経つてようやく……それが分かつた気がする)

それは、とても単純な答えだつた。

鏡花水月の力があれば、対象の相手に都合のいい現実を与える」とができる。

過去の大和ならば、間違いなくそのように使用するだらう。

それが相手にとつての幸せだと確信して。

そう、『完全なる世界』と同じように。

「ズモ・エンテレケイア

人にとっての幸福を決め付ける行為。

それは、祖父に殺しを強要された大和が最も唾棄した行動だ。

にも関わらず、大和は鏡花水月の力を求めてしまった。

(馬鹿だな俺は……本当に)

鏡花水月に拒絶されるのも当然だ。

仮に鏡花水月に力を貸してもらつていたら、大和はその力に溺れ、数多くの人生を貶めていただろう。

自分の人生すら嘘と欺瞞に満たされていて「氣づく」ともなぐ。

「大和さん！　あのことは絶対誰にも言つたあかんからねー…？」

「わかつたわかつた。俺の胸の中に、大事にしまつておいてやる

「しまつたらあかん！　今すぐ忘れて！」

「注文の多いやつだな……」

刹那は相変わらず大和の背中で慣れ続けていた。

普段の大和ならば背中から落とすぐらいはしただらうが、今日は少し違つた。

甘んじて刹那の幼い拳を受け続ける。

「この感触もまた、刹那がここにいる証明なのだから。

「そういや、お前がいつもしていの髪留めはどうした？」

ふと、大和は疑問を口にする。

今日の刹那はいつもとは違い、髪を横で縛つておらず、左右対称の髪型だった。

「あれは、鬼の攻撃をくらった時に無くなってしまった……」

「へえ……」

「や、やつぱり変ですか？」

不安そうに尋ねる刹那の声を聞いて、大和に悪戯心が湧く。

「いや……意外と似合つてゐる」

「ツ！？」

結局、山を降りるまで大和は刹那に叩かれ続けた。

外伝五（後書き）

正直、今までで一番やってしまったと思ひ回。

反省も後悔もしています。許してください。

もしも大和がアリカの話題に興味を抱いていたら、アリカルートに突入していたかも。

いわゆるH-Fルート。

大和もたまにはフラグ建てるのに失敗します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0818v/>

ネギま！で斬魄刀

2011年11月14日07時15分発行